はじめに

「高1高2など早い時期から入試現代文の読み方・解き方に習熟していくべきだ」「高三からスタートでは十分なベース構築の途中で入試に突入してしまう生徒も出てくる」。これは予備校で主に受験学年を対象に授業をしてきた私の実感です。入試までに読んでおくべき、外せない文章やテーマがいくつかあります。それらの理解があれば、初めて出会ったはずの文章も読みこなしていけます。そうした入試現代文のリアルなベースメントをつくりたい。そうした思いからこの講座の映像とテキストをつくりました。

入試の現代文で問われていることとは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。心理テストではありません。自由な作品鑑賞・解釈力でもありません。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの**書き込みが基本**です。**赤／青／緑**（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）**の三色**をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テスト現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ１点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、１点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（１点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（１点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性

（例）［心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。］この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒ 一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 対比混乱の誤り ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 同一性分断の誤り ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗。同質性分断**ともいう。

3 正しい対比喪失の誤り ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 不当な全称判断 ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 不当な限定判断 ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょう）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 不当な価値判断 （不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣をもちこんだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持ち」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方

……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランCをオススメします。

プランA……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランB……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランC……第三講までプランBで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランA
プランD……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、AとBを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランA、奇数の講義ではプランBというように

予習の時間

＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講のみ予習要りません。その１その２の二本立ての講も合計で二〇分）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンCがオススメです。

パターンA……右の基本時間通り
パターンB……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンC……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率（例えば第二講なら全部で九題。六題以上正解なら目標クリア。記述問題は、各「ポイント箇所」を一題と数えましょう）

○私大………………（第一講その２・二講・四講・五講その１・七講・九講その１その２・十講・十一講・十三講その１その２・十四講）→**六五％以上**
○国公立大…………（第五講その２・六講・十二講）→**五五％以上**
○共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その１・三講・八講）→**八〇％以上**
○復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、現代文の場合、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。スタディサプリでも多くの講座が用意されています。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。本来、現代文の理解力に学年など関係ないのですから。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Z会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『Z会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『入試精選問題集７　現代文』（河合出版）……難関私大および国公立大二次向け
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Z会編集部（Z会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（KADOKAWA）

教材選定について

- 有名難関大学の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（日本文化論・科学論・文学論・宗教論・芸術論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第一講　その１　哲学・時間論……p.11
その２　認知科学・時間論……p.12
第二講　芸術論・日本文化論……p.15
第三講　《小説１》　ビフォア・アフターの対比……p.19
第四講　スポーツ論・文化人類学……p.27
第五講　その１　《随筆》　旅論……p.33
その２　建築論……p.34
第六講　科学論・翻訳論・異文化理解論……p.40
第七講　宗教論……p.46
第八講　《小説２》　人物相互のグループ分け……p.51
第九講　その１　哲学論……p.59
その２　文学論……p.60
第十講　脳科学・コミュニケーション論……p.66
第十一講　宗教論・日本文化論……p.73
第十二講　科学論・心理論……p.79
第十三講　その１　趣味論・工芸論……p.85
その２　現代社会論……p.88
第十四講　《随筆》　道について……p.93

第一講その１　哲学・時間論〈選択肢中心〉

われわれは平生、「時がたつ」その仕方について、どのようなイメージをもっているであろうか。われわれの日常の経験では、ひとを待つときの時間は長く感じられ、何かに夢中になっているときの時間は短く感じられる。時間の流れ方は、状況によって異なるかに見える。しかし、幼児ならともかく、多くの成人は、そうした時間の流れ方の違いはいわば**主観的**な感じ方の違いであって、本当の**客観的**時間は、主観のそのときどきの状況とは関わ（かか）りなく、刻々均一に経過しつつあり、その均一さは、時代や場所の違いを越えた**絶対的**なものだ、と考えていることであろう。事実、私が何かに夢中になって、時間を短く感じているその間に、「標準時」に合わせた時計が刻々と時を刻み、それを他の人が見て退屈するということもありうるであろう。それに、どんな自然科学者や歴史学者も、仮に時代の違いによる地球の回転速度の変化について語ることがあるにしても、時間の経過それ自体が時代によってその速さを変えるといった言い方はしないと思われる。われわれの**常識的**な捉（とら）え方からすれば、時間はやはり、天上か地上かの違いには無関係に、永遠の昔から現在に至るまで全く同一の速さで流れ来（きた）り、永遠の未来に向かって流れつづけていく全宇宙的な普遍の流れなのである。

（滝浦静雄『時間―その哲学的考察―』）

問１　第一段落では、「時間」について二つの方向からのとらえ方が示されている。次に掲げる［A〜D］は、「時間」に関連して用いられている語（太字で示してある）であるが、これらを、本文に従って二つのグループに分けるとすれば、どのように分けたらよいか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

［A　主観的　B　客観的　C　絶対的　D　常識的］

①（A・C）と（B・D）　②（A・D）と（B・C）　③（A）と（B・C・D）
④（B）と（A・C・D）　⑤（D）と（A・B・C）

第一講その２　認知科学・時間論　〈選択肢中心〉

人間は誰しも退屈することがある。もちろん、強度のある退屈は必ずしも悪いものではない。そもそも退屈は、十分な時間の余裕がなければできない。時間は、生命にとってもっとも貴重な資源である。限りある時間を限りないものと感じることができれば、それは望外の幸せ(A)である。退屈とは、［B］のようなものである。

次から次へと目新しく変わる情報がもたらされる現代社会では、むしろ退屈することが一つの才能である。一見新しく見えても、実はあまり代わり映えしないではないかとメタ(注)認知を立ち上げることが重要である。現実に存在するものとは異なる仮想の流れを思い浮かべ、希求することが創造性の一つの水脈であるとすれば、退屈はその入り口になり得る。

人生は有限である。その有限の人生の中で、無限の可能性を表象できることは、意識の持つ不思議な「志向性」の働きである。

（茂木健一郎の文章による）

（注）メタ……他の語の上に付いて「超」「高次」の意を表す。

問１　傍線部Ａ「望外の幸せ」とはどのような意味で用いられる表現か。最も適当なものを、次から選びなさい。

① 望んでも決して叶(かな)うことのない幸せ
② 望みとは比較にならない小さな幸せ
③ 望めば望むほど遠ざかっていく幸せ
④ 望んでいたよりも遥(はる)かに大きな幸せ
⑤ 望みとは別なかたちで実現する幸せ

問２　空欄［B］に入る最も適当な表現を、次から選びなさい。

① 有限と無限を往還する航海術
② 有限を無限にする錬金術
③ 有限にも無限にもなれる変身術
④ 無限から有限を生む産婆術
⑤ 無限も有限もない飛翔術

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　滝浦静雄＝たきうら　しずお（一九二七〜二〇一一）東北大学哲学科卒・哲学者・東北大学名誉教授
●その２の筆者　茂木健一郎＝もぎ　けんいちろう（一九六二〜）東京大学理学部と法学部卒・同大大学院理学系研究科修了・脳科学者

語句

主観的↓感覚的・感情レベル・サブスタンス（根底根幹に主体者、人がいるという感じ）
客観的↓物理的・対象的・オブジェクティブ
普遍的↓いつでもどこでも当てはまる・ユニバーサル・「遍」は訓読みで「あまね（く）」
cf 不変↓変化なし　不偏＝かたよりがない・不偏不党　遍在＝へんざい↓どこにでもある　偏在＝へんざい↓かたよった所にしかない
絶対的↓相対的の対義語で、比較を絶した圧倒的な状態。（例）絶対王政　cf「絶体絶命」は体と命のピンチ！
希求＝ききゅう↓強く願い求めること
錬金術＝れんきんじゅつ↓卑金属から貴金属を生もうとする魔術的化学・アルケミー
産婆術＝さんばじゅつ↓古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、対話を通じて相手の青年などが勝手な思い込みを脱して真実にいたる手助けをした。そうした自らの行為を知の産婆術と呼んだ

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）絶タイ的に正しい学説などない　①対　②体　③帯　④滞　⑤耐
（イ）人類に普ヘン的に当てはまる真理だ　①偏　②遍　③変　④篇　⑤片
（ウ）王様は退クツな日々をもてあます　①窟　②掘　③堀　④屈　⑤靴
（エ）これこそ世界標ジュンの市場原理だ　①順　②純　③潤　④巡　⑤準
（オ）時間のケイ過を計ってみよう　①経　②形　③傾　④系　⑤契
（カ）前例のない芸術作品をソウ造する　①装　②想　③相　④総　⑤創
（キ）現実と違う物語を仮ソウしてみよう　①相　②層　③創　④想　⑤送
（ク）意識は強い志コウ性をもつ　①公　②向　③高　④抗　⑤考
（ケ）これは貴チョウな蝶の標本です　①徴　②兆　③重　④長　⑤超
（コ）頭の中でクリアに表ショウしてみる　①賞　②章　③省　④象　⑤翔

第二講　芸術論・日本文化論〈選択肢中心〉

アンドレ・マルローが日本へ来た時、那智の滝を見て言ったという言葉を、私は時々思い出す。日本人の芸術観について考える場合、何時も一つのこだわりとして思い出されてくる。彼は自ら申し出て那智まで出掛けたらしいが、滝を目にしてこう言ったという。「自分は自然にはめったに感動しない男だが、これには本当に感動した。」

自然に感動しないという心情は、日本の芸術家にはあまりないのではないかと思う。そのことのプラス、マイナスは今は問わぬとして、彼等は自分の技巧のかぎりを駆使した造型物のはてに［Ａ］を漠然と考えているようである。ものごとを対立的に捉えるという習性が、日本人はヨーロッパ人に比して弱いことが、原因かもしれない。自然と人工、あるいは芸術という関係を、対立的には考えなかった。人工の行き着くはてに、自然を見た。

明治以後、英語のネイチュアの訳語として、自然という熟語は作られた。それ以前には、自然とは、ジネンと読んで、本来そうであること、「あるべきやう」に言った。むしろ、造化が自然界を意味したが、それは単に、人間に対する自然なのではない。それは、［Ｂ］で、日本人の芸術観、あるいは美意識の根底には、どうもそのような思想があるようだ。

そういった働きが自然にあるということは、やはり自然に生きた生命を感じていることである。生物と同じく、地水火風といったものにも生命を感じ、威力を具えた霊的存在を感じている。アニミズムの思想を、日本人は心のどこかに、今も失わないでいる。自然のなかのその霊的なものを、自分の作り出した作品にも宿すことが、日本の芸術家たちの願いとなる。［Ｃ］ということは、あらゆる芸術家たちの願いであるが、日本の芸術家たちはその先を考える。造型は第一の目標でなく、その先に生命を究極の目標として考えている。芭蕉は「ものの見えたる光、いまだ心に消えざる中に言ひとむべし」と言う。目標は「かたち」でなく、「ひかり」であり、「いのち」である。

目標のはてに「［Ｄ］」でなく、「［Ｅ］」を置いているからこそ、日本（あるいは東洋）では、西洋では考えられないようなものが、芸術の仲間入りをする。茶の湯とか、生花とか、陶器とか、庭とか、書とか。このような芸術の目標を「［Ｆ］」に置いたら、それは堕落する。つねに「［Ｇ］」の果てに「［Ｈ］」を思い描くことが肝要である。一瞬の生命の高揚が遂げられ

れば、あとは［Ｉ］を止（とど）めなくても足れりとする覚悟が、日本の芸術家にはあった。

（山本健吉『「いのち」と「かたち」』による）

（注）アンドレ・マルロー……フランスの小説家、政治家。
アニミズム……自然界のあらゆる事物に精霊、特に霊魂を認める考え方。

問１　空欄［Ａ］に入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選びなさい。
①　神との合一　②　人間の理想　③　完全に似せること　④　自然との一体化

問２　空欄［Ｂ］に入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選びなさい。
①　神が自然を作ったという考えからきたもの　②　人工物に手を貸して完成させてくれる働きのこと
③　人工物をも全て含んだ世界　④　人間と対立した厳しい大自然のこと

問３　空欄［Ｃ］に入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選びなさい。
①　人を感動させる　②　真理を映し出す　③　形を作りだす　④　美を写し出す

問４　空欄［Ｄ］〜［Ｉ］には、「かたち」か「いのち」のどちらかの語が入る。それぞれどの語が入るか、答えなさい。
①　かたち　②　いのち

第二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者＝山本健吉（一九〇七～一九八八）慶應義塾大学国文学科卒・文芸評論家。「日本の庭」の考察は、センター試験でも登場

●松尾芭蕉（一六四四～一六九四）江戸時代前期（元禄）の俳人。主な紀行文『奥の細道』（江戸～東北～大垣）・『野ざらし紀行』（江戸～東海道～近畿～木曽路～江戸）・『笈（おい）の小文（こぶみ）』（江戸～伊賀～明石）

芸術関連のことばで……

○「芸術は自然を模倣する」…アリストテレス（古代ギリシャ・哲学者）

○「自然は芸術を模倣する」…オスカー＝ワイルド（一九世紀・英・小説家）素晴らしい芸術作品を見た後では、自然の風景の眺めも違って見える。例えば夕焼けも絵画作品のように見えること

○「原物には誰も感心しないのに、絵になると似ているといってみんな感心する。絵とは空しいものだ」…ブレーズ・パスカル（一七世紀・仏・哲学者・数学者）

語句

造化＝ぞうか↓古い日本語でネイチャーを意味する

アニマ↓ラテン語で「魂・霊」　派生語に英語のアニマル、アニメーション

cf 英語ならゴースト、スピリット　ドイツ語ならガイストが「魂・霊」を意味する

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）芸術家がもてる技コウの限りを尽くす　①講　②効　③巧　④功　⑤考

（イ）使える素材をク使して仕上げる　①駆　②苦　③供　④久　⑤九

（ウ）バク然としていた目標が鮮明になる　①幕　②獏　③爆　④莫　⑤漠

（エ）工作機械が抜群のイ力を発揮する　①意　②威　③偉　④異　⑤射

（オ）究キョクの味を求めて全国を行脚　①局　②曲　③極　④旭　⑤棘

（カ）一瞬の心の高ヨウ感を得ました　①要　②揚　③陽　④洋　⑤揺

（キ）作家としてのカク悟と責任を問う　①覚　②核　③確　④角　⑤格

（ク）工芸作家としてトウ器を出展した　①唐　②塔　③党　④陶　⑤淘

（ケ）戦においては敵をだますのがカン要　①観　②勘　③感　④漢　⑤肝

（コ）目標なくダ落した生活を反省する　①唾　②駄　③堕　④惰　⑤妥

第三講《小説1》ビフォア・アフターの対比〈選択肢中心〉

次の文章は、岡本かの子の小説「鮨」の一節である。本文中に登場する子供は、魚や肉などを食べると身が穢れるような気がして、無理に食べると吐いてしまうほどであった。本文はそうした子供に、母が鮨を握って食べさせる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい茣蓙を敷き、俎板だの庖丁だの水桶だの蠅帳(注)だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は、自分と俎板を距てた向こう側に子供を座らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、そこで――」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこん噎せた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。

蠅帳の中には、すでに鮨の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひときれを取り出してそれからちょっと押さえて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼き鮨だった。

A「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで食べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交じったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合い――それをひとつ食べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身のうちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいっと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蝿帳から具の一片(ひときれ)を取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗(のぞ)いた。すると母親は怖くない程度の威丈高になって

「何でもありません、白い玉子焼きだと思って食べればいいんです」

といった。

かくて、子供は、烏賊(いか)というものを生まれて始めて食べた。象牙(ぞうげ)のような滑らかさがあって、生餅(なまもち)より、よっぽど歯切れがよかった。子供は烏賊鮨を食べていたその冒険のさなか、詰(つ)めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現さなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、脅かされるにおいに掠(かす)められたが、鼻を詰まらせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼(そしゃく)のために、上品なうま味に衝(つ)きくずされ、程よい滋味(じみ)の圧感に混じって、子供の細い咽喉(のど)へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が食べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、B あたりを広く見廻(みまわ)したい歓びを感じた。むずむずする両方の脇腹(わきばら)を、同じような歓びで、じっとしていられない手の指で掴み掻(か)いた。

「ひ　ひ　ひ　ひ」

無暗(むやみ)に疳高(かんだか)に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだと見てとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落としたりしてから、わざと落ちついて蝿帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」

子供は焦立(いらだ)って絶叫する。

「すし！　すし」

母親は、嬉しいのをぐっと堪える少し呆けたような――それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げまあす」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の眼の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鮨を握り出した。同じような白い身の魚の鮨が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目であった。

子供は続けて食べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が掴み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鮨が握られて、掴み取られて、食べられる――その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鮨は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鮨は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落とすものもあった。C<u>子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調えて食べると余計おいしい気がした。</u>子供は、ふと、日頃、内しょで呼んでいる（注）も一人の幻想のなかの母といま目の前に鮨を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もっと、ぴったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

自分が、いつも、誰にも内しょで呼ぶ母はやはり、この母親であったのかしら、それがこんなにも自分においしいものを食べさせてくれるこの母であったのなら、内密に心を外の母に移していたのが悪かった気がした。

「さあ、さあ、今日は、この位にして置きましょう。よく食べておくれだったね」

目の前の母親は、飯粒のついた薔薇いろの手をぱんぱんと子供の前で気もちよさそうにはたいた。

（注）

○蝿帳――蝿を防ぐために網を張った食品入れ。

○も一人の幻想のなかの母――子供は、家族のなかでも母が一番好きなのだが、ほかにもう一人の母がいるような幻想を

抱いていた。

問１　傍線部Ａ「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで食べても好いのだよ」という言葉に、母親のどのような気持ちが表現されているか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　ひよわな子供がたくましく育ってほしいという思い
②　不器用な子供の苦労を省いてやろうとする思いやり
③　神経質な子供の気持ちを楽にしてやろうという心遣い
④　かたくなな態度をとる子供の反発を避けようとする気遣い
⑤　聞き分けのない子供にかみくだいて分からせてやろうという親心

問２　傍線部Ｂ「あたりを広く見廻したい歓び」とは、どのような歓びか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　自分の力でどんな物でも食べられるようになったという歓び
②　難しいことができたことを胸を張って示したいような歓び
③　もはや他人の目を気にする必要がなくなったという歓び
④　心が自由になって急に視野が広くなったような歓び
⑤　やっと獲得したものを周囲にも分かち与えたいような歓び

問３　傍線部Ｃ「子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調えて食べると余計おいしい気がした。」とあるが、その気持ちの説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　母親が自分のために懸命に握ってくれた鮨が、不細工な形をしていることに、却って同情を覚え、自分で形を調えなおしていっそうおいしく食べようという気持ちになったのである。
②　不細工な鮨に、これまで神経質だった自分の姿が重なって、却っていとおしく思われ、さらに自分で形を調えることで

困難を克服する歓びまでが感じられるようになって、いっそうおいしい気がしたのである。
③　鮨の形が不細工なところに、却って食べ物を押しつけない母親の寛容さが感じられ、さらに自分で形を調えさせようとする母親の心づかいに気付き、鮨がいっそうおいしく感じられたのである。
④　子供の心をさそうように大きさを違えて握られた鮨の不細工さに、却って母親の愛情を感じ、それに手をふれて形を調えることで、母親の愛情が伝わってくるように思われ、いっそうおいしい気がしたのである。
⑤　母親の手で握られた不細工な鮨が、それまでの嫌悪感を覚えさせず、却って好ましさを感じさせ、さらに自分で形を調えることでより親しいものとなって、いっそうおいしく感じられたのである。

問４　本文を通して、母と子の関係がどのように描かれているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。
①　苦手としていたものを自分の努力で克服していき、その新たな心の体験を言葉にはならない歓びとして体で表現するまでに成長をとげたわが子を、あたたかく見守りながら、あらためて母としてのさわやかな喜びをかみしめている母親の気持ちが、初夏の季節感と照応するように描かれている。
②　子供の気持ちをときほぐし励まそうとする母親の気持ちが、リズミカルな言葉づかいや、たしなめたりはやしたりする態度の抑揚を通して描かれ、さらに新たな体験を味わい、不安を克服していく子供の歓びと心のたかぶりが、そのまま母への親近感のふくらみに重なるように描かれている。
③　好奇心を刺激された子供が、新たな体験をくぐりぬけていくなかで、その心理の動きがしだいに外面的なものから内面的なものへと沈潜して、ついには無意識のうちに抱いていた母への嫌悪感や反発といった深層の心理を浮き彫りにするように描かれている。
④　子供のいやがっているものを時にはおどすような態度で無理強いする母親像が、しだいに子供の深層部分に入りこみ、それまで抱いていたやさしい理想的な母親像との間に微妙なくい違いを感じさせられ、それにとまどい、複雑な葛藤（かっとう）をみせる子供の心理の成長が描かれている。
⑤　好奇心を刺激したり、新たな体験を通して不安を克服する歓びを感じさせたりしながら、しだいに自分の思うような反

応を示してくれるわが子を見て、日頃子供が抱いていたと思われる母親像をも訂正させることができたと確信する、母親の限りない喜びがいきいきと描かれている。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者＝岡本かの子（一八八九〜一九三九）跡見女学校卒・小説家。「芸術は爆発だ」と叫んだ芸術家の岡本太郎の母親。
この筆者は、二〇一四年度センター試験でも登場しています

語句

威丈高＝いたけだか→相手に対して威圧的。居丈高とも書く
cf関連語……偉丈夫＝いじょうふ→体格の立派な、たくましい男
大丈夫＝だいじょうふ→人格的に立派な男・ますらお
虎の威を借る狐→権力や勢力ある人物の力をかりていばる小人物
葛藤＝かっとう→人間関係のもつれ、いざこざ。心の中の背反する欲求や感情の戦い

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）酢飯のほどよいサン味を確かめる　①参　②惨　③餐　④酸　⑤三

（イ）人生初の大きな冒ケンに出かける　①剣　②険　③健　④見　⑤顕

（ウ）広大な領地を征フクする　①福　②復　③服　④腹　⑤副

（エ）軍備の拡張競ソウに明け暮れる　①相　②送　③走　④争　⑤壮

（オ）形が整わないで不サイ工である　①菜　②細　③才　④裁　⑤栽

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）威丈高

①威圧するような　②背伸びして　③上から見下すように

④他人の権威を借りて　⑤近寄りがたく

（キ）きまり悪い

①決断力がない　②体裁悪く恥ずかしい　③周囲の目が厳しい

④潔さがたりない　⑤時間の都合がつかない

（ク）掠める

①強く香る　②一瞬よぎる　③有無をいわせない

④からめとる　⑤脇に押しのける

第四講　スポーツ論・文化人類学〈選択肢中心〉

一つのチームが、孤独な叛乱(はんらん)を最後まで貫こうとしている。役割遵守を前提に守備的布陣を敷く組織的フットボールに背を向け、プレーヤー一人一人の個性と直感力の発露をのびのびと肯定する［Ⅰ］なブラジル。自由な快楽にあふれ、瞬間のプレーに陶酔できるチームをしばらくぶりにワールドカップの場で見たような気がする。

南米予選で苦戦し前評判の低かったブラジルであったが、韓国での一次リーグ三戦を全勝で通過して存在感を示し、その後の攻撃的フットボールも止まるところを知らない勢い。復活したロナウドを筆頭にリヴァウド、ロナウジーニョの三人で構成された前線の連携の創造性と攻撃本能は、痺(しび)れるほどすばらしかった。

だが日本のメディアは、予選から見慣れたブラジル守備陣の不安定さを指摘しつづけた。個人技に頼るだけのチームであり、組織的守備戦術を欠いた、「時代遅れの」チームであると暗に批判もした。とりわけ監督経験者のコメンテーターが、連日のようにそうした不安を署名記事にし、攻める快楽よりも失点する不安を強調することで、勝敗原理の支配のなかでわたしたちのフットボール観戦の文法がいかに抑圧されているかを、はからずも代弁した。

現代ヨーロッパにおいて主流となった、中盤からプレスをかけつづける守備的戦術を起点としながら組織的な動きのなかで素早くパスを回して攻撃をしかけるフットボールは、基本的に「勝利」が絶対視されることで成立する戦略である。ゴールへといたる創造的な過程やゴールそのものの示す強度の質を問うことなく、選手を働く駒にみたて、［Ⅱ］で均質な「得点」に還元されてしまったゴールを一つでも多く奪えば勝利するというゲーム上の皮相な現実をそのまま受容する冒険心なき感性が、結果がすべてと考えるこの勝利至上主義的な戦術を完成させた。

［Ａ］国家の威信がかかるＷ杯という場において、勝利至上主義はより強い絶対性を獲得する。そこでは、結果だけを求める退屈なリアリズムが、美しさにこだわる遊戯的なファンタジーへの欲望をつねにねじ伏せるのである。

今回のＷ杯もまた、この構図を見事に再現した。ヨーロッパ的合理戦術の渦中にありながら、余剰としてのファンタジーや個人技にこだわりを見せるフランス、イタリア、スペインといったチームの奮闘は、その［Ｂ］によって空しく中途で立ち消えて

いった。ファンタジーと組織の奇跡的合体を予感させたアルゼンチンも、イングランドやスウェーデンの、十一人で守るもはやフットボールとは呼びえない極端な守備的布陣を突き破れず、ペースを乱しフットボール的運を喪失したまま敗退した。

ただひとりブラジルだけが、失点することへの恐怖を忘却したかに見えるバックスの破天荒な攻撃参加と、フォワードの目もくらむ美技とインスピレーションあふれるゴールの数々によって、勝敗原理によって曇らされたフットボールの別の快楽原理が存在しうることを示そうとしている。

日本での開幕日に、8対0という記録的な大差がついて凡戦といわれたドイツ対サウジアラビアの試合は、ある意味でいま「なにがフットボールなのか」を問う、きわめて［Ⅲ］なゲームだったともいえる。体力、戦術、精神的強靭さ、あらゆる面においてドイツがどれほど優位にあったとしても、このゲームは「勝つことだけでは美しくない」というフットボール的真理を見事に体現した試合でもあったからだ。

守りを固め、カウンターのサイド攻撃から中央にクロスを上げて頭で合わせる。機械のようにプログラムされたこの速攻の戦術を九〇分やり通す［Ⅳ］な「魂」。だがそれは、フットボール的機知と遊戯性と本能への信頼を欠いた、心なき魂ではないのか。ドイツは退屈に得点しつづけ、サウジのわずかな攻撃の芽をも粗っぽいスライディングタックルでことごとくつぶしつづけた。一点の美しいゴールを奪おうという創造力を捨て、戦術と体力をひたすら失点を防ぎ、点差を広げることに消費するゲームに、私はもはや「フットボール」をかけらも感じなかった。

ひるがえって、対イングランド戦のブラジルである。後半十二分、絶好調のロナウジーニョが勢いあまって退場処分を食らうと、一人足りなくなったブラジルは優雅にボールを回しはじめた。ゴール前でもボールを慈しむように周囲へと散らし、シュートのタイミングをかぎりなく遅延させてはゲームのテンションを持続させた。残り何分、という試合時間の抑圧が試合からすっと引いていったのはこのときである。

そこには「永遠」がある、と私は思った。ブラジルはリードして時間稼ぎをしているのではない。そうではなく、ボールと出合った路地裏のフットボールで日が暮れるまで時間を忘れて戯れていたあの少年の無垢の「永遠」が、そのとき甦ってきたのだ、と。小さなはだしの足が記憶するあの永遠の陶酔を、試合のなかに不意に再現させてしまうというような即興的な無意識こそが、フットボール文化の本質に横たわる秘儀的な真実であるはずだ。

二十一世紀最初のW杯がドイツとブラジルの決勝となったことは象徴的である。たしかに「勝負」の決着は、今日つく。だが、フットボールの未来像にかんする決着まで今日ついてしまうわけではない。フットボールのあるべき未来像とは、結果だけを求める合理サッカーに対するブラジルの孤高の［C］を、サッカーに関わる人々がどう受けとめてゆくかにかかっているのである。

（今福龍太「フットボールの快楽」）

問１　空欄［Ⅰ］〜［Ⅳ］に入れるのに最も適当なものを次からそれぞれ選びなさい。

①　創造的　②　記号的　③　攻撃的　④　象徴的　⑤　抑圧的

問２　空欄［A］に入れるのに最も適当なものを次から選びなさい。

①　なぜなら　②　とりわけ　③　けだし　④　しかし　⑤　すなわち

問３　空欄［B］・［C］に入れるのに最も適当なものを次から選びなさい。

①　矛盾　②　調和　③　総合　④　反乱　⑤　分断

問４　筆者のいう「勝敗原理」に支配されたフットボールの形として、適当なものを次から二つ選びなさい。

①　一点でも多く取れば勝ちであるから、勝っている間は点を取ろうとせず、ひたすら守備に専念する。
②　攻撃をするときでも、組織的な役割分担を崩さない。
③　試合の運び方が機械のようにプログラムされているので、選手の闘争心は抑圧されている。
④　勝利するという目的に照らせば合理的であるが、見ていて退屈であり、フットボールらしさを感じない。
⑤　「勝敗原理」を基本としながらも、快楽原理的要素を採り入れたチームは見当たらない。

問５　波線部「ひるがえって」以下末尾までに述べられていることと最も異なるものを次から選びなさい。

①　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、選手の動きが優雅でのんびりしているように見えたため、筆者は、試合時間の抑圧が試合からすーっと引いていくのを感じた。

②　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、筆者は、時間を忘れていつまでもゲームを続けていたいという少年の無意識の無垢の欲望を見てとった。

③　一人足りなくなったブラジルがボールを回しはじめたとき、筆者は、選手の動きの中にいつの時代でもどの国でも見られる少年たちのフットボールに興じる姿を見出した。

④　ドイツ対ブラジルの決勝戦は、勝敗原理対快楽原理のぶつかり合いという意味を持っていると筆者は考えている。

⑤　決勝戦で例えブラジルが敗れても、サッカーに関わる人がよく考えて真実を見出してくれれば快楽原理がすたれるはずはないと、筆者は考えている。

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　今福龍太＝いまふく　りゅうた（一九五五〜）東京大学法学部卒・テキサス大大学院修了・東京外国語大大学院教授・文化人類学者

語句

直感＝ちょっかん→瞬時の感覚的判断・インスピレーション
　cf同音異義語……直観→物事の本質を一気に理解する・インテュイション
陶酔＝とうすい→うっとりする・恍惚(こうこつ)感にひたる
代弁＝だいべん→本人に代わって語る　類似表現としては、「象徴」「体現」
還元＝かんげん→もとの姿にもどすこと・単純化すること
　cf同音異義語……換言→言い換える　甘言→口先だけのうまいことば
皮相＝ひそう→物事の表面、上っ面だけ・表層
至上主義＝しじょうしゅぎ→あるものをこれ以上ない最上のものと考える
（例）芸術至上主義＝唯美主義、耽美(たんび)主義
機知＝きち→場に応じた鋭い才知・ウイット
威信＝いしん→プライド
合理＝ごうり→理性的・理屈通り・効率的

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）スター選手の美技にトウ酔する　①投　②陶　③盗　④蕩　⑤糖

（イ）法令をジュン守する企業文化　①純　②準　③淳　④殉　⑤遵

（ウ）彼が当社の筆トウ株主です。　①頭　②党　③等　④当　⑤塔

（エ）ユウ雅な立ち居振る舞いを見せる　①雄　②勇　③優　④遊　⑤悠

（オ）年間王者の地位をカク得する　①覚　②確　③画　④獲　⑤穫

（カ）世間をにぎわす事件のカ中にある　①火　②渦　③家　④過　⑤荷

（キ）余ジョウな人員を別な部署へ回す　①常　②情　③場　④乗　⑤剰

（ク）攻撃サッカーをタイ現したチーム　①帯　②隊　③体　④対　⑤態

（ケ）大会の開催日がチ延された　①弛　②治　③遅　④置　⑤致

（コ）個人技と組織との奇セキ的融合　①績　②跡　③積　④籍　⑤赤

第五講その1《随筆》旅論〈選択肢問題〉

シルクロードを西に向かって歩いている時のことだった。中近東のどこかの町ですれちがった日本人に、一冊の文庫本を貰った。何百日も故国を離れ、異国をほっつき歩いている者にとって、母国語の書物は一つの宝石である。少なくとも私は、食物より日本の書物を恋しく思うようになっていた。話されるものであれ、書かれたものであれ、日本語への［A］は常に満たされることがなかった。砂漠を走るバスの中で、風景に眼をやりながら、ひとりでブツブツ日本語を呟（つぶや）いている自分に気がついて、ドキッとすることもあった。稀にシルクロードを東に下ってくる日本人に行き会うと、しばらくは日本語で言葉を交わし、別れ際に持ち合わせている日本語の本を交換するのが常だった。すでに読み終え、ただの［B］に化してしまった荷物としての書物を、相手の［C］のような書物と交換するわけだ。もちろん、事情は相手にとっても変わらない。私の［D］は相手の［E］になるはずだった。それから読み終えるまでの何日間かは、心が弾むような刻が持てることになる。事実、そのようにして松本清張や司馬遼太郎の一冊の本が、シルクロードを何十回となく行ったり来たりしているのだった。

（沢木耕太郎『路上の視野』）

問１　空欄［A］に入れるのにもっとも適切な語を次の中から選べ。

①　焦燥感　②　充実感　③　飢餓感　④　喪失感　⑤　安堵感

問２　空欄［B］～［E］には次の二つの語のいずれかが入る。その番号を答えよ。

①　石ころ　②　宝石

第五講その2　建築論〈記述問題〉

エッフェル塔の高さは圧倒的だ。最上階の展望台は地上二七四メートル、ノートル＝ダムの塔のほぼ四倍である。かつてこれほどの高みから、それも固定的な視座に立って、パリの街を見下ろした者はいなかった。いくら聖堂の発散するアウラ(注)が鐘楼(しょうろう)をいくぶんかは実際より高く見せるといっても、この歴然たる物理的な差を無効化するにはほど遠い。これは都市の中心をずらすのにじゅうぶんすぎる開きである。本来ならば市の西方の周辺部にすぎないはずのシャン＝ド＝マルスに忽然(こつぜん)とそびえ立ったエッフェル塔は、他の塔をはるかに凌駕(りょうが)する高さによって、いわばパリを俯瞰(ふかん)する中心の座をノートル＝ダム寺院から簒奪(さんだつ)したのだ。

だが、エッフェル塔のいったい何がそれほど画期的であったのか。もちろん当時世界一を誇っていたその並外れた高さは、それだけでも世間のA耳目を集めるにはじゅうぶんであったにちがいないし、主役に躍りでた鉄という素材が十九世紀の石の街にもたらしたであろう小さからぬ違和感が、パリ市民のあいだで物議をかもさずにはいない刺激的なスキャンダル性を帯びていたことも事実である。これらの要素は、万博開催時の半年間に二〇〇万人近くもの観光客を引きつけたことの説明としても、この塔がたちまちのうちに伝統ある都市の新たなシンボルとしての地位を獲得しえた理由としても、きわめて納得のいくものではあるだろう。

けれどもそこにはもうひとつ、石造のモニュメントにはけっして見られなかった別の特徴、まったく新しい側面が加わっている。すなわち、バルトが正当にも指摘しているB内部の不在という側面だ。もはやこの塔を（というより、世間に流布(るふ)したこの塔のコピーやイメージを）飽きるほど見慣れてしまった私たちにしてみれば不思議でもなんでもないことだが、そもそも石の壁や屋根によって空間を囲いこむことが当然であった従来の建築物の中に置いてみたとき、訪れるべき内部というものが決定的に欠如しているこの塔が与える印象の斬新(ざんしん)さは、やはり格別であったと思われる。

むろん、三層にわたる展望台は存在する。ただしそれらは塔の内部というよりも、単なる上昇過程の中継点にすぎない。また、その真下に立つ者が「或(あ)る種母胎的な包摂感」（松浦寿輝）に襲われずにいないことは事実としても、そこがごく普通の意味で

建造物の内部であるとはやはり言いがたい。建築とは本来、空間を囲繞（いにょう）し異質化することによって固有の「内部」を創出するものであるとするならば、ここではそうした意図はいっさい排除され、すべてが呆気（あっけ）ないほどの率直さで外部に向かって露出している。いや、入るべき内部が不在である以上、それを取り巻く外部もまた存在しないと言うべきだろう。そこにあるのは要するに、内も外もない隙間（すきま）だらけの鉄のレース模様にすぎない。もう一度バルトの言葉を借りれば、「ある閉ざされた空間の探検をともなわない《見物》は存在しない」にもかかわらず、エッフェル塔は「そのなかに閉じこもることができない」逆説的な建造物なのである。

つまり、そこには見るべき対象、探索すべき空間は何もない。ノートル＝ダム寺院のように厳粛な祭壇や華麗なステンドグラスがあるわけではないし、ましてやルーヴル美術館のように著名な絵画や彫刻が置かれているわけでもないのだから。にもかかわらず、いったいなぜあれほどの観光客が毎年訪れるのか。彼らはそこに、何をしにくるのか。

（中略）

パリに住んでいると、ノートル＝ダム寺院を見ないことはあっても、エッフェル塔を見ずにすませることはほとんど不可能である。こちらが見ようと思わなくても、ふとした折に建物の隙間から、あるいは屋根の切れ目から現れて、あちらの方から有無を言わせず視界に侵入してくるのだから。どうしても見たくなければ、それこそモーパッサンのCひそみにならって、エッフェル塔を見なくてすむ唯一の場所である塔の中のレストランで食事するしかあるまい。街を見下ろす者の視線と塔を見上げる者の視線は、こうしてパリのここかしこで双方向的にぶつかりあい、交差する。つまりこの塔は、見ることの快楽と見られることの至福を同時に実現した、きわめてまれな例なのである。それはひたすら人々の視線を挑発し、交錯させるためだけに存在しているモニュメントであると言ってもいい。

（石井洋二郎『パリ』による）

（注）○アウラ――独特の雰囲気、霊気。オーラ。

問１　傍線の箇所Ａ・Ｃの語句の意味を簡潔に記せ。

問２　傍線の箇所Ｂ「内部の不在」とは、エッフェル塔のどのような側面を指しているか、本文の内容に即して五十字以内で具体的に説明せよ。

第五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その1の筆者　沢木耕太郎＝さわき　こうたろう（一九四七～）東京生まれ・横浜国立大学経済学部卒。小説家・ノンフィクション作家・写真家。『深夜特急』シリーズは、世界放浪の旅の記録で、これまで読者になった多くの若者を旅に誘ってきた。

●松本清張＝まつもと　せいちょう（一九〇九～一九九二）芥川賞受賞作家。「社会派サスペンス」ともいうべき推理小説で、とくに評価が高い。代表作『或る「小倉日記」伝』『砂の器』『黒革の手帖』『点と線』など

●司馬遼太郎＝しば　りょうたろう（一九二三～一九九六）歴史小説家。著書『坂の上の雲』『竜馬がゆく』『街道をゆく』

なお『項羽（こうう）と劉邦（りゅうほう）』という作品はセンター試験現代文でも登場（スタディサプリ　高3トップ＆ハイレベル現代文・第二十二講に収録）！

●その2の筆者　石井洋二郎＝いしい　ようじろう（一九五一～）東京生まれ・東京大学法学部卒・パリ第四大学修士課程修了。東京大学教養学部長

●ロラン・バルト（一九一五～一九八〇）フランスの記号学者、構造主義の思想家で元コレージュ・ド・フランス教授。著書『エッフェル塔』『零度のエクリチュール』『表徴の帝国』（訪日の際の印象をまとめたもの）

●モーパッサン（一八五〇～一八九三）フランス一九世紀を代表する小説家。著書『脂肪のかたまり』『女の一生』

●ギュスターヴ・エッフェル（一八三二～一九二三）フランスの建築家・橋、橋梁の設計技師

語句

凌駕＝りょうが→他のものをしのいで、上に出ること
俯瞰＝ふかん→高所から見下ろして眺めること・鳥瞰（ちょうかん）・パノラマ
忽然＝こつぜん→物事が急に起こること・突然
簒奪＝さんだつ→臣下など地位の低いものが君主などの高い地位を奪い取ること
逆説＝ぎゃくせつ→一般的な考えとは反対のところに真理や真実がある・パラドックス

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）万国アニメ博覧会が開サイされた　①祭　②歳　③宰　④催　⑤斎

（イ）スカイツリーの高さに圧トウされた　①頭　②塔　③踏　④倒　⑤到

（ウ）美しい透かしのモ様が浮かび上がった　①模　②裳　③茂　④問　⑤藻

（エ）今度のコスチュームはザン新だね　①暫　②斬　③漸　④惨　⑤残

（オ）大きなものに包セツされる感覚　①接　②節　③刹　④設　⑤摂

（カ）異質なものをハイ除しない社会　①廃　②排　③背　④灰　⑤敗

（キ）敵をチョウ発するのはつつしもう　①兆　②超　③挑　④懲　⑤跳

（ク）中ケイ地を挟んで空輸する　①径　②経　③継　④系　⑤携

（ケ）モデルさんらしいオーラを発サンする　①参　②産　③讃　④散　⑤賛

（コ）大理石を素材にした壮麗な彫コク　①剋　②刻　③克　④穀　⑤告

第六講　科学論・翻訳論・異文化理解論〈記述問題〉

玄白(注1)は、『解体新書』の翻訳について、その書の凡例で興味深いことを述べている。大雑把な現代語訳では次のようになる。

訳には三種類ある。一つは翻訳であり、もう一つは義訳であり、最後は直訳である。例えばオランダ語で「ベンデレン」は日本語の「骨」に相当する。このときそれを「骨」と訳す。これが翻訳である。またオランダ語に「カラカベン」というのがある。この語の意味は「軟い骨」ということである。そこで訳して「軟骨」とする。これが義訳である。またオランダ語に「キリイル」というのがある。これは日本語に相当する語はなく、また意味を取って解釈することもできない。そこでこの場合は「キリイル」とそのまま書く。これが直訳である。

Aこのような基準に基づいて玄白は、翻訳を行ったと考えられる。さて『解体新書』を調べて面白いことに気付く。ある意味では当然ながら、眼、口、鼻、耳など、日常的に使われる語で、しかもその指示対象がほとんど一義的にはっきりしているもの、言い換えれば、ある医学の理論の持つ独特の制御力には関わらないような語に関しては、すべてが彼の言う第一の「翻訳」で済まされている。当然であろう。もちろん、われわれが日本語で「口」というときと全く同じ対象をオランダ語の口に相当する語が指示しているかどうか、正確に調べれば、ずれが見付かる可能性はあるだろう。しかし、そのずれは小さいと見てよい。他方、玄白は問題ないと感じたらしいが、そうしたものの中にも、やや困難が生じる可能性のあるものもある。例えば、「欠盆」や「人中」という日本語（本来は漢語であろうが）が無造作に当てられている「翻訳」は、今のわれわれから見ると、奇異に感じられる（前者は「鎖骨」、後者は鼻下の縦の溝のこと）。その理由は、恐らく訳語のどちらもがかなり漢方の理論体系を背負った語であり、西欧の概念であるはずの、それらに相当する原語が、漢方的な意味を伴って理解されてしまうことに、無意識の抵抗が生まれるのが、その奇異な感じの原因であろう。言い換えれば、「欠盆」や「人中」と訳すことは、本来そうではない概念を、漢方の体系の持つ制御力の範囲のなかに取り込んでしまうこと、もう一度言い換えれば、自分が蒙(こうむ)っているものとは別の制御力を、

自分の方に移し入れることなく、外来の文化を自分の文化の文脈のなかで理解してしまっていることになると思われる。ここには興味深い点があることに気付いておこう。それは、玄白は「欠益」という語を特に注意しないで使っているが、われわれ現代の日本人にとっては、その訳語は自然には受け取れないという事実である。そのことについては、後にもう一度戻ってくる機会があるだろう。

さて、玄白は、しかしかなり多くの語を、彼の言う「義訳」と「直訳」に依拠している。これは何を意味するか。一例を「神経」にとろう。先に述べた「軟骨」と同じように、この語を彼は「義訳」によって造語している。しかし考えてみると、オランダ語の「神経」に相当する概念を日本語のなかに探せば、「経絡」というような語が直ちに思い付かれるはずではないか。しかし玄白はそうしなかった。わざわざ自分で「神経」と言う語を新しく（原語の意味を取りながら）造ったのである。彼はなぜそうしたのか。

言うまでもなく、玄白は、「神経」に当たる原語を、「経絡」に置き換える「危険」を知っていたのだと思う。「神経」という概念は、西欧の医学理論全体の制御力に縛られた概念であり、他方、「経絡」は完全に漢方の理論の持つ制御力に縛られた概念である。もしそれを「経絡」で置き換えたときには、西欧の医学理論を漢方の制御力の範囲のなかで理解してしまうことに繋がるのであり、それは本当の「翻訳」にはならない、と玄白は考えていたからに違いない。事実こうして彼は数多くの「新造語」をこの翻訳に際して導入せざるを得なかったのであった。

（中略）

そしてこのような配慮は、日本人が西欧の様々な学問体系を移入するに当たって、極めて神経質に注意してきたことであった。それは西欧の学問の移入・翻訳に際して、「哲学」、「科学」、「社会」、「自由」などをはじめ、非常に多くの術語的概念を、既存の漢語や和語によってではなく、新造語によって置き換えてきたことのなかによく表わされている。

新造語に頼ることの（翻訳における）利点は、すでに述べたことのなかに尽きるが、結局、それが、翻訳する側のなかにある既存の枠組みの制御力からかなりな程度自由な語が得られるからであり、翻訳される側の制御力と、既存のものとの間の違いを認識させるのにそれが役に立つからである。（中略）

したがって、翻訳の理想は、翻訳する側の既存の制御力にできる限り依拠しない、新しい（翻訳される側の）制御力を移し入

れることにある、と言えよう。

（中略）

翻訳が大々的に行われたバグダッド、トレド、フィレンツェ、江戸で、新しい創造的な体系の構築がしばしば見られたのは、やはり偶然ではない。自分のアニマ（注２）と、帰属する共同体の制御力との揺動的な平衡が比較的安定しているとき、人は制御力の存在に気付かない。別の制御力に出逢ったときに初めて、自分のアニマがある特定の型に塑形されており、それとは違った塑形のされ方もあり得るのだ、ということに気付くのである。通常カルチャー・ショックと言われるのは、このことであろう。カルチャー・ショックとは、自分の属する文化とは異なる、「別」の文化の制御力があることに気付くことではない。むしろ自分がある特定の制御力の影響下にあって、ある特定の平衡点に安定していたことを発見することにあるのではないか。

話を戻すと、真の翻訳とは、そのようなカルチャー・ショックを与えるような作用力を持ったものということになる。そして当然のことながら、このようなカルチャー・ショックは、何も、外国の文化に接した（そしてそれが本質的な意味で翻訳された）ときだけに起こるのではない。個人レヴェルで考えれば、そうしたショックは、同じ文化のなかにある、別の下位共同体の持つ制御力に出逢ったときにも、当然起こり得る。言い換えれば、誇張して言えば、人間は、日々新しく再生されていることになろう。

（村上陽一郎「文明の死　文化の再生」による）

注１　玄白――杉田玄白（江戸時代の蘭医。一七三三〜一八一七）。

注２　アニマ――生命や思考の原理、精神。ここでは、筆者は個人の根元的な内部にある「生のエネルギー」と考え、共同体の「制御力」に対置する。

問１　傍線部Ａの「このような基準」について、玄白の訳の「基準」とはどのようなことか。「翻訳」「義訳」「直訳」についてそれぞれ二十五字以内（句読点を含む）でまとめよ。

問２　本文の内容に合致しないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

① 日本人は、西欧の学問を取り入れる際、その学問に関する語が既存の日本語文化の文脈で理解されてしまうことがないように、多くの新しい語を作り上げた。

② 「神経」という語は、漢方の枠組みに左右されないように作り出された語であって、さらには西洋医学の論理の中での概念として理解されるようになっている。

③ 眼、口、鼻などの日常語であって、かつ、指示するものが明確な語は、その語を含み込む言語系の持つ枠組みから比較的自由であり、翻訳では問題にならないと考えてよい。

④ 翻訳とは、翻訳される側の単語を翻訳する側の単語に置き換えることだけではなく、両者の文化の枠組みのなかで共通な価値を持つ語を探し当てることでもある。

第六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　村上陽一郎＝むらかみ　よういちろう（一九三六～）東京大学教養学部卒、東大教授、ＩＣＵ教授などを経て、東洋英和女学院大学学長。科学史科学哲学の泰斗（その道の大家として尊敬されているということだよ）。著書『西欧近代科学』『近代科学を超えて』『科学者とは何か』など

語句

平衡＝へいこう→釣り合いが取れて安定、バランスが取れていること。本文中では「揺動的な平衡」とありますが、生物や社会は動き変動しながらある程度安定した状態を作り出しています（生物以外でも独楽や自転車は動くことで安定する）。私たち生き物は、日々ご飯を食べ、吸収し、排出し、分子レベルでは入れ替わりながら、今ある状態を作っている。社会も生まれる人、死にゆく人の出入りがありつつ、今ある状態を維持している。こうした維持は固定的ではなく、動きながら、あるいは動くことでバランスや安定を維持しています。英語でダイナミック・イクイリブリウム。ただし、そうしてある程度安定しているとき、自分が何によって安定しているのかとか、自分の特異性とかには気づかない。当たり前さに安住する。異質なものとの出会いによって、はじめて異質な他者を知ると同時に、自分自身の特異性にも自覚的になる。当たり前だと思っていたことが、当たり前ではなかったと。これがカルチャー・ショックなんです。　類義語　均衡

塑形＝そけい→かたちづくること

術語＝じゅつご→テクニカルターム・特別な専門用語・重要キーワード。「主語・述語」の「述語」と違うからね。

復習問題　第六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）外国から見るとキ異な習慣もある　①期　②機　③軌　④貴　⑤奇

（イ）西欧文化圏のセイ御力の効いた言葉だ　①征　②精　③制　④盛　⑤勢

（ウ）次の試験の出題ハン囲をしぼる　①班　②範　③版　④汎　⑤藩

（エ）幸運なグウ然に助けられたよ　①遇　②寓　③偶　④隅　⑤宮

（オ）他者へのハイ慮を欠かさないように　①廃　②排　③配　④拝　⑤輩

（カ）故郷の村へのキ属意識が強い　①基　②気　③貴　④着　⑤帰

（キ）バランスのとれた平コウ状態　①公　②効　③考　④抗　⑤衡

（ク）外の文物を国内に大量イ入する　①威　②居　③偉　④移　⑤易

（ケ）漢方の理論にイ拠した処方をする　①医　②依　③射　④威　⑤伊

（コ）さしせまった重大な危ケンを回避　①顕　②険　③剣　④顕　⑤検

第七講　宗教論〈選択肢問題〉

私は長いこと京都に住んで、毎日のように道で僧侶と出会ったし、時には寺院をおとずれて、そこに住む僧職の方と対面することも多かったが、どのお顔もなべて、迷いも悩みも知らぬ（と見える）平穏無事な、ふっくらとしたお顔ばかりであるのが、昔から不思議に思われてしかたがなかった。僧服をまとう身とあれば、日々これ仏法、「日々これ好日」、さればこそこのような満ち足りたお顔がそろうことになるのだろうか。

しかし私からすると、僧という身分であることほど怖いことはない。臨済和尚（りんざいおしょう）は、「自分を救う者は自分のほかにはない」と言ったが、一個の人間が僧服をまとう身になることを決断するに当たっては、まず他者への救済者として自立できるより前に、それに先立つ A自分自らの始末がつけられているはずである。あるいは僧となることそのことによって自らの在りかたに決着をつけようとする覚悟あってのことであるはずだと思われる。それなのに、あののびやかな、時には堂々と俗臭を漂わせたお顔は、一体どういうことなのであろう。

およそ人間として成長するためには、絶えず現在の自分の生き方を恥じることが必要であろう。自らを恥じるとは、自らを客観視する別の眼をもち得ることである。現在の環境に埋没することなく、つまり現在の職業や地位に腰を据えてしまうことなしに、自分の新たな可能性を絶えず開拓しようとする気魄（きはく）をもち続けること、このことこそが、およそ道を求める者の――社会人たると宗教者たるとを問わず――もっとも基本的な要件であろう。［　B　］人に向かって法を説き、ひとかどの救済者として自立するほどの人であれば、なおさら、自らをその道の完成者として完結させてしまってはならぬはずである。もし、いささかでも自己完成者としての意識が残っていたら、その人はすでに救済者たる資格はない。しかし、この痛切なディレンマを乗り超えるための苦悩を知らぬ説法者が、今はあまりにも多い。「平穏無事な、ふっくらとしたお顔ばかり」という風景は、こうして生まれる。

臨済禅師の師であった黄檗和尚（おうばくおしょう）に、次のような珍しい逸話がある。

ある役人が、黄檗のところから布施を乞いに来た供養主（托鉢僧）に問いかけた、「黄檗和尚はまるで驢馬そっくりだ。あんな人のためにそなたは供養主となって、どうしようというのだ」。その僧は返す言葉もなく、帰ってきて黄檗にその話をした。すると黄檗は言った、「道薄く人微けくして、甚だ是れ消け難し」。（『祖堂集』）

「道薄く人微けく……」というのは、黄檗その人の深刻な告白なのであって、世道人心の退廃（今の日本国のような）を歎いての言葉なのではない。「 C 」というのである。おそらく晩年の黄檗の逸話であろう。Dわれわれが彼について抱く普通のイメージを裏切るような話ではあるが、しかし実は彼の隠れた一面を、しかも鮮烈に語ってくれている。つまり、彼は深く羞を知る人だったのである。宋代初めの名僧、五祖法演も、「私は求道者となって二十年、今やっと羞を識るようになった」と述懐した。それは深い自責の念の現われであり、修行が深まれば深まるほど、自らの内奥から衝き上がってくる、自己省察の真率な表白にほかならない――「このおれはダメな僧だ！」と。そして、この「識羞」の省察あってこそ、その人の道行は深められ高められる。それを欠いた説法者は、それこそ檀家から「供養をいただく資格はない」。『法句経』に「世にもし人あつて、能く慚愧を知らば、是れを誘進と名づく。良馬に策つが如し」というのも、羞かしいと思う心を失わぬ人こそが人を教え導くことができるのだ、という教えである。その心のない人は、人にお説教を垂れる資格はないし、まして「今は物ばかり豊かで、人の心は貧しい」などという E 歎きを他人事のように語ることは、口が裂けてもできないはずである。

（入矢義高の文章による）

「弊社では入矢義高先生の著作権ご継承者様を探しています。著作権ご継承者様に関する情報をお持ちの方はご連絡ください。」

問１　傍線部Ａ「自分自らの始末がつけられているはずである」とは、どのような「始末がつけられているはず」なのか。次から選びなさい。

①　仏法を悟り、「日々これ好日」の境地を感得したこと
②　苦悩する人を救うことを、道を求める宗教者の使命とみなしたこと
③　自らをその道の完成者として完結させてしまってはならぬと覚悟したこと

④　現世の悩みを断ち切って、僧服を身にまとうことを決断したこと
⑤　僧という身分であることの怖さを恐れないで、迷い悩む人の中に入っていくことを選んだこと

問２　空欄［B］に入る最適なものを、次から選びなさい。
①　まして　②　かえって　③　はしなくも　④　もしくは　⑤　みだりに

問３　空欄［C］に入る最適な文を、次から選びなさい。
①　いかにも私は徳もないお粗末者、とても供養をいただく資格はない
②　いかにもおまえは道に達していない修行の身、とても供養をいただく資格はない
③　いかにも私は歩みの遅い驢馬だが、しかしそんな役人から供養などいただくつもりはない
④　いかにも道をもたない徳のない役人から、とても供養をいただく気にならない
⑤　いかにも人情の薄い人たちばかりだが、かといって私もおまえも供養をいただく資格はない

問４　傍線部Ｄ「われわれが彼について抱く普通のイメージ」を、筆者はどのようなものだと想定して発言しているか。次から最適なものを選びなさい。
①　世道人心の退廃を歎く高僧　②　修行を積んで悟りきった高僧
③　平穏無事なふっくらとしたお顔の高僧　④　苦悩をにじませたお顔の高僧
⑤　驢馬そっくりな風貌の高僧

問５　空欄［E］に入る最適なものを、次から選びなさい。
①　搦(から)め手の　②　意味ありげな　③　紋切り型の
④　もってまわった　⑤　人口に膾炙(かいしゃ)した

第七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　入矢義高＝いりや　よしたか（一九一〇〜一九九八）鹿児島県生まれ、京都大学文学部卒。中国古典文献学・仏教学の学者
●臨済和尚＝りんざい　おしょう（?〜八六七）中国唐の時代の禅僧
●黄檗和尚＝おうばく　おしょう（?〜八五六）中国唐の時代の禅僧。臨済和尚の師
●五祖法演＝ごそ　ほうえん（一〇二四?〜一一〇四）中国宋の時代の禅僧

語句

逸話＝いつわ→ある人について、世間であまり知られていない話・こぼれ話・エピソード・アネクドート
托鉢＝たくはつ→修行僧が経文を唱えながら家々をまわり、食べ物やお金などの布施(ふせ)をもらうこと
布施＝ふせ→寺や僧侶に渡す金品　類義語　喜捨＝きしゃ
檀家＝だんか・だんけ→ある決まったお寺に仏事を依頼し（お墓があり）、また布施でお寺を支援している家
真率＝しんそつ→飾り気がなくまじめであること
省察＝しょうさつ・せいさつ→自分自身を振り返り、いたらなさを考えること
能く＝よく→「〜できる」（漢文の素養です）　不能＝あたはず→「〜できない」（同じく漢文の素養です）

復習問題　第七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）幾多の苦ノウの日々を乗り越えて
①能　②脳　③膿　④濃　⑤悩

（イ）山門に袈裟掛けのソウ侶が入っていく
①葬　②壮　③僧　④装　⑤想

（ウ）せっかくの意見が大勢にマイ没する
①枚　②埋　③味　④舞　⑤米

（エ）平オン無事な日々を呑気（のんき）に暮らす
①穏　②怨　③御　④温　⑤恩

（オ）他者を救う前に自己を救サイする
①災　②柴　③済　④催　⑤斎

（カ）私にはお布施をいだたく資カクはない
①覚　②穫　③各　④格　⑤閣

（キ）心中の思いを述カイした書物
①戒　②回　③解　④懐　⑤怪

（ク）飾りやいつわりのないシン率な答え
①信　②深　③真　④心　⑤芯

（ケ）おのれを恥じる自己ショウ察
①省　②焼　③証　④小　⑤笑

（コ）せつせつと心の叫びを告ハクする
①吐　②白　③薄　④博　⑤拍

第八講《小説2》人物相互のグループ分け〈選択肢問題〉

次の文章は、室生犀星（むろうさいせい）の小説『幼年時代』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

うしろの犀川（さいがわ）は水の美しい、東京の隅田川ほどの幅のある川であった。私はよく磧（かわら）へ出て行って、鮎（あゆ）釣りなどをしたものであった。毎年六月の若葉がやや暗みを帯び、山山の姿が草木の繁茂するにしたがってどことなく茫茫（ぼうぼう）として膨れてくるころ、近くの村落から胡瓜（きゅうり）売りのやってくるころには、小さな瀬や、砂利でひたした瀬がしらに、背中に黒いほくろのある若鮎（さあゆ）が上ってきた。A若鮎はあの秋の雁（かり）のように正しく、かわいげな行列をつくって上ってくるのが例になっていた。わずかな人声が水の上に落ちても、この敏感な（注）剽悍（ひょうかん）な魚は、花の散るように列を乱すのであった。

私はこの国の少年がみなやるように、小さな（注）尾籠（びく）を腰に結んで、幾本も結びつけた毛針を上流から下流へと、たえまなく流したりしていた。鮎はよく釣れた。小さなやつがかかっては竿（さお）の尖端（せんたん）が神経的にぴりぴり震えた。その震えが手さきまで伝わるとこんどは余りの歓（よろこ）ばしさに心が躍るのであった。

瀬はたえずざあざあーと流れて、美しい瀬波の高まりを私達（たち）釣人の目に注がす。そこへ毛針を流すと、あの小さいやつが水面にまで飛び上がって、毛針に群れるのであった。ことに日の暮れになるとよく釣れた。水の上が暮れ残った空の明かりにやっと見わけることのできるころ、私はほとんど尾籠を一杯にするまで、よく釣りあげるのであった。

川について私は一つの話をもっていた。

それは私が釣りをしに出た日は、雨つづきのあげく増水したあとであった。あの増水の時によく見るように、上流から流された汚物が一杯（注）蛇籠（じゃかご）にかかっていた。私はそこで一体の地蔵を見つけた。それは一尺ほどもある、かなり重い石の蒼（あお）く水苔（みずごけ）の生えた地蔵尊であった。私はそれを庭に運んだ。そして杏（あんず）の木の陰に、よく町はずれの路傍で見るような小石の台座をこしらえてその上に鎮座させた。

私はその台座のまわりにいろいろな草花を植えたり、花筒を作ったり、庭の果実を供えたりした。毎月二十四日の祭日を姉から教えられてから、その日は、自分の小遣いからいろいろ供物（くもつ）を買って来て供えていた。

「まあお前は信心家ね。」

姉もまた赤い布片（きれ）で衣を縫って、地蔵の肩にまきつけたり、小さな頭巾（ずきん）をつくったりして、石の頭にかぶせたりした。私はいつもこの拾って来た地蔵さんに、いろいろな事をしてあげるということが、決して悪いことでないことを知っていた。ことに、B地蔵さんは石の橋にされても人間を救うものだということをも知っていた。私はこの平凡な、石ころ同様なものの中に、何かしら疑うことのできない宗教的感覚が存在しているように信じていた。

「きっといいことがあるわ。お前のように親切にしてあげるとね。」

姉は毎日のように花をかえたり、掃除をしたりしている私を褒（ほ）めてくれていた。私はうれしかった。こうした木の陰に、自分の自由に作りあげた小さな寺院が、だんだんに日を経るに従って、小屋がけが出来たり、小さな提灯（ちょうちん）がさげられたりするのは、何ともいえない、ただそれはいい心持ちであった。C何かしら自分の生涯を賭（と）して報いられてくるような、ある予言的なるものを感じるのであった。私は毎朝、洗面してしまうと礼拝しに行った。ときとすると、あぐらをかいたお膝（ひざ）のところに大きな夜露がしっとりと玉をつづけていたりしていた。そのつぎに姉がいつもつつましげにお詣（まい）りをしに来た。

ことに夜は森厳な気がした。木の葉のささやき、空の星の光などの一切をとりまとめた感覚が、直接地蔵さんを崇拝する私の心をきわめて高く厳粛にした。私はそこで、大きくなったら偉い人になるように熱禱（ねっとう）するのであった。

不思議なことは、この地蔵さんを大切にしてからは、よく蟻（あり）などが地蔵さんのからだをはっているのを見ると、これまでとは別様な特に地蔵さんの意志を継いでいるようなものにさえ思われた。蝸牛（かたつむり）にしてもやっぱりこの神仏の気を受けているように感じた。私はだんだん地蔵さんの付近に存在する昆虫を殺すことをしなくなった。それがだんだん長じて街路でも生きものを踏むことがなく、無益に生命をとらなくなっていた。

「お前くらい変な人はない。しかしお前は別なところがある人だ。」

母も私の仕事に賛成していた。

「しばらくなら誰（だれ）でもやるものだが、あの子のように熱心にする子はない。」

私はそれらの賛嘆にかかわらず、ときとしてはこんなにしてこれが何になるとか、いますぐ自分にむくいられるとかいうことを考えなかった。私はこの小さな寺院の建立に、自分の心がだんだん離れないことを知っ

ていた。ことに私が川から拾って来たことが、母などがすぐ大工を呼んで立派なお堂を建てたらと言い出すごとに、ひどく反対させた。いまさら母の力を借りなくとも、私は私一個の力でこれを祭りたいと思っていた。私は私の神仏としてこれを庭の一隅に置きたかった。誰（だれ）人の指のふれるのをも好まなかった。

隣家に飴（あめ）屋があった。そこの米（よね）ちゃんという子は庭がなかった。私はその少年をよく庭へ入れて遊んだ。私はこの友達と磧から石を運んだり、砂を持ち込んだりした。私はだんだん大仕掛けに建てて行った。一つのものがふえれば、もっと別な神聖なものが欲しくなって来た。私は町へ出て（注）三宝や器物や花筒や燭台（しょくだい）をあがなって来た。

姉は毎日ごはんのお供物をした。私は長い庭の敷石をつたわりながら、朝のすずしい木のかげに白い湯気のあがるお供米をささげてきてくれるのを見ると、私は涙ぐみたいほどうれしく神神しくさえ感じた。

「姉さん。ありがとう。」

私はあつく感謝した。私のいろいろな仕事を見ている姉は、いつも清い美しい目をしていた。

「姉さんの目はなんて今朝はきれいなんだろう。」と心でかんじながら、私は花をかえたりしていた。

私はますますひどく一人ぼっちになった。学校へ行っていても、みんながばかのようになって見えた。「あいつらは私のような仕事をしていない。信仰をしらない。」と、みんなとは特別な世界にもっと別様な空気を吸っているもののように思っていた。先生を尊敬する心には元よりなっていなかった。（注）あのひどい生涯忘れることのできない目にあってからの私は、いつも冷然とした高慢のうちに、絶え間もない（注）忍辱（にんにく）に虐げられたあの日を目の前にして、心を砕いて勉強していた。私が成人したのちに私が受けたよりも数倍な大きい苦しみを彼らに与えてやろう。かれらの現在とはもっと上に位したすべての点に優越した勝利者になって見かえしてやろうと考えていた。

D私はあの意地のわるい学友らは、もはや私の問題ではなくなっていた。全然、あの喧嘩（けんか）や小競争（こぜりあい）がばかばかしいのみならず、その相手をしていることがもはや私に不愉快であった。

明治三十三年の夏、私は十一歳になっていた。

（注）○剽悍――すばやくて強いこと。　　　　　　　　　　　○尾籠――とった魚を入れておくかご。
○蛇籠――円筒状のかごに石を詰めこんだもの。河川の護岸・水流緩和などに用いる。
○三宝――神仏・貴人に物を供えるときなどに使うひのきの白木でつくった四角形の台。前と左右の三方に穴がある。一般には「三方」と書く。
○あのひどい生涯忘れることのできない目――問題文の前の場面で、私が先生から理由のない虐待を受け、怒りのあまり卒倒するに至ったこと。
○忍辱――仏教語。いろいろな侮辱・迫害を耐え忍んでうらまないこと。ここでは、そうしたはずかしめに耐えることを強いられた、というほどの意味。

問１　傍線部Ａ「若鮎はあの秋の雁のように正しく、……花の散るように列を乱すのであった。」という表現にはどんな特徴があるか。次から、最も適当なものを一つ選べ。

①　繊細な言語感覚で小動物を描くのにも雅語を多用し感性の美を強調した筆致はきわめて芸術的である。鮎の遊泳の姿の描写にも作者の美意識はよく発現している。
②　集団の中の孤独の思いは秋の雁や初夏の鮎に見入る主人公の姿に色濃く描写されている。列を乱す若鮎の動きの中にも少年の期待と不安の念は交錯して表出される。
③　清流を整然と上る鮎の動きをその突然の乱れの姿とあわせてとらえた描写は視覚的で鮮明である。空を渡る雁などの比喩（ひゆ）も適切で印象をより深める効果をあげている。
④　少年の日への追憶は季節の代表的な景物の描写に託されて哀切をきわめている。回顧的な筆法の中に瞬時にして次の局面への展開をはかる作者の技巧もまた優れている。
⑤　空の雁や流れの中の鮎などの小動物に注がれる少年の愛情の描写は純真で感動的である。表面的な自然描写の奥には深い宗教的な思いが予感される筆致である。

問２　傍線部Ｂ「地蔵さんは石の橋にされても人間を救うものだ」とはどういうことか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

① 地蔵さんの仏としての本性である人間救済は、石橋にされ人間に踏みつけにされることを通じて初めて実現されるものであるということ。

② 地蔵さんの人間救済は、日々のお祈りなどの信心の深さへの応報としてのみ与えられるものであり、それは石橋にされたとしても変わりはないということ。

③ 地蔵さんは石橋にされるという自己犠牲を通して、人間にそうした行為の愚かさを自覚させ、そこから人間に自己救済への道を歩ませるということ。

④ 地蔵さんの慈悲は限りのないものであり、たとえ石橋として使われ、人間に踏みつけにされたとしても、人間を救済するというそのありように変わりはないということ。

⑤ 地蔵さんは単に精神的側面で人間の救いになるだけではなく、その身体を石橋に化するというような実際的な形でも人間の救いになるということ。

問３　傍線部Ｃ「何かしら自分の生涯を賭して報いられてくるような、ある予言的なるものを感じる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

① こうして地蔵さんを祭り崇拝し続けるならば、いつの日にか必ず報われることがあるだろうという確かな予感をおぼえている。

② こうして地蔵さんを祭ることに生涯をかけるならば、将来きっと幸運がめぐってくるであろうという明らかな予言を聞きとっている。

③ 地蔵さんを祭り崇拝しながら、こうしていればきっと恵まれた生涯を送ることができるだろうというかすかな予感をおぼえている。

④ 自分の地蔵さんを祭る小さな寺院ができあがることによって、将来それが必ず報われることになるに違いないという確信を得ている。

⑤　このように地蔵さんを祭り崇拝することによって、周囲の人々から偉い人として認められることになるはずだと確信している。

問４　傍線部Ｄ「私はあの意地のわるい学友らは、もはや私の問題ではなくなっていた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　地蔵さんへのかかわりを通じて得られた、将来への展望を含んだ私の内面的な充実が、学友らとの間の不愉快な出来事を完全に無視できるような境地へと導いてくれたから。

②　地蔵さんへの信仰がもたらしてくれた、姉や母に対する私の親近感の深まりが、学校での学友らとの喧嘩や小競争のばかばかしさを忘れさせてくれるのに十分であったから。

③　地蔵さんへの私の信心は、命あるものへの慈愛の心をはぐくみ、他人とは異質な特別な世界を見ることを可能にし、それが学友らに対する寛容の精神を生み出していったから。

④　私の地蔵さんへのかかわりは、他のだれのためでもなく、またたれの力をも借りない私一人の営みであり、それにより得られた私の忍耐心が、学友らからの独立の境地を可能にしたから。

⑤　地蔵さんへの私の信仰は、現実的な利益を一切求めないまったく純粋なものであったが、それが結果的には周囲からの超越という思いがけない副産物を生み出してくれたから。

第八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　室生犀星＝むろう　さいせい（一八八九〜一九六二）石川県生まれの小説家、詩人。代表的な詩集としては『愛の詩集』『抒情小曲集』がある。とくに「ふるさとは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの」が有名。小説の代表作は『性に眼覚める頃』『幼年時代』『或る少女の死まで』など

語句

供物＝くもつ→お供え物
あがなう→二つ意味があって、一つはお金を出して購入すること（購う）、もう一つは罪を償うこと、金品等で罪の埋め合わせをすること（贖う）
冷然＝れいぜん→冷淡で心を動かさない
高慢＝こうまん→自分を優れていると思いあがって、他者を見下すこと
　類義語　傲慢＝ごうまん→おごり高ぶって、礼を欠くこと
寛容＝かんよう→心が広く、相手の言動を受け入れること。相手の過ちや失敗を厳しく責めないこと

復習問題　第八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）庭の一グウに地蔵尊を祭る
①宮　②寓　③遇　④偶　⑤隅

（イ）荘厳な台座にチン座まします大仏
①朕　②鎮　③枕　④沈　⑤珍

（ウ）草花が庭にハン茂する
①汎　②畔　③繁　④磐　⑤煩

（エ）周囲からの賛タンに値する行為だ
①嘆　②淡　③胆　④綻　⑤担

（オ）毎週日曜に教会へ礼ハイしにいく
①輩　②俳　③拝　④排　⑤灰

次の傍線の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）森厳な神社の参道
①おごそか　②きびしい　③静まり返った
④不気味な　⑤形だけの

（キ）紳士の高慢な態度
①声が高い　②乱暴な　③偉そうな
④折り目正しい　⑤怠惰な

（ク）家具をあがなう
①整える　②購入する　③調べる
④新調する　⑤下取りする

第九講その１　哲学論　〈選択肢問題〉

〈正常〉と〈異常〉という区別ほど、ほんとうは多くの難しい問題を含んだ問題であるのに、通常簡単に考えられている区別も少ない。簡単に考えられているというより、すすんで簡単に考えようとしているとさえ言えるほどだ。簡単に考えようとするのは、自分の身を［ A ］の側に置いて、［ B ］との間にはっきりした一線を画そうとするからである。［ C ］なものとの区別において自己の［ D ］なことをうち立てるためだとも言える。そこにあるのは、［ E ］なものに対する怖れと不安、およびそれらにもとづく排除であろう。

そのわかりやすい例は、〈魔女狩り〉——狭い意味での魔女狩りだけでなく、〈赤狩り〉などをも含めた広い意味での——である。そこでは、人々は自分が魔女（あるいは妖術師）であるとしるしづけられ、見なされることを怖れて、魔女をさがす。あるいは誰か怪しいところのある他人を魔女に仕立てる。〈魔女狩り〉に協力すれば、それも熱心に協力すれば、自分が魔女ではないという証しになるかのように。そういう仕組みあるいは関係のなかでは、魔女の実在性はどうでもよい第二義的なものになってしまい、ただ区別するための記号——いわば内容なき空白の記号——があればそれでいいということにさえなるのである。

（中村雄二郎『術語集』による）

問１　空欄［ A ］〜［ E ］には「正常」または「異常」という語のいずれかが入る。それぞれ適当と思うものを選んで答えなさい。

第九講その2　文学論〈抜き出し問題〉

鶏頭（けいとう）の十四五本もありぬべし　　子規

子規の写生句といえば、必ず引き合いに出される代表作である。だがこの句がリアルにひびくのは、それが例えば「素直」あるいは「ありのまま」といった、ある永久不変の写実の原則に従っているからではない。それよりもむしろ、作者がいやしくも花を詠みながら、異彩を放つその形や色には目もくれず、またまわりの景色との調和や不調和にも気を配らず、ただその本数を数えることだけに興味を集中することで、Aいわば花本来の面目をないがしろにし、ひいては花を詠むさいの伝統的な約束をあっさり無視しているからである。そして、意表をつくこの表現の新鮮さが読み手を刺激して、背の高い鶏頭が何本も、いかにも鶏頭らしく無造作に、ぞろりと立ち並んでいるさまを思い描かせるのである。**（第1段落）**

芭蕉の弟子のなかでも、とくに実地の体験からの句作りを重視した方のひとりに、去来がいる。「行く春を近江（あふみ）の人と惜しみける」という芭蕉の句を、「殊（こと）に今日（こんにち）の上に侍（はべ）る」（何といっても作者がその時の実景、実感を詠んだものだから）と弁護したのは彼である。また、

辛崎（からさき）の松は花より朧（おぼろ）にて　　芭蕉

について、「是は即興感偶」だからこそいい発句（ほっく）になる——もし連句の第三句目のように「句案に渡る」（あれこれ工夫して作った）のであれば、「第二等にくだらん」と主張したのも、やはり去来である。あとでその議論の話を聞いた芭蕉は、どれも「皆理屈なり」と軽くいなし、「只（ただ）眼前なるは」、つまり何の計算もなく、ただ目に見えたまま、感じたままを表現したに過ぎないと答えた（『去来抄』）。面白いのは芭蕉の説明が、結果としては去来の見方をそのまま裏付けていることであり、この句はその後、「ありのまま」を詠んだ句の筆頭に据えられることになった。Bだが、この句の眼目は、松が「花より朧」に見えるという型破

りの表現の意外さ、新鮮さにある。「只眼前」であろうとなかろうと、そうした情景の印象をたしかに読み手に伝えるためには、誰でもそうしてあれこれと表現自体を工夫する以外に手はない。（**第２段落**）

他にも例えば、

山路来て何やらゆかしすみれ草　　芭蕉

のような句について、江戸の昔から今日に至るまで、「眼前の即興」、「素直な実感」、または「見たまま、感じたまま」といったたぐいの評語が盛んに用いられている。だがある句が実景を詠んだものかどうか、またそのさいに、作者が何の「分別」も働かさなかったかどうか、誰にも確かめるすべはなく、またその必要もない。この句の場合、興味の焦点は、句の中心にどっかりと据えられた「何やらゆかし」の七字――いわばこれ見よがしにさり気なさ、素直さを強調する、逆説的な表現の大胆さにある。しかもこの句の初案は、さらにその点に念を入れて（言い換えれば、作意の見え透くほどあからさまに）、「何とはなしになにやらゆかし菫草」、あるいは「何となく何やらゆかし菫草」となっていた。つまり「素直な実感」を強調する評者たちは、むしろこの字句そのものの示す表情に導かれ、そこから逆に作者の心境なり句作の機微なりを想像しているに過ぎない。この句の狙いはみごとに成功したのである。（**第３段落**）

そしてこの例にも明らかなように、俳句のリアリズムは小説のそれと比べても、はるかに表現の斬新さ、「耳新しさ」に依存する度合が大きい。なるべくイメージ自体に語らせるとはいっても、俳句は字数があまりにも少ないので、小説のようにさまざまな対象、例えばハンドバッグなどを、じっくり詳しく描写している暇がない。いまの芭蕉の句でイメージと呼べるのは、何の形容も説明もない「山路」と「すみれ」だけで、すべてはその両者の組み合わせと、例の七字の働きにかかっている。（**第４段落**）

（川本皓嗣の文章による）

（注）

＊　鶏頭……夏秋の候に、鶏のトサカのような形の真赤な花をつける。

＊＊　去来……向井去来（一六五一～一七〇四）。江戸前期の俳人。芭蕉の弟子。『去来抄』はその主著。

＊＊＊　辛崎……滋賀県大津市琵琶湖岸にある名勝地。一つ松が有名で、近江八景の一つ。
＊＊＊＊　朧……はっきりしないさまをいう語。詩歌の世界では春にありがちのかすんだ大気を指す。

問１　傍線部Ａの部分について。ここでいう「花本来の面目」とは何を指すか。本文中から五字以内の言葉を抜き出して記せ。

問２　傍線部Ｂの部分について。「この句の眼目」は「型破りの表現の意外さ、新鮮さにある。」と言っているが、第１、第３、第４段落においても、筆者はそれぞれ同様の指摘を行っている。そのおのおの指摘部分を、句読点ともそれぞれ十五字以内で抜き出して記せ。

第九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　中村雄二郎＝なかむら　ゆうじろう（一九二五〜）東京都生まれ・東京大学文学部哲学科卒・哲学者。およそ八〇年代から今日にいたるまで入試現代文、入試小論文での登場回数は膨大な数にのぼる。主著『哲学の現在』『臨床の知とは何か』『術語集』『術語集Ⅱ』『問題群』など。『述語集』以下三冊は、学問用語集として小論文対策の読み物にもなります

●その２の筆者　川本皓嗣＝かわもと　こうじ（一九三九〜）大阪府生まれ・東京大学教養学部フランス科卒・比較文学者。とくにイギリス、フランス、日本の詩の比較研究で知られる

●正岡子規＝まさおか　しき（一八六七〜一九〇二）愛媛県松山生まれ・東京帝国大学国文学科中退。俳人・歌人・文学研究者。夏目漱石と同窓。弟子には高浜虚子がいる。主な作品『獺祭書屋俳話（だっさいしょおくはいわ）』（獺祭書屋主人（しゅじん）は子規の別号、別名）『歌よみに与ふる書』『病床六尺』。俳句雑誌「ホトトギス」創刊

語句

異彩を放つ＝いさいをはなつ↓きわだった特色をもつ
ないがしろ＝蔑ろ↓軽んじてあなどる
面目＝めんもく・めんぼく↓対面・世間に対する評価・世間から受ける評価
　四字熟語　面目躍如＝めんもくやくじょ↓高い評価通りの活躍をする
意表をつく＝いひょうをつく↓相手が想定していないことをする
無造作＝むぞうさ↓手間をかけないで、大雑把に物事をなすこと
殊に＝ことに↓とりわけ・加えて
発句＝ほっく↓連歌や俳諧（五・七・五＋七・七）の最初の五・七・五。もしくは独立の俳句
筆頭＝ひっとう↓第一番目のもの・代表
眼目＝がんもく↓重要なところ・主眼
分別＝ふんべつ↓道理をわきまえること。常識に従って物事の善悪を判断すること。燃える燃えないのごみの区別は〝ぶんべつ〟です
機微＝きび↓表面からは見えない微妙な事情やおもむき。人情の機微などと使います
リアリズム↓現実主義。通常は「写実主義」と区別なく使われることがありますが、今回の文章では、表面的な見たままを超えた〝深層のリアリズム〟とでも呼ぶべき意味で使われています。心に深く刺さるようなリアルさということです

復習問題　第九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）自分たちと異質なものをハイ除する　①廃　②灰　③背　④敗　⑤排
（イ）異サイを放つこの花の色をめでる　①催　②宰　③祭　④彩　⑤才
（ウ）永遠不変の写実の原ソクに従う　①則　②即　③側　④束　⑤測
（エ）俳句に潜むシ激的表現が心に響く　①梓　②志　③刺　④指　⑤試
（オ）写生句の筆トウと語られている　①頭　②等　③踏　④党　⑤到
（カ）その当時の心キョウはいかほどか想像する　①興　②境　③教　④鏡　⑤況
（キ）言葉では形ヨウしがたいほどの美しさ　①要　②様　③容　④用　⑤洋
（ク）発想の仕方がザン新である　①暫　②斬　③残　④惨　⑤算
（ケ）過去の実績や知名度にイ存している　①依　②伊　③易　④居　⑤衣
（コ）一般的理解とは違う逆セツ的真理がある　①接　②節　③刹　④設　⑤説

第十講　脳科学・コミュニケーション論

　僕が本格的に脳科学の分野で研究をはじめた一九九四年。その頃、脳科学の最先端は、たとえば、下側頭葉の視覚野にある特定の図形を見せたときにだけ生ずる活動があるとか、あるいは運動性の学習をすると小脳でシナプスの伝達効率が一時的に下がるが、その「思考」を含めた機能的な意義は何かなど、脳のメカニズムを生理学的なアプローチで解析することだった。

　ところが、現在では当時にはまだ十分に意識されていなかったテーマが、脳科学の分野でも研究対象として脚光を浴びている。そんなテーマの一つに、人間の「社会的知性」がある。脳は個体として、その機能が完結しているのではなく、他者との関係性もまた、脳の機能にとって非常に重要な意味を持つことがあきらかになったのだ。

　その契機となったのが、大脳皮質の前頭葉で発見された「ミラーニューロン」だ。一九九六年にイタリアの脳科学者ジアコーモ・リゾラッティらによって発見された神経細胞である。A<u>この発見が脳科学に一大転機を与えた</u>といっても過言ではない。

　ミラーニューロンは、その名前が示唆するように、自分の行為と他者の行為を鏡に映したようにコードする。たとえば、他者が手を伸ばして何かをつかもうとしている行動をみると、同じ行動をとったときの脳活動が自分の脳でもみられるという。ホラー映画で山場を迎えたとき、恐怖におののく登場人物同様、観客の脳でも恐怖がトレースされる。相手の行動や感覚を自分の脳に映し込んで、認識するのだ。最初は猿の脳から発見されたが、その後、人間の脳でも対応する部位が発見された。

　このミラーニューロンが注目されるのは、それが人間の本質である「社会的知性」を支える脳の機能と推測されるからだ。

　たとえば「社会的知性」の特徴とされるものに、［Ｂ］性がある。これは他の人のために奉仕するという性質だ。進化論の自然淘汰（とうた）という点から考えれば、すべての生物にとっては自分が生き残ることが最大の目的だ。動物である人間も、極端ないい方をすれば「自分さえ良ければ」という［Ｃ］性が働いておかしくはない。

　だが、人間の場合は「社会的知性」が発達しているので、他者のために何かをすること自体を喜びとして脳の報酬系が働く側面がある。他者と協調して行動をするネットワークが築かれ、「自分にもいい、そして他の人にとってもいい」という状態をつくっているのだ。

経済学の父であるアダム・スミスは、著書『諸国民の富』の中で国際的な分業がいちばん効率が良いと提唱したが、わたしたち人間には、「分業」が理論化されるずっと以前の太古から、他者と協力して生活を営む分業社会が進んでいたのである。六百万個ものパーツを分業により組み立ててできているジャンボジェット機を例にとっても、こんな複雑な作業は「社会的知性」がある人間以外にはできるはずがない。貨幣のような価値の分配、流通も、分業システムを前提として成り立っている。人間の最大の特徴は、「社会的知性」を背景に、こうした高度に発達した社会を築きあげたことでもあるのだ。

人間の「社会的知性」の研究は、以前からアダム・スミスの経済学や駆け引きゲームのような「囚人のジレンマ」と呼ばれるモデルで、理論化や数理化するアプローチがなされていた。

ただ、ここ最近になって、どうもD「顔」が人間の「社会的知性」にきわめて重要な意味を持っていることがさまざまな検証を通してわかってきたため、脳科学でも顔に着目して社会的知性を研究することが大きなフロンティアとなってきている。とくに、人間の「社会的知性」の中でも、人物の「認識」と「選択」について、「顔」は大きな意味を持っている。いわば、「見た目で判断」の最大の基準は顔なのだ。

政治家が選挙でどのように選ばれるかを考えてみても、「顔」は欠かせないファクターだろう。「政治家はマニフェストが重要。顔は関係ない」のであれば、顔写真が付いた選挙ポスターなど必要ないはずだ。投票用紙に書くのは氏名や党名なのだから、便宜的にはポスターに名前が印刷されていれば、ことは足りる。

しかし、名前も党名も無機質な記号でしかない。記号を見ただけで、その政治家に一票投じるべきかどうかの判断をしかねるのは当然ではないだろうか。

その点、「顔」は多弁である。

政治家の政策や考え方も、「顔」に貼(は)り付けてわたしたちは認識してしまっている。信頼できるかできないか、誠実そうか、責任感が強そうかなど、言葉よりも顔を見て、性格や、ましてや政治家としての資質についてまでも判断を下してしまってはいないだろうか。

しかも、この「顔」というEラベル貼りは、選挙に限ったことではない。

日常的に無自覚に行っているために、その意義に気がついていないだけで、他者と接しているときにわたしたちは、必ず「顔」

を使ってこのラベル貼りをしている。

そもそも「顔」は、呼吸をし、見たり、聴いたり、食べたり、話したり、匂(にお)いを嗅(か)いだりと、生きていく上で欠かせない機能が集結した肉体の一部である。本来なら、生物学的な機能さえ果たしていれば十分なはずだ。

ところが、目、鼻、口のそれぞれの形状や配置のバランスに、わたしたちは機能以上の「意味」を付与してしまっている。性格や考え方といった、目には見えない抽象的な概念を「顔」というラベルにみいだして、人物を認識し、選んでいるのである。

しかも、自助努力とは基本的に関係なく、遺伝的な所与が絶大なのが「顔」である。それが生存の上で必要な器官としてだけではなく、生物の進化の中で種を保存するための性選択においても、もっとも恣(し)意的に判断される対象となっているのである。

それではなぜ、わたしたちは他者の認識や選定について、これほどまでに「顔」に傾倒してしまっているのだろうか。それは、顔の造形そのものというよりも、むしろ顔に表れる表情と心の問題が、コミュニケーションに欠かせないからではないかと考えられる。

（茂木健一郎『化粧する脳』より）

問１　傍線部Ａ「この発見が脳科学に一大転機を与えた」とあることについて、次の二点を説明しなさい。

（一）転機を迎える以前は、どうであったのか。本文中の語句を用いて、三十字以内で説明しなさい（句読点等を含む）。

（二）転機を迎えて、どうなったのか。本文中の語句を用いて、四十字以内で説明しなさい（句読点等を含む）。

問２　空欄 B ・ C に入れるのにもっとも適当なものを、次からそれぞれ一つ選びなさい。

①　利益　　②　利己　　③　利敵　　④　利得　　⑤　利他

問３　傍線部Ｄ「『顔』が人間の『社会的知性』にきわめて重要な意味を持っている」とあるが、それはなぜなのか。そのことを的確に表している部分を本文の中から抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい（句読点等を含む）。

問４　傍線部Ｅ「ラベル貼り」とあるが、本文中の意味としてもっとも適当なものを、次から一つ選びなさい。

①　無自覚な判断
②　無機質な記号化
③　人物の認識と選定
④　日常的な意味の付与
⑤　生物学的な機能の保存

第十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　茂木健一郎＝もぎ　けんいちろう（一九六二〜）東京大学理学部と法学部卒・同大大学院理学系研究科修了・脳科学者。第一講その２に続いて、二度目の登場です。テレビへの出演も著書も多数。ヘアースタイルが特徴的

●アダム・スミス（一七二三〜一七九〇）イギリスの経済学者。市場には「神の見えざる手」が働いているという、経済の自由主義で知られる。主著『国富論』。現在、二〇ポンド紙幣の「顔」だそうです

語句

契機＝けいき→きっかけ・動機

示唆＝しさ→ほのめかす・それとなく教え示す

コード＝code→一定の基準、約束事（放送コード……放送できない用語のきまりがある）・暗号・本文では「一定パターンにもとづいて再現する」といった意味で使われています。なお電線などケーブルのコードはcord

自然淘汰＝しぜんとうた→ナチュラルセレクション・自然環境や条件に適した生物が生き残り、そうでないものが亡びること

多弁＝たべん→口数がおおいこと・饒舌（じょうぜつ）

関連語　詭弁＝きべん→ごまかし

雄弁＝ゆうべん→話術が巧みで説得力があること

「雄弁は銀、沈黙は金」→雄弁は重要だが、黙るときを知ることはもっと大切

無機質＝むきしつ→味気ない・機械的

恣意的＝しいてき→好みのまま

ジレンマ＝板挟みで苦しむ　関連語　矛盾・二律背反　三つのものの間で苦しむことは、トリレンマ

囚人のジレンマ→警察（検察）と囚人の取引を想像してください。犯人グループのうち、一番初めに自供したものを免責（無罪）にするともちかけられた囚人はどうするか。全員がダンマリを通し、証拠不十分で全員が無罪を勝ち取るか、自分が抜け駆けして自分だけが無罪を勝ち取るか、そうこうしているうちに仲間が先に自白するかもしれない。しかもこの取引は個別に行われていて囚人同士は相談できない。さあ、どうする、という話

復習問題　第十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

(ア) 研究活動を本カク的に開始する　① 角　② 各　③ 核　④ 格　⑤ 画
(イ) 大きな転換への契キとなった　① 基　② 機　③ 軌　④ 帰　⑤ 期
(ウ) 大脳の複雑な神経細ボウを調べる　① 胞　② 砲　③ 包　④ 封　⑤ 抱
(エ) 将来の重大な発見を示サする　① 差　② 査　③ 詐　④ 唆　⑤ 作
(オ) 電子工学の先タンを行く仕事だ　① 胆　② 端　③ 担　④ 淡　⑤ 短
(カ) 単独で完ケツした機能をもつ　① 潔　② 結　③ 決　④ 傑　⑤ 欠
(キ) 公共的な奉シ活動に参加する　① 仕　② 志　③ 使　④ 試　⑤ 梓
(ク) 高額な報シュウを返礼として受ける　① 衆　② 集　③ 収　④ 酬　⑤ 拾
(ケ) 近代的な貨ヘイ経済の導入以前　① 弊　② 幣　③ 蔽　④ 併　⑤ 塀
(コ) 大胆な安全保障政策を提ショウする　① 証　② 称　③ 賞　④ 生　⑤ 唱

第十一講　宗教論・日本文化論〈選択肢問題〉

明恵（みょうえ）が草庵をたてた白上（しらかみ）（注1）の峰にしても、晩年に住むことになった栂尾（とがのお）にしても、趣きは異なるが、いずれも素晴らしい自然を感じさせる所である。明恵にとってはこのような自然に包まれて在ること、そのことが宗教的体験であったと思われる。日本人である限り、自然への親近感を持っているものであるが、彼の場合はその度合いが極めて深く、後にも述べるように、それが彼の信奉する華厳の教えとも結びついているところが特徴的なのである。明恵が月夜の晩に弟子とともに船に乗り、紀州の苅磨（かるま）の嶋という島へ渡ろうとしたときの様子が『行状』（注2）に語られている。そこにはそのときの情景を語る美文がつづられているが、その文に「更ニ此ノ外ニ何ノ聖教ヲカ求メム」という語が続く。自然に接し、自然の心を知ることができたときは、今更別に経典を読む必要もない、というのである。明恵の自然に対する態度がここに端的に語られている。

この苅磨の嶋に明恵は一通の手紙を書いた。彼にとっては、島も人も同等なのである。面白いのは、この素晴らしい手紙を手にした弟子が、これをどこに持っていったらいいのかと尋ねると、明恵は「苅磨の嶋に行き、栂尾の明恵房からの手紙だと高らかに呼んで打ち捨てて帰って来なさい」と［A］答えていることである。明恵のいたずらっぽい微笑が目に見えるような気がする。彼は遊びに真剣になることのできた人なのである。

手紙は現存していないが、『伝記』（注3）にも『行状』にも相当に詳しい記録が残されている。後者の方が長く、内容に多少の相違があるが、大筋においては変わりはない。この手紙には長い前置きのような部分があり、そこではB島に対して手紙を書くことの理論的根拠とでも言うべきことが語られているのである。筆者には、このような「［C］」を通じて、明恵が華厳の教えの真髄を弟子たちに伝えようとしていると思われるのだが、随分と難しい手紙で、これを貰った「島」もさぞ驚いたことであろう。「其の後、何条の御事候哉。罷（まか）り出で候ひし後、便宜（びんぎ）を得ず候ひて案内を啓せず候。」というような挨拶に続いて、島というものは欲界に属している存在であるが、木石と同様に「……D非情なりとて衆生に隔て思ふべきにあらず」という主張が述べられている。そして次に、国土というものは『華厳経』に説く仏の十身中の最も大切なものであり、毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）のからだの一部である、つまり、島は如来そのものだということが述べられている。実際、このあたりの文は「島」にあてて書かれているというよりは、弟

子たちに島を介して華厳の教えを説いているような感じである。ところが、この文に続いて調子が変わり、「島」に対する明恵の気持ちが［E］述べられるのである。その部分を『伝記』から引用してみよう。

「かく申すに付けても、涙眼に浮かびて、昔見し月日遥かに隔たりぬれば、磯に遊び島に戯れし事を思ひ出だされて忘られず、恋慕の心を催しながら、見参する期なくて過ぎ候こそ本意に非ず候へ」

このあたりは別に難しくなく読めて、「島」に対する明恵の気持ちがそのまま伝わってくる感じがする。このような島への思慕の情の表現に続いて、明恵は実に面白いことを書いている。

「又、其れに候ひし大桜こそ思ひ出だされて、恋しう候へ。消息など遣りて、何事か有り候など申したき時も候へども、物いはぬ桜の許へ文やる物狂ひ有りなんどいはれぬべき事にて候へば、非分の世間の振舞ひに同ずる程に、思ひながらつゝみて候也。然れども所詮は物狂はしく思はん人は、友達になせそかし」

桜の大木がなつかしく手紙など出したいこともあるが、そんなことをすると狂気かなどと言われないかと気になって、道理に合わない世間の習慣に同調して、心に思いながら表面に出さずにいたが、結局は狂気だなどと思うような人は云々、というのである。「非分の世間の振舞ひに同じ」ていたのが、最後のところで、「友達になせそかし」と言い切るところに、明恵の決意がよく示されている。この桜の木は、『行状』によると、高雄の中門の脇にある桜の木になっていて、そちらの方が正しいようであるが、［F］明恵が強調したいところを理解することが大切であろう。彼にとっては、人間や動物のみならず、無生物に至るまでが区別なく感じられるのである。[G]「もの」と「こころ」の境界は、限りない相互浸透性をもっているのである。

（河合隼雄の文章による）

注（１）和歌山県有田郡湯浅町栖原。
（２）明恵の弟子喜海の著『高山寺明恵上人行状』
（３）『栂尾明恵上人伝記』

問１　空欄［A］・［E］・［F］に入る最も適当な語句を、それぞれ次の中から選べ。

A　①　冷やかに　②　事もなげに　③　当惑したように　④　強い調子で

E　①　あっさりと　②　暗然と　③　綿々と　④　朗々と

F　①　なんと言っても　②　手っとり早く　③　それはともかく　④　とは言いながら

問２　傍線部Bについて筆者が十字以内で端的に述べている箇所を抜き出して記せ。

問３　空欄［C］に入る二字の語を文中より抜き出して記せ。

問４　傍線部Dの主旨と合致する十字以上十五字以内ひとつづきの文章を、文中より抜き出して記せ。

問５　傍線部Gの言い換えとして最も適当なものを、次の中から選べ。

①　明恵の宗教的体験とは、自然界の存在物すべてと平等に心を通じ合うことであった。

②　無生物の中にまで「こころ」の存在を仮想するところに、明恵の信仰の真髄があった。

③　明恵の説く華厳の教えは、無自覚な区別や境界の意識を明確にしようとするものであった。

④　明恵が強調したかったのは、「もの」と「こころ」との不安定な相対的関係であった。

⑤　あらゆる自然を仏身の一部と認識することこそ、明恵の悟りの境地に外ならなかった。

第十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　河合隼雄＝かわい　はやお（一九二八〜二〇〇七）兵庫県生まれ、京都大学理学部卒。高校での数学教師を経て、アメリカ・カリフォルニア大学ロサンゼルス校（ＵＣＬＡ）へ留学。精神分析学者・元文化庁長官。くだいて言うと、日本で最も有名な心理学者。フルートの演奏も玄人（くろうと）はだしだそうです（プロではないのに、プロが裸足で逃げ出すほどの巧みな腕前ということ）。著書多数ですが、『こころの処方箋』は心理学に興味がある高校生向けと言えます

●明恵＝みょうえ（一一七三〜一二三二）鎌倉時代前期の僧侶

語句

華厳経＝けごんきょう→大乗仏教の経典の一つ。原義は「花で飾られた広大な教え」

衆生＝しゅじょう→仏教用語で、すべての生命あるもの・仏の救済の対象となるものです。とくに人間を指すことがあります

な〜そ→古語で「禁止（〜するな）」を意味する

真髄＝しんずい→物事の本質・エッセンス・その道の奥義。神髄とも書く。坪内逍遥の研究書は『小説神髄』

端的＝たんてき→短くズバリ

相対的＝そうたいてき→絶対的ではないということ

消息＝古典では「せうそこ」（しょうそこ、と発音します）→手紙のこと

恋慕＝れんぼ→ふつうは異性を恋い慕うこと

思慕＝しぼ→懐かしく思うこと

道理＝正しい論理・ことわり・本来あるべき物事の筋道

俗界＝天上界や聖なる世界に対して俗人がすむこの世界のこと・俗世間

復習問題　第十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）自然に囲まれたソウ庵に暮らす　①僧　②壮　③葬　④相　⑤草

（イ）詳細なキ録が残されている　①基　②期　③記　④貴　⑤軌

（ウ）華厳経の経テンを弟子に伝える　①典　②展　③天　④点　⑤店

（エ）帰宅したら手洗いする習カンです　①観　②貫　③慣　④寛　⑤肝

（オ）美しいジョウ景を心に刻む　①上　②情　③場　④城　⑤常

（カ）ズイ分と難しい表現を好む　①隋　②随　③髄　④瑞　⑤遂

（キ）集合場所への行き方をアン内する　①案　②安　③行　④暗　⑤庵

（ク）久しぶりのアイ拶を交わす　①愛　②合　③相　④逢　⑤挨

（ケ）境界なく相互にシン透する　①侵　②浸　③深　④津　⑤請

（コ）深刻なケツ意の表明をする　①潔　②結　③決　④血　⑤傑

第十二講　科学論・心理論〈記述問題〉

子どもは、「ふしぎ」と思う事に対して、大人から教えてもらうことによって知識を吸収していくが、時に自分なりに「ふしぎ」な事に対して自分なりの説明を考えつくときもある。子どもが「なぜ」ときいたとき、すぐに答えず、「なぜでしょうね」と問い返すと、面白い答が子供の側から出てくることもある。

「お母さん、せみはなぜミンミン鳴いてばかりいるの」と子どもがたずねる。

「なぜ、鳴いているんでしょうね」と母親が応じると、

「お母さん、お母さんと言って、せみが呼んでいるんだね」と子どもが答える。そして、自分の答に満足して再度質問しない。

これは、子どもが自分で「説明」を考えたのだろうか。

それは単なる外的な「説明」だけではなく、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなかろうか。だからこそ、子どもは自分の答に「納得」したのではなかろうか。そのときに、母親が「なぜって、せみはミンミンと鳴くものですよ」とか、「せみは鳴くのが仕事なのよ」とか、答えたとしても「納得」はしなかったであろう。たとい、せみの鳴き声はどうして出てくるかについて[A]「正しい」知識を供給しても、同じことだったろう。そのときに、その子にとって納得のいく答というものがある。

「そのときに、その人にとって納得がいく」答は、「物語」になるのではなかろうか。せみの声を聞いて、「せみがお母さん、お母さんと呼んでいる」というのは、すでに物語になっている。外的な現象と、子どもの心のなかに生じることとがひとつになって、物語に結晶している。

人類は言語を用いはじめた最初から物語ることをはじめたのではないだろうか。短い言語でも、それは人間の体験した「ふしぎ」、「おどろき」などを[B]心に収めるために用いられたであろう。

古代ギリシャの時代に、人々は太陽が熱を持った球体であることを知っていた。しかしそれと同時に、彼らは太陽を四頭立ての金の馬車に乗った英雄として、それを語った。これはどうしてだろう。夜の闇を破って出現してくる太陽の姿を見たときの彼

らの体験、その存在のなかに生じる感動、それらを表現するのには、太陽を黄金の馬車に乗った英雄として物語ることが、はるかにふさわしかったからである。

かくて、各部族や民族は「いかにしてわれわれはここに存在するのか」という、人間にとって根本的な「ふしぎ」に答えるものとしての物語、すなわち神話を持つようになった。それは単に「ふしぎ」を説明するなどというものではなく、存在全体にかかわるものとして、その存在を深め、豊かにする役割をもつものであった。

ところが、そのような「神話」を現象の「説明」としてみるとどうなるだろう。確かに英雄が夜毎に怪物と戦い、それに勝利して朝になると立ち現われてくるという話は、ある程度、太陽についての「ふしぎ」を納得させてくれるが、そのすべての現象について説明するのには都合が悪いことも明らかになってきた。たとえば、せみの鳴くのを「お母さんと呼んでいる」として、しばらく納得できるにしても、しだいにそれでは都合の悪いことがでてくる。

そこで、現象を「説明」するための話は、なるべく人間の内的世界をかかわらせない方が、正確になることに人間がだんだん気がつきはじめた。そして、その傾向の最たるものとして、「自然科学」が生まれてくる。「ふしぎ」な現象を説明するとき、その現象を人間から切り離したものとして観察し、そこに話をつくる。

このような「自然科学」の方法は、ニュートンが試みたように、「ふしぎ」の説明として普遍的な話（つまり、物理学の法則）を生み出してくる。これがどれほど強力であるかは、周知のとおり、現代のテクノロジーの発展がそれを示している。これがあまりにも素晴らしいので、C近代人は「神話」を嫌い、自然科学によって世界を見ることに心をつくしすぎた。これは外的現象の理解に大いに役立つ。しかし、神話をまったく放棄すると、自分の心のなかのことや、自分と世界とのかかわりが無視されたことになる。

せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言った坊やは、科学的説明としてはまちがっていたかも知れないが、そのときのその坊やの「世界」とのかかわりを示すものとして、もっとも適当な物語を見出したということができる。

ところで、すでに述べた(注)赤づくしの服装の人に二度も出会った人が次に三度目に出会う。そして、「わかった。あれはＣＩＡの人物が僕をつけ回しているのだ」と判断したとする。このような解釈は、自分の心の状態を表現するのにはピッタリかも知れないが、外的事実の吟味をまったく怠っている。あるいは、内的事実と[D]が取り違えられているといえる。このようなとき

は、妄想ということになる。

このことは逆に考えると、精神病的な妄想といえども、それを「異常」としてのみ見るのではなく、その人が世界と自分とのかかわりを、なんとか自分なりに納得しようとしたり、それを他人に伝えようとしたりする努力のあらわれとして見ることもできる。

自然科学と妄想との間に「物語」があると考えてみると、その特性がわかる。簡単に言うと、自然科学は外的事実に、妄想は［Ｅ］に極端に縛られた「物語」ということになる。

（河合隼雄『物語とふしぎ』による）

（注）「すでに述べた」とあるのは、次の部分を指す。

〈電車に乗っていると、赤い帽子に赤い靴、鞄まで真赤という服装のおじさんが乗ってくる。「あれ、ふしぎな人」と思うが、おじさんがどこかで降りてしまうと、「変な人だったな」と思い、それで忘れてしまう。この際は、「わかった」というところはないが、「変な人」ということで、自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から排除してしまうことにより、心の平静をとり戻す。

せっかく平静をとり戻したのに、翌日まったく違うところで電車に乗っていると、また例のおじさんがやってきた。こうなるとそのままではおれない。「偶然だ」、「あんな服装流行しているのかな」、「あのおじさん、僕をつけているのかな、まさか」などと心がはたらきはじめる。〉

問１　傍線部Ａ「『正しい』知識を供給しても、同じことだったろう」とあるが、その理由について三十字以内（句読点を含む）で記せ。

問２　傍側部Ｂ「心に収める」とほぼ同じ意味でもちいられている表現（五文字以内）を本文中から抜き出せ。

問３　傍線部Ｃに「近代人は『神話』を嫌い」とあるが、近代人が嫌う『神話』とはなにか。本文に即して三十字以内（句読点を含む）で説明せよ。

問４　空欄［Ｄ］・［Ｅ］に入る最も適当な言葉を本文中から抜き出し、それぞれ記せ。

第十二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者は前講と同じ河合隼雄さんです。とにかく入試現代文や小論文での登場回数の多い人です（出典の王様とも呼ばれる）から、再登場です。

●アイザック＝ニュートン　イギリスの物理学者。科学史的には、紀元前のアリストテレス以来の宇宙観（お椀型の閉じた宇宙）を二千年ぶりに刷新し、近代的な宇宙観（無限空間）へ転換した。万有引力の発見者としてあまりに有名。他に「私がほかの人より遠くを見ることが可能だったのは、私が巨人の肩に立ったからである」という印象的なことばを残しています。ついでに、積分学の創始をめぐってライバル関係にあったのはドイツのライプニッツですが、こちらはお名前がモーレツにカッコイイです。ゴットフリート＝ヴィルヘルム＝ライプニッツです。

語句

普遍的＝ふへんてき→いつでもどこでも何にでもあてはまること・ユニバーサル

ＣＩＡ＝Central Intelligence Agency →アメリカ政府の諜報（情報収集・情報分析）機関。かつてバージニア州ラングレーに本部があったことから〝ラングレー〟とも呼ばれる。現在ではバージニア州のマクレーンに移転。スパイ映画でおなじみ。イギリスの諜報機関としてはＳＩＳ＝Secret Intelligence Service があり、こちらは映画「００７シリーズ」で有名です。

復習問題　第十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）自然の不思議への探求はカン察から始まる　①感　②勘　③観　④寛　⑤歓

（イ）人それぞれにカイ釈は異なりうる　①会　②解　③開　④戒　⑤怪

（ウ）努力の結ショウとして今回の成功がある　①生　②賞　③勝　④晶　⑤翔

（エ）需要とキョウ給の経済バランスを考える　①供　②共　③享　④興　⑤経

（オ）この理論物理の学説はフ遍性をもつ　①賦　②負　③譜　④普　⑤富

（カ）一人の物思いではモウ想ともなりうる　①蒙　②妄　③盲　④亡　⑤猛

（キ）従来の会社運営の方針を放キする　①忌　②軌　③棄　④飢　⑤危

（ク）余計な雑念を排ジョして冷静になる　①所　②徐　③叙　④除　⑤助

（ケ）秘密のつもりでもシュウ知の事実だ　①拾　②羞　③収　④周　⑤執

（コ）自然現ショウを厳密に記述する　①像　②賞　③症　④象　⑤性

第十三講その１　趣味論・工芸論〈選択肢問題〉

蒐集は心理的には興味であり、生理的には性癖である。これらが結び合う故、人間をたやすく夢中にさせる。これを本能の一つに帰してもよい。これが目覚めると心が忙しくなる。眠っている者に蒐集はない。冷たく見れば馬鹿らしいことでもあろう。理性で片付ける者に蒐集はない。この道に入れば誰も熱中する。知よりも意や情が忙しく働いてくる。これが嵩じるにつれて人間は遠慮なく打算の外に出て行く。蒐集は人間を勇敢にする。悪くとれば向う見ずになってくる。前進のみ知って退却を知らない。退却すれば蒐集の行為は止まる。［　A　］は人間をいくじなくする。無理しても買いたいほどの熱が起らずば蒐集はものにならない。物を見ればこまっても買いたいのである。こまることがなお蒐集の心をそそるのである。こまらないような者は、この道では一かどの人間ではなかろう。毎月これこれの予算内で購うというようなのは、まだ奥義には達していない。そんなやり方は冷静だからできるのである。蒐集にはしばしば予算への忘却が伴うものである。一時は借金しても不義理しても買いたくさえなるのである。踏みはずしてしまってはこまるが、かかる無理を敢えてするほど熱中するのは、蒐集が一層いきいきしてきた証拠ともいえる。常識的には愚の骨頂だが、この愚かさに達してこそ妙味がある。人はやすやすとこの愚を嗤うが、平気で愚かなことをするのは、どこか自分を忘れ得るいい性質があるからである。信者はすべての財物を平気で神に捧げる。打算的な人間はこんなことをしない。何か夢中になるものを有っているのは、却ってB人間らしさがあるからともいえよう。すきまのない人間にはどこか非人間的な所がある。

　レムブラントは名画を集めるので金を使い果たし、惨めな死に方をしたという。あれほどの画家がと人はいうかも知れぬが、それだけ夢中になったのは、レムブラントに純な心があったからともいえる。または人一倍絵の美しさが感じられたからともいえる。貧乏する苦しみよりも、絵を買う悦びの方が強かったのである。貧乏は忘れ得ても、絵は忘れられなかったのである。貧乏なんか結局どうでもよかったのであろう。

　道具好きの茶人が、夢中で茶器を探し廻った話が沢山残る。名器に向かっては金子などは軽い物である。大名達にとっては欲しさの前には、お城さえも小さく見えたであろう。ものを愛したその気持ちがよく分かる。茶器に冷淡では、もともと茶事など

起こるまい。生活が常識的なら茶事のごとき余計な遊びであろう。茶器などなくったっていいからである。しかしなくったっていいものに夢中になるのが蒐集の面白い点である。（C）人間にこの余裕がなかったら、生活はさぞ冷たいであろう。

　大体金があれば品物を集めることができると思われるかも知れぬが、一面の見方に過ぎない。物を集めるのに金も力になるが、それ以上に熱心が力である。それ故金が不足でも熱情がそれを充分に償(つぐな)ってくれる。否、金では見つからぬものさえ引き出してくる。人は買い集めるというが、妙なもので求める者には品物の方から近づくものである。金だけでは集まるものではない。むしろ金が余るようでは却ってろくなものは集まらない。なけなしの金で買ってこそ集まるのである。金が充分あればと思う時もあるが、しかし金があり余って集めるなら、さぞ面白さは減るだろう。物への愛も弱まるだろう。金がなければ買えないとか、金がないから買わないというのは嘘である。金があったって必ずしも物が買えるわけではない。金があったら却って買わないこともあろう。また金で買ったものが必ずしもいいとはゆかぬ。金で買えない沢山のものがある。いい蒐集には金以上の力が働いている。蒐集と空の財布とはつきものである。金があれば、あるだけ使い果たす気でなければ本当ではない。蒐集は一つの冒険である。これを非合理的な行為と称してもよい。しかし非合理的な所まで進めばこそ集まるのである。それは合理的な処置より、もっと不思議な働きをする。

　これをただ道楽だといって片付けてしまう人もある。そうとられて差し支えないが、ただこういうことを知ってもらう必要がある。この世のすべての素晴らしいことは、利害を超えた所で生い立つのを。ものも道楽に達すれば本ものだともいえる。打算的な間は「遊戯」の境地からは遠い。要(い)りもしない蒐集がこの世には入り用なのである。これが無用の用である。不思議であるが、蒐集のために世界がどんなに多くのことを学んだであろう。

　なぜ要りもせぬものを沢山集めるのかと聞く方がある。だがここは「なぜ」というような合理的な道ではない。入り用だから集めているのではない。別に心を惹くものがあるからである。集める者は、物の中に「他の自分」を見出しているのである。集まる品はそれぞれに自分の兄弟なのである。血縁の者がここで邂逅(かいこう)するのである。自分と集める物と、何かその間に遠く深い因縁があるのである。蒐集において自分の故郷が見出だせるのである。蒐集家は悦びを味わう。それ故物に廻(めぐ)り逢(あ)わずば何か淋しいのである。もの足りないのである。求める心に終わりはない。

蒐集はものへの情愛である。購うのはその機縁を作ることである。そうして集めることはその情を強めることである。強まるが故にさらに購うのである。購い集めずばこの情がつのる折は少ない。集めずともすむのは心が惹かれないからともいえる。だが心が薄らげば、理解も薄らいでくる。かかる意味で蒐集はものへの理解を強める道だといっていい。蒐集によってどんなに真理や美の内容が拡げられたことであろう。そうしてそのためにいかに多くの物が見出され、知られ、守られるに至ったであろう。良き蒐集は世界の価値を高める。それは高められた世界の展観ともいえる。誰だってそれを感嘆なくして眺めることはできぬ。

（柳宗悦（やなぎむねよし）の文による）

問1　A に入れるのに最適な語を、次から選べ。

①　蒐集　②　情　③　性癖　④　前進　⑤　打算

問2　傍線部B「人間らしさ」とあるが、次から、筆者の考える「人間らしさ」と最も関係の深いものを選べ。

①　義理　②　愚行　③　退却　④　打算　⑤　貧乏

問3　傍線部C「人間にこの余裕がなかったら、生活はさぞ冷たいであろう。」とあるが、ここでいう「余裕」とはどのようなことか。次から答えとして最適なものを選べ。

①　実益を離れたことを楽しむ気持ち
②　人生をひとつのことにかけるひたむきさ
③　貧乏などを忘れて趣味に打ち込もうとする意欲
④　得にもならないことに打ち込むための十分な時間
⑤　好きなものを蒐集することができる経済的なゆとり

第十三講その２　現代社会論　〈選択肢問題〉

都会生活のわずらわしさから逃げ出したい。仕事、勉強、家事などから解放されたい。そうしたとき、人はしばしば旅に出る。旅を通じて、一時的な解放感を味わおうとする。

ここには、奇妙な逆説がある。そもそも、都会生活者のほとんどは、もともと農村に住んでいた。近代化に伴い、都会へ出てきたという歴史をもっている。もちろん、都会がよりよい就職口を提供してくれたからではあるだろう。しかし、人口の都市流入を促したのは、それだけではない。農村の古めかしい因習から逃げ出す。狭い共同体のしがらみから抜け出す。都会へ出れば、そうした束縛から解放されて自由になる。以上のような思いもあったに違いない。

かつての農民たちも、ときには旅に出ただろう。そのときだけは村の因習から自由になった。だが、都会への移動は、一時的なものではない。村の因習から永遠に抜け出すことを意味している。その点で、都会は村から逃げ出した旅人たちを恒常的に受け入れる所だといってもよい。

だが、どうだろう。今日の都会人たちもしばしば旅に出る。しかも、かつての村人たちを、はるかに上回る頻度で旅行をする。村から抜け出し、因習から解放されたはずの都会人。その彼らが、さらに都会から解放されることを願い、どこか遠くを訪れる。いったい、なぜか。

なるほど、都会は古い因習を解体し、人びとに自由をもたらした。それまでは抑圧されることが多かった個人的な欲望も、ずいぶん満たされるようにはなっただろう。だが、欲望が解放され自由になったのは、ひとり自分だけではない。ほかにも大勢いる。必然的にそこでは、多数の欲望が触合するようになる。もちろん、その欲望をすべてかなえるのは不可能である。そこで、自他の欲望を調整する必要が起こってくる。自分の欲望を満たすためには、この調整を自分に有利なように運ばねばならない。他人には、譲歩をさせる必要がある。この思いは、人びとを競争に駆り立てる。

かつての共同体では、村人たちの個人的な欲望は因習により抑圧されていた。必然的に欲望調整のための闘争もありえなかった。だが、今日の都会は欲望を解放する。そのため右のような競争が出現した。受験競争、出世競争、等々である。現代の資本

主義は、この競争に注ぎ込まれるエネルギーを養分として成長する。競争し合う個々の力を回収し、自らを発展させていく。これこそが、資本主義、ひいては都会の繁栄をもたらすのである。

さて、Aこうした競争社会は、決しては居心地がよいものではない。確かに、因習的な抑圧は少なくなった。だが、競争に伴う疲労は、しばしば抑圧以上に耐えがたいものとなる。そこで、人びとは、都会からの脱出をもくろみだす。［B］からも、逃げ出すようになる。例えば、旅に出かけるわけだ。

旅といっても無料で行けるわけではない。それなりに、旅行資金を蓄える必要がある。つまり、働かねばならない。そして、旅行のための労働も、資本主義の発展に、結局は回路づけられる。資本主義社会から逃走するという行為自体が、資本主義の成長を促すのである。

（井上章一氏の文章に基づく）

問１　傍線部Ａ「こうした競争社会」とはどのような「競争社会」か。それに当てはまらないものを、次から二つ選びなさい。

①　人々の欲望を解放する都会での競争社会
②　個人的な欲望をすべて満たす都会での競争社会
③　受験・出世などが個人の自由を抑圧する都会での競争社会
④　自他の欲望調整のための闘争が行われる都会での競争社会
⑤　調整に要する個々の力が資本主義の繁栄をもたらす都会での競争社会

問２　空欄［B］へ入れるのに最もふさわしいものを、次から一つ選びなさい。

①　現代の資本主義社会　　②　因習から解放された自由な場
③　競争原理に基づく活気あふれる都会　　④　よりよい就職口を提供してくれる都会
⑤　村を脱出して都会へ出てきたという歴史

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　柳宗悦＝やなぎ　むねよし（一八八九～一九六一）東京都生まれ、東京帝国大学文学部卒。民芸品の美に注目した美学者・思想家。柳宗玄（やなぎむねもと）の父親

●その２の筆者　井上章一＝いのうえ　しょういち（一九五五～）京都府生まれ、京都大学工学部建築学科卒、同大学院修了。建築史家・風俗研究者。国際日本文化研究センター教授

●レムブラント（一六〇六～一六六九）一七世紀オランダを代表する画家。「光の画家」「光と影の魔術師」と呼ばれる。代表作に『夜警』がある

語句

蒐集＝しゅうしゅう→コレクションすること。「収集」とも書きますが、ガラクタの収集と区別するため、価値あるもの（本人がそう思っているだけでも）を集める際には「蒐集」の字を使うようです

打算＝ださん→利害や損得を勘定すること

知情意（智情意）＝ちじょうい→いずれも人間の内面世界を指す表現で、それぞれ知性、感情、意志の意味。本文ではバラバラに出てきますが、三文字熟語でもあります。夏目漱石の小説『草枕』の冒頭にも次のように出てきます。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」。人間の内面を表現する熟語には「喜怒哀楽」もありますが、今回の「知情意」もぜひ知識に登録しておこう

性癖＝せいへき→人の性質上の偏り

愚の骨頂＝ぐのこっちょう→愚かさの頂点　cf 真骨頂（しんこっちょう）→その人の本来の姿、神髄（しんずい）

因縁＝いんねん→仏教の因果関係・運命・縁

邂逅＝かいこう→思いがけなく出会うこと・めぐりあい

展観＝てんかん→広げて見せること。並べて多くの人に見せること

逆説＝ぎゃくせつ→一般的な考えとは反対のところに真理や真実がある・パラドックス

因習＝いんしゅう→昔から続くしきたり・特に現代に弊害を生じているしきたり

抑圧＝よくあつ→行動や欲望を無理に押さえつけること

資本主義＝しほんしゅぎ→社会主義や共産主義などの国家主体の計画経済ではなく、市場における商取引や企業活動（つまり競争）を主体としようとする経済ポリシー

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）人間付き合いをダ算的に考える　①打　②駄　③堕　④惰　⑤妥

（イ）世話になった方へギ理を立てる　①議　②義　③蟻　④偽　⑤戯

（ウ）付加価値で国際競ソウ力をつける　①装　②走　③争　④相　⑤壮

（エ）自らのセイ癖に自覚的になる　①姓　②生　③精　④制　⑤性

（オ）騎馬戦で勇カンに攻め上る　①感　②敢　③観　④寛　⑤漢

（カ）人生にはユウ戯の時間が必要だ　①雄　②勇　③遊　④裕　⑤悠

（キ）人と人、人と物とのイン縁を思う　①印　②因　③隠　④引　⑤韻

（ク）未知なる秘境へと冒ケンに出発する　①剣　②件　③検　④険　⑤見

（ケ）不思議で魅惑的な境チへと人を誘う　①弛　②知　③地　④置　⑤智

（コ）作品の出来栄えに強く感タンする　①嘆　②淡　③胆　④担　⑤端

第十四講《随筆》道について〈選択肢問題〉

道を歩くということとは、いったい、どういうことだろう。碁盤(注)の目のなかに暮らしていたころ、わたしはひとつの道を歩きながら、同時に、その道の裏側に、平行して走る道があることを、知っていた。ひとつの道が、もうひとつの道と、どのようにつながっているのかを、知っていた。自分がいま、歩いている道と、その周囲に展開している風景を、実際にこの目で見定めながら、同時に、見えない裏道の風景を、予測したり、想像することができたのである。よく知る町を歩くとは、こういうことだ。頭のなかに、縮小された町全体が入っていて、そのうえで、目の前にあらわれてくる風景を感受している。

自分の身体を何十倍にもふくらませたもの、それが、暮らしている町の実感であり、一方でまた、自分が町を構成している、細胞のかけらのひとつであることを、無意識のうちに感じていたと思う。

慣れない町では、A こうした複合的な散歩ができない。道を歩けば、その道がすべてである。場所という場所は、ばらばらに点在していて、それらがどのようにつながりあっているのかが、見えてこない。現前の細部しか手がかりがなく、関係や全体がわからない状態というのは、どんなものごとを把握する場合にも、不安感をひとにもたらすのではないか。

知っている道に出たときの、あの不思議にほっとする、あたたかい感じ。わたしたちは、どんなに大人になっても、身体の奥に、迷子になることの恐怖をかかえて生きているのではないだろうか。

しかしどんな道も、いかなる町も、生きているひとと知り合うのに似て、少しずつ、だんだんと、なじんでくるものだ。町の構造がようやく身体に入ってきたころ、「近道」とか「遠回り」という概念も入ってきた。目印だけを頼りに通っていた道が、案外、遠回りであることがわかったり、思い切って足を踏み入れてみた小路が、思いがけぬところへ抜けていたり。道を歩くことは、こうして全身をかけて、土地を切り開き、土地にもぐりこみ、土地になじんでいく行為にほかならなかった。

知らない道が、見知らぬ場所へ、ひとを誘うのは当たり前だが、知っている道が、見知らぬ場所にひとを運んだり、知らない場所が、よく知る道に通じていることを知ることには、いつもささやかな感動がある。

道には、知っていることと知らないことを、結びつける機能が備わってもいるようだ。知っていることを伸ばしていけば、知

らないところへ出る。知らないものを伸ばしていくと、知っている道に出る。

外国に旅に出ると、特に一人旅では、こういうことは、明瞭（めいりょう）に起こる。言葉の不自由さに加えて、土地そのものからはじかれている感じは、ひとを二重に［Ｂ］にするが、それでも、ひとつの道が、次第に親しい道になっていき、日々、見知らぬ場所へとひとを運び、再び、宿へとひとを戻すとき、その道はひとにとって、水や塩に等しい、命をつなぐ脈ともなる。そうした道に付けられてある、通りの名前を知ったりすると、道は、いつでも記憶のなかに呼び出せる、親しい友のような表情さえ表す。

初めての道に足を踏み入れるときは、いつも身体に緊張が走るが、すべての道は、二度目に通るときから、「知っている道」になることも面白い。当たり前のことだが、そのことはうれしい。二度目に通るとき、ひとは、今の道と、記憶のなかの道の、二つの道を、同時に歩くのだ。

子供のころ、迷子になったことがある。夏の朝、家の前の道を、ひとりでずんずんと、進んでいった結果、とんでもないところへ出てしまったのであった。

気がついて見回した町並みは、自分のまったく見知らぬ場所である。見知らぬひとが歩いている。見知らぬ自転車がとまっている。自分で勝手に歩いてきただけなのに、自分の帰るべき根元のようなものが、ぷっつんと音をたてて切れてしまったようだった。遠心力のような透明な力によって、理不尽に道端に捨てられたような気がした。わたしは、ひとりだった。あたたかい共同体からはじきだされて。こん棒で胸をつかれたような、激しい悲しみの感情がわいた。わたしは大声をあげて、泣いたのではなかったか。

ここはどこ？　すべての迷子は、まずその疑問に射抜かれている。いつも暮らしている場所にいるとき、わたしは、そんな質問をもったことがなかった。自分が生きている場所を見失う不安、それは自分自身を、見失う不安のことなのかもしれない。ここはどこ？　というひとつの疑問は、わたしはだれ？　という次の疑問を、容易に呼び出しそうな気配を持っている。

しかし、わたしは、自分が迷子になったあのときの、ひりひりとした、異様に新鮮な不安を、大人になった今、時々、味わいたいと思うことがある。見慣れたひと、見慣れた土地、いつもの習慣によって、かたちづくられた日常。それを不意に見失って、道の中央で、茫然（ぼうぜん）としてみたいのだ。Ｃ<u>迷子になることを恐れながら、同時に、期待する心</u>がある。その心とは、いったい、なんだろう。どこから生まれてくるのだろうか。繋（つな）がらなければ生きていけないのに、繋がれば、その絆（きずな）を切ってしまいたくなる。

迷子というのは、内的な危機なので、幼児のように泣き声をあげない限り、迷子であるかどうかは、外側にはわからない。そう思って改めて眺めてみると、生きているひとが、わたしも含めて、みんな迷子に見えてくる。

電車に乗っていて、知らない町を通りすぎるとき、知らない道が、一瞬、さっと目の端に入ることがある。いま、走り去る電車から目にしただけで、おそらく一生涯、縁のない道だろう。そこを歩いていく、もうひとりの自分を、想像するのがわたしは好きだ。

このわたしとは、まったく違う人生を持ったわたしが、そこで、生き、暮らしている。——そんな気がして、身体を電車に乗せたまま、心だけを、未知の道に歩かせてみるのだ。

（小池昌代の文章による）

（注）碁盤の目……碁盤の目のように道が整っていた町

問１　傍線Ａ「こうした複合的な散歩」とは具体的にどのようなことをすることか。その説明として最も適切なものを、次から一つ選べ。

①　知らない道に不安を感じながら、その土地にもぐりこんだりなじんだりしたいと考えること。
②　近道だと思って目印を頼りに歩きながら、実際には案外遠回りをしているのではないかということに気づくこと。
③　慣れない町の知らない道を歩きながら、これからその道がいざなう見知らぬ場所に対してあれこれと思いをめぐらすこと。
④　あえて知らない道を選んで歩きながら、知っている道に出たときの不思議にほっとするあたたかい感じを楽しみにすること。
⑤　いま歩いている道とその周囲の風景を見定めながら、同時に見えない裏道の風景を予測したり想像したりすること。

問２　空欄［Ｂ］にあてはまる最も適切なことばを、次から一つ選べ。

①　傍観者　②　異邦人　③　逃亡者　④　自由人　⑤　越境者

問３　傍線Ｃ「迷子になることを恐れながら、同時に、期待する心」とは、具体的にどのような「心」のことを意味しているか。その説明として最も適切なものを、次から一つ選べ。

①　人との関係を断ち切ってみたいという思いにとらわれつつも、幼時に味わった激しい悲しみの感情を恐れて、連帯を求めようと願う心。

②　現実を否定することを後ろめたく思いつつも、子供のころ感じた漠然としたあこがれをなつかしんで、いつまでも子供のままであり続けたいと思う心。

③　自分が生きる場所と自分自身とを見失うことを恐れつつも、子供のころに味わった新鮮な感覚を思い出して、日常生活を有意義なものに改善しようとする心。

④　あたたかい共同体から疎外されることを危惧（きぐ）しつつも、現実的な生活からしばし離れて、非日常的で新鮮な不安に浸りたいとあこがれる心。

⑤　内的な危機感が他人に気づかれることを不安に思いつつも、時には子供のころのような自己主張も許されると考えて、何とか率直な気持ちを訴えようとする心。

問４　「わたし」が道について考えたことに関する説明として適切なものを、次から**二つ**選べ。

①　「わたし」は整った道の町にいたときには気づかなかったが、慣れない道の町に暮らしてなじんでくると、道には知っていることと知らないことを結びつけるという機能があることを発見して、ささやかな感動を覚えた。

②　「わたし」は子供のころに迷子になったという恐怖から、大人になってからも道の中央にたたずみながら迷子になることを恐れることが多かったが、外国に旅に出たときに命をつなぐ脈となるという道の役割を知って、恐れることはなくなった。

③　「わたし」は人がみな迷子であると感じるようになってから、次第にまったく違う人生を持ったもうひとりの自分を想像する機会が増えて、知らない道を歩くことに恐怖感を覚えるようになった。

④　「わたし」は知っている道を通るときに過去と現在の二つの道を同時に歩くということに興味を持つ一方で、電車に乗っ

て知らない道を目にしたときには、様々な道で様々な生活をする人々に自らを重ねるようになった。

⑤「わたし」は方向感覚が次第に鋭く研ぎ澄まされてきて、目印さえあれば行きたいと思う場所まで難なくたどり着けるようになったが、同時に知らない道を探索することの楽しさを実感した。

第十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　小池昌代＝こいけ　まさよ（一九五九〜）東京都生まれ、津田塾大学国際関係学科卒。詩人。今回は早大入試の過去問ですが、この方の「背・背なか・背後」という随筆は東大入試でも出題されています

語句

異邦人＝いほうじん↓外国人。英語ではストレンジャー、フランス語ではエトランゼ。アルベール・カミュの小説作品の題名『異邦人』

傍観者＝ぼうかんしゃ↓当事者として参加せず、傍からみているだけの人

疎外＝そがい↓親密の反対で、つまはじきにすること。同じ発音の「阻害（邪魔するの意）」よりも強く攻撃的な意味

危惧＝きぐ↓成り行きを心配し、恐れること

理不尽＝りふじん↓物事の筋道が立たないこと。道理に合わないこと

復習問題　第十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）エン心力がはたらいて安定する　①円　②縁　③園　④延　⑤遠
（イ）理不ジンな要求には屈しない　①人　②陣　③仁　④尽　⑤神
（ウ）迷子の緊チョウ感を思い出す　①張　②跳　③調　④挑　⑤超
（エ）対象を明リョウに認識する　①遼　②療　③寮　④僚　⑤瞭
（オ）両者は容イには識別できない　①易　②居　③異　④衣　⑤意
（カ）迷子は内面、心のキ機である　①気　②危　③飢　④期　⑤鬼
（キ）この出会いは生ガイ忘れない　①害　②慨　③涯　④概　⑤崖
（ク）期タイは失望の母だという　①対　②待　③態　④耐　⑤滞
（ケ）フク合的な機能を果たす事務機器　①腹　②復　③福　④複　⑤服
（コ）電車の中でソウ像をめぐらす　①相　②想　③創　④奏　⑤壮

テキスト解答・解説

第一講その１　哲学・時間論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

成人の常識的な時間感覚

客観的時間

時代や場所を越えた**絶対的な時間**

刻々均一な時計の時間

同一の速さ

全宇宙的な**普遍的な時間の流れ**

⇕ **対比**

比較相手

日常の経験（長く感じられたり

短く感じられたりする）

幼児の時間感覚

主観的な感じ方の違い

《解説》

さあ、みなさん高１・高２現代文講座の始まりです。文章というものは、論説・評論も小説も対比・比較で書かれており、また、入試問題の設問もそこを問うてきます。「この文章の対比がわかりましたか」「比較を通して筆者はなにを強調したかったのかがわかりましたか」と聞いていきます。入試の現代文で大事なことはこれに尽きます。したがって、この講座も、みなさんが文章を対比・比較に注目して読めるように、そこから筆者のメインメッセージがなにか理解できるように、その理解によって入試突破の十分な得点を獲得できるように、進めていきます。

問１《キーワード分類》

「二つの方向からのとらえ方」「二つのグループ」というようにズバリ対比で読み、分類することを求めていますよ。すなわち、〈筆者がおススメのキーワード⟷比較相手のキーワード〉に分けられます。筆者オススメのキーワードは「しかし」という逆接（何らかの前フリを乗り越えていく表現）のあと、「本当の**客観的**時間」として示されます。「本当」とあるから、こっちが大事とわかります。それと対置される比較相手が「**主観的**な感じ方」です。なお、この文章が優れているのは、仮に読者が「主観的」ということばの意味を知らなくても「感じられる」「感じ方」つまり感情や気分のことだとわかるようになっている点です。同様に「客観的」のほうも「時計」で測れる物理的物体的なものと了解されます。対比と言い換えの連鎖！これこそ、よい文章のモデルです。みなさんが小論文などで文章を書くときにも見習いたいところです。以下、時間は、そのときどきの状況や気分で変わるような相対的なものではなく、「**絶対的**」なもので、「成人」の「**常識的**」な捉え方と説明されます。したがって、〈主観的⟷客観的・絶対的・常識的〉の分類で③となります。この他「成人⟷幼児」「違い⟷均一」など、はしばしに対比が効いています。

模範解答

問１＝③

第一講その２　認知科学・時間論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

退屈＝限りある時間を限りないもの、
有限を無限に変える錬金術

メタ認知・無限の可能性を表象
仮想・創造性・志向性

対比

比較相手

現代社会＝目新しく情報が
もたらされる

有限の人生・現実

《解説》

問１《傍線部説明・語句の知識》

まず語句の知識として「望外の幸せ」は、〝当初の望み以上の大きな幸福〟を意味しますが、文脈からも行けます。というより、本来文脈上の意味が大切です。辞書的な意味とは違う意味で使われていることもあるからです。本文によれば「限りある⇩限りない」言い換えれば「有限なちっぽけなもの⟶無限に大きなもの」というわけで〈小⟶大〉という対比です。したがって④が正解ですね。①は、幸せが「叶わない」が×です。大きく叶うはずですから、正反対、記述に反する誤りです。②では、大小が逆転です。対比混乱の誤りといえるでしょう。③は「望めば望むほど遠ざかる」なんて切なすぎです。だったら最初から望まなきゃよかったよ、て感じになります。〝期待は失望の母である〟というわけですかね。とくかく大きく叶うはずですから記述に反する誤りです。⑤の「別なかたち」では、まず、記述に反する誤りです。さらに〈小⟶大〉という対比の軸線から外れてしまいますね。こういうのを正しい対比喪失の誤りといいます。しかし、「望みとは別なかたちで実現する幸せ」って、どんなですかね。お誕生日にゲームソフトを希望していたのに、クリスタルガラス製のチェス・セットをもらっちゃったとか、かな。

問２《空欄補充》

こちらも内容的には問1と同じで〈小⟶大〉、「有限から無限」を生み出す「創造」です。したがって②が正解。「錬金術」という表現もカッコイイ。今どきの小学生なら、将来の夢は錬金術師です、とか海賊です、とかいうのかな。①は「往還」が×。有限に戻ってしまいますよ。対比混乱の誤りです。③も①と似ていますね。「有限にもなれる」が、対比混乱の誤りです。④は「無限」「有限」が正反対です。筆者重視のキーワードと敵役キーワードを取り違えた対比混乱の誤りです。⑤は「無限も有限もない」（どこへ行くんでしょうね）が対比混乱の誤りとも言えますし、「有限から無限」という対比軸という点では、正しい対比喪失の誤りです。

模範解答

問１＝④　　問２＝②

第二講　芸術論・日本文化論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

- 日本の芸術家
- 代表＝松尾芭蕉
- 人工・芸術の行き着く先に自然を見る
- 人工・芸術と自然との親和的関係
- アニミズムの思想
- 一瞬の「ひかり」「いのち」重視

対比

比較相手

- ヨーロッパの芸術家（日本以外）
- 代表＝アンドレ・マルロー
- 人工・芸術と自然との対立的関係
- 「かたち」・造型重視

《解説》

日本文化論のモデルケースです。ヨーロッパとの比較の仕方も含め、今後さまざまな文章を読み理解する上でベースになる教材です。

問１《空欄補充》

主語にあたる「彼等」という複数形が指し示しているのは「日本人」「日本の芸術家」です。比較相手のヨーロッパ人については、これまでのところ「アンドレ・マルロー」だけですからね。さて、そのヨーロッパ人が「自然に感動しない」、自然との関係が「対立的」であるのとは、対照的・対比的なのが日本ですから「自然との一体化」の④と決まります。①は「神」が×です。人間や芸術と自然との関係が〝対立的か親和的か〟が対比の軸線です。人間と神との関係など書かれていませんね。こういうのを正しい対比喪失の誤りというのです。②も正しい対比喪失の誤りです。「理想」など書かれていません。〝理想⟷現実〟という対比はありません。こうして対比ということに意識がいけば、なんとなくではなく、なぜどのように誤りであるかが判然とします。③も同様に正しい対比喪失の誤りです。「似せるか似せないか」の比較になっていません。古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、〝芸術は自然を模倣する（真似する・似せる）〟と語ったそうですが、今回の話題ではありません。

問２《空欄補充》

こちらも日本人の芸術家の考えが入ります。次の段落冒頭の「そういった働き」という表現も決定的なヒントになります。自然と対立的でなく仲良しで、自然自身が生きている、ある「働き」をしてくれるということですから、②ですね。①はまた「神」さまで、正しい対比喪失の誤りです。③は「人工物をも全て含んだ」が×です。何度も書きますが、人間・人工物と自然との関係が〝親和的⟷対立的〟の対比関係が大事です。自然がなにもかもつつんでしまうということではありません。したがって、この「全て」は不当な全称判断です。④の「人間と対立」は、ヨーロッパ側の説明になってしまっています。日本側キーワードを求めているのに、比較相手のキーワードを答える、あるいは混ぜる。これぞ典型的な対比混乱の誤りです。こうした間違いを用意していることから、かえって入試問題が対比の理解を問うているのだな、ということがわかります。

問３《空欄補充》

さて、今度は「あらゆる芸術家（ただし日本の芸術家以外）」のキーワードを問うています。設問によって、こうして敵役・比較相手の説明を求めてくることもあります。これらを通し、トータルで、受験生の読解力＝対比理解力を試しているのです。「造型」「かたち」を第一の目標とはしないのが、日本の芸術家です。ひるがえって、その他の芸術家はそれを第一の目標とするということになります。ゆえに③が正解です。④は、「美」を挙げていますが、「美⟷醜」の対比ではありませんね。正しい対比喪失の誤りです。②は「真理」を挙げていますが、「真理⟷偽・虚」との対比でもありません。これも正しい対比喪失の誤りです。①も同様です。「感動」の有無は今回議論されていません。ことごとく正しい対比喪失の誤りです。

問４《空欄補充》

空欄を含む最終段落は、日本の芸術家の説明でシメです。そして「いのち」が日本側キーワードです。まず、「Dではなく E」という表現ですから「かたちではなくいのち」となりますね。次いでFは、「堕落する」と打ち消されているほうですから、「かたち」と決まります。「Gの果てにH～が肝要」はGを乗り越えてHが大事ということですから、「かたちの果てにいのち～が肝要」と判断できます。最後は、最大目標である「生命の高揚」がかなえば、「Iを止めなくても足れり」すなわち、Iはなくてもよい、ということですから、かたちですね。

模範解答

問１＝④　問２＝②　問３＝③　問４　D＝①　E＝②　F＝①　G＝①　H＝②　I＝①

第三講《小説1》ビフォア・アフターの対比

《本文の対比構造》

母親の「鮨」以前

子供（前半）

魚や肉を食べると身が穢れるような気

（心理的な抵抗感）

「気味悪く～冒険～詰めていた息のようなもの～脅かされ～」

⇕ **主な対比**

母親の「鮨」以後

母親・子供（後半）

一つの気持ちの痺れた世界

母親がつくる鮨への愛感

《解説》

「はじめてのお使い」なんてタイトルのテレビ番組がありました。小さな子供が、生まれてはじめて、自分一人で「お使い」に行き、ちょっとだけ成長する、変化する、ちらっと大人の表情を見せるというものです。こういう転機・変化のきっかけになるものを〝通過儀礼〟〝イニシエーション〟と呼ぶことがあります。七五三とか元服とか成人式とか。ほかにも新入学や卒業、就職、結婚なども、それ以前それ以後で心のあり方が変化するという点で通過儀礼ですね。今回の小説もそう。お母さんが握ってくれた「鮨（タイトル！）」を契機に、子供の心理が変わります。こうした、ある出来事をつうじて主人公が変化するストーリーは大変多く、大学受験現代文の小説問題でも何度も登場しています。こうしたタイプの文章を〝ビフォア・アフター型〟と呼んでいます。そしてこの〝ビフォァ⟷アフター〟で対比をつくります。

問１《傍線部説明》

お母さんは、「みな買い立ての真新しい」道具を用意し、また「使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ」としっかり語って聞かせています。それほど気を使って、子供の心を解きほぐそうとしています。前書きにもあるとおり「魚や肉などを食べると身が穢れるような気」がする子供の心理をほぐそうとしているのです。そう〝心理〟です。アレルギーとかの生理身体のレベルや物理的なものではありませんからね。したがって③が正解。それなのに①は「ひよわ⟷たくましく」という物理的身体レベルになってしまっています。鮨じゃなくプロテイン飲んで筋トレしろよ、と言いたくなります。こういうのを物理的スリカエと呼びます。大学受験現代文小説ではおなじみの誤りパターンです。また同時に正しい対比喪失の誤りでもあります。正しい対比は「心理的抵抗感⟷母親による解消」です。②は「不器用」が物理的スリカエです。手先・指先の繊細さの話じゃありません。④と⑤は「かたくなな態度」「反発」「聞き分けのない」が×です。これじゃ言うこと聞かない〝きかん坊〟〝わがまま小僧〟の話になってしまいます。これも物理的スリカエですし、正しい対比喪失の誤りでもあります。

問２《傍線部説明》

お母さんの心遣いと周到な準備、考え抜かれた順番（玉子焼き鮨→イカ→鯛やヒラメなどの白身魚（シメサバではハードル高すぎだもんね）によって、食べられないと思っていたものを食べられるようになっています。できないことができるようになる喜びを比喩的に表現しているのが傍線部です。したがって②が正解です。①は、まず「自分の力で」が×。盗人猛々しい！（盗んでないけど）とにかく、ずうずうしいにもほどがあります。お母さんの支援あってこそです。記述に反する誤りです。また「どんな物でも食べられる」が絵にかいたような不当な全称判断です。くさやの干物もホヤ貝もブルーチーズもドリアンも食べられるのか、とツッコミたくなります。このように本文に根拠なく、「すべての・あらゆる」とやってしまうのが、不当な全称判断です。③は「もはや他人の目」が×。以前も以後も「他人」など出てきません。親子関係内ですよね。〝お母さんの後ろに誰かいるよ、こっち見てるよ〟って怖いよ。比喩の誤解ですし、正しい対比喪失の誤りと言ってもよいです。④はまず「自由」が×です。前半「拘束」「束縛」があったわけではありません。正しい対比喪失です。さらに「視野が広くなったような」は比喩の誤解です。達成感を「あたりを広く見廻したい」と表現しているだけです。⑤は「分かち与え」る、「周囲」というようにまた他人が登場して×です。記述に反する誤りとも言えますし、比喩の誤解とも言えます。

問３《傍線部説明》

お母さんは「素人」ゆえに握る鮨は「大きさが違って～不細工」です。子供がそういうものに「愛感を覚え～形を調えて～余計おいしい」と感じる理由は、お母さんとの一体感です。「母と子を～一つの気持ちの痺れた世界」とあるように、「鮨」を通して母と子と心の一致・近さ・親しみを表現しています。ウェディング・ケーキにナイフを入れるのが、〝新郎新婦、最初の共同作業です〟などと披露宴でアナウンスされるように。というわけですから、⑤が正解です。とくに「それまでの嫌悪感」から「好ましさ」「親しいもの」への変化は正しいビフォア・アフターの対比を抑えた完璧な答えです。①は鮨の「不細工な形」に対し「同情」してますね。いつのまにかこの子供、上から目線になってお母さんのことを「同情」しています。盗人猛々しいとはこのこと（盗んでないけど）。同情されているのはむしろ、この子供ですよね。こんな立場逆転は記述に反する誤りと言ってもよいし、〝同情される側→同情する側〟という正しい対比喪失の誤りとも言えます。②は「不細工な鮨」に「これまで神経質だった自分」

を重ねていますが、対比混乱の誤りです。傍線部Ｃは〝アフター〟です。それなのに変わる前の自分〝ビフォア〟の内容で説明してしまいました。ね、対比で読めているかどうか、こういう選択肢で試されているのだよ。さらに自分の姿を鮨に投影して「いとおしく」では、自己愛主義のナルシストだよ。お母さんとの一体感だからね、ここは記述に反する誤りでもあります。さて③の「自分で形を調えさせようとする母親」と④の「子供の心をさそうように大きさを違えて」は共通して×です。お母さんは「素人」だから形が違うのでしたね。意図的な技巧ではありません（食べ物で遊んじゃいけません！）。記述に反する誤りです。

問４《全体の理解》

①は「自分の努力で克服」が×。また出たよ、盗人猛々しい（盗んでないけど）。お母さんの助けです。記述に反する誤りです。さらに「体で表現するまでに成長」ですって。〝パフォーマーとしてデビュー以前以後〟かよ。これを正しい対比喪失の誤りと呼ばずしてほかに何と呼ぼう。③と⑤はともに「好奇心」が×です。本文中の「冒険」を文字通り〝前人未到のアドベンチャー〟〝未知の開拓者〟ととった比喩の誤解であり、文脈喪失の誤りです。この子供にとっては食べられないと思っていたものを食べることが「冒険」なのでした。③はさらに「心理の動き」について「外面的なものから内面的なものへ」とおかしな〝ビフォア・アフター〟になってます。そうです、仕組まれた正しい対比喪失の誤りです。〝仕組まれた〟は、言い過ぎですが、こうして間違った選択肢を意図的につくっているのです。そうした間違いの特徴に馴染めば、入試現代文の得点力は、とても上がるのだということがわかるよね。④は「おどすような態度」「無理強い」がいきなり×です。鬼母か！　本文は「怖くない程度の威丈高」でしたよ。子供が尻込みしたりすると、背中を押したということです。はげましであって、虐待が疑われる事例じゃありません。記述に反する誤りです。さらに「それまで抱いていたやさしい理想的な母親像との間に微妙なくい違いを感じさせられ」もしらじらしいほどの記述に反する誤りです。むしろ「一致」「重なり」です。⑤は、先の「好奇心」以外の×として「自分の思うような反応を示してくれるわが子」が挙げられます。〝言うこと聞かない――→言うこと聞く〟という〝ビフォア・アフター〟じゃありません。操り人形化か！　正しい対比喪失の誤りです。加えて「日頃子供が抱いていたと思われる母親像をも訂正」もいけません。記述なしと言ってもよいし、あるいは、訂正したのはあくまで魚や肉を食べられないという心理的抵抗感だと考えれば、正しい対比喪失の誤りです。したがって②が正解。「子供の気持ちをときほぐし」なんて、完璧です。

模範解答

問１＝③

問２＝②

問３＝⑤

問４＝②

第四講　スポーツ論・文化人類学

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

ブラジル＝プレーヤーの個性と直感を
肯定する攻撃的フットボール
攻める快楽重視
美しさにこだわる遊戯的なファンタジー

主な対比

敵役＝現代の主流

ドイツ・イングランド・スウェーデン
＝役割遵守・組織的守備的フットボール
失点する不安の強調
勝敗原理の支配
結果だけを求める退屈なリアリズム

小さな対比

脇役

●**フランス・イタリア・スペイン**（ヨーロッパ的合理戦術＋余剰的ファンタジー）…矛盾

●**アルゼンチン**（ファンタジー＋組織）…運の喪失

《解説》

サッカー・ワールドカップが入試素材です。楽しいです。二〇〇二年の日韓共催大会の模様、ならびに近年のサッカー界の動向を、気鋭の文化人類学者が論じています。プロの文章家がフットボールを論じるわけですから、見事な対比分類が現れています。

問１《空欄補充》

［Ⅰ］は、ブラジルにかかる説明で、「役割遵守～守備的～組織的」との対比です。したがって③「攻撃的」と入ります。第二段落にも「創造性と攻撃本能」とあり、ヒントになってます。［Ⅱ］は、敵役キーワードです。「ゴールへといたる創造的な過程」「美しさにこだわる遊戯的なファンタジー」との正反対・対比です。つまり意表をつくスルーパスを華麗にシュートするとか、四〇メートル弾丸ライナーのボレーシュートとか、オーバーヘッド・キックとか質を問わない、ただの「得点」「数字」ということです。どうやって得点しようと一点は一点というわけです。答えは②「記号的」です。［Ⅲ］は、〈ドイツVSサウジ〉という一ゲームが「なにがフットボールなのか」を問うている、つまり具体的なものが抽象的なことがらを指すわけです。〝ハトは平和の象徴〟というように。こうした〝具体物━━▶抽象的意味〟という表現を「象徴」というのです。④「象徴的」が正答。ちなみに最終段落にも「象徴」という言葉がありますね。こちらも同様に〈ドイツVSブラジル〉という一ゲームが「フットボールのあるべき未来像」という抽象的なものを示している、ということです。［Ⅳ］は、敵役キーワードです。「守備的組織的な方です。「役割遵守」です。したがって、「個性」や「自由な快楽」を縛る⑤「抑圧的」と入ります。

問２《接続語補充》

まず［Ａ］の前段落は、ヨーロッパ・フットボールの「主流」（英国のプレミア・リーグとか、スペインのリーガ・エスパニョーラとかドイツのブンデス・リーガとか、イタリアのセリエＡとか）が「勝利至上主義」だとの説明があります。空欄の後、「国家の威信がかかるＷ杯」ではその「勝利至上主義」が「より強い」とされます。したがって〝絞り込み・強調〟を意味する②「とりわけ」が正答です。

問３《空欄補充》

B は、フランス・イタリア・スペインの説明です。今回の主役キーワードと敵役キーワードの〝ハーフ&ハーフ〟です（ピザならおいしそう）。ヨーロッパの主流「合理戦術」とファンタジー・個人技の融合です。でもうまく合わなければ二律背反で①「矛盾」です。さて、一人ブラジルだけが「守備的・組織的・合理的」フットボールに背きます。第一段落にも「孤独な叛乱」とあります。というわけで C は④「反乱」です。「叛乱」と発音も意味も同じです。

問４《内容説明》

「『勝敗原理』に支配されたフットボール」は敵役側です。「支配された」なんて虐（しいた）げられた感じ・否定的ニュアンスが伝わってきます。タイトル「フットボールの快楽」の反対なわけです。②・④が正解です。①は「勝っている間は点を取ろうとせず、ひたすら守備に専念」が×です。ドイツはサウジから8点取りましたよ（野球の試合か！）。記述に反する誤りです。③はどうでしょう。「抑圧」という言葉自体はOKですが、「闘争心は抑圧」はマズイです。組織的ではあっても試合に勝つ気は満々です。「闘争心」がなければそもそも試合になりません。みんなオテテつないで、仲良くゴールインてか。はい、記述に反する誤りです。⑤はどうでしょうか。「見当たらない」とありますが、見当たりますよ。アルゼンチンがそうです。フランス・イタリア・スペインも。というわけで記述に反する誤りです。

問５《内容説明》

③の「いつの時代でもどの国でも見られる」がしらじらしいほどの不当な全称判断です。「孤高」「孤独の叛乱」のチーム、ブラジルの説明なのに、あらゆる国に見られる話になってしまいました。本文にないのに〝すべての・あらゆる〟と大風呂敷を広げてしまうのは間違いなのです。大きすぎず小さすぎず、過不足なく、本文に従いましょう。今回は間違い探しの問いですから、この③が正解。その他は本文の記述と合致しています。

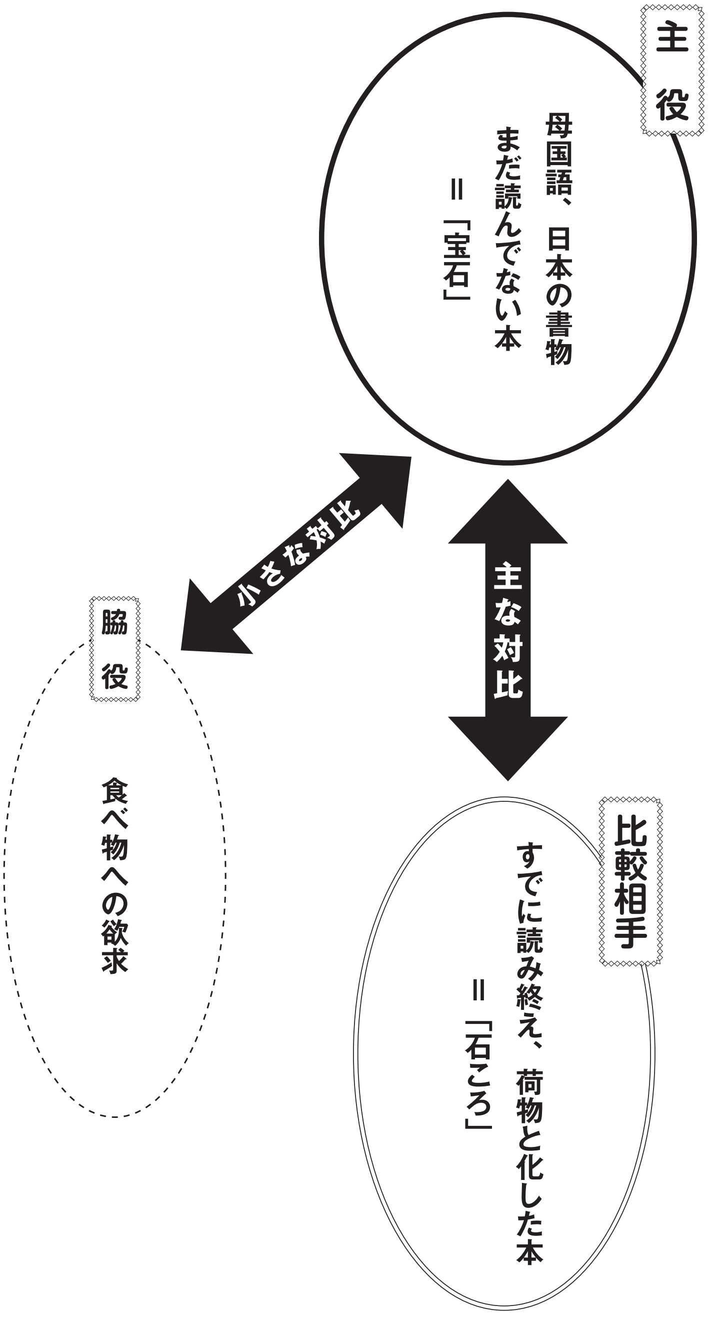
模範解答

問１　Ⅰ＝③　Ⅱ＝②　Ⅲ＝④　Ⅳ＝⑤　問２＝②　問３　B＝①　C＝④

問４＝②・④（順不同）　問５＝③

第五講その1　《随筆》　旅論

《本文の対比構造》



《解説》

第一講に続き、今回の第五講も二本立てにしてみました。ときどき、あえて文章や設問をしぼって、リズムを変えたりします。その目的は、対比を見つけて読み・解くことにいつも以上に焦点化すること、また全十四回講座のなかで、よりたくさんの文章に触れてもらいたいということにあります。

問１《空欄補充》

［A］は、「母国語の書物・日本語の本」に関する表現ですが、答えを決める基準は二つあります。すなわち〝満たされなかった〟という表現とセットになることと「食べ物」と関連することとです。「満たされることがなかった」というところだけ見ていると②「充実感」でも当てはまりそうです。しかし、「食べ物」との比較が成り立つためには③「飢餓感」である必要があります。つまり日本語の書物への渇望感（ないから欲しいという感覚）は食べ物より勝っていたということです。その他の選択肢①「焦燥感（あせり）」、④「喪失感」、⑤「安堵感（安心感）」は、そもそも「満たされる」ということばとセットになりません。すべて×です。

問２《空欄補充》

それぞれ「石ころ」か「宝石」かの二者択一です。まずベースになるのが「母国語の書物は一つの宝石である」という素敵な表現です。さて［B］は前後に「ただの」「化してしまった」という否定的な意味のことばが付いています。しかも「荷物としての書物」とまでありますから、「石ころ」と決まります。「宝石」といっても、まだ読んでない、ゆえに期待が膨らむ書物の方が「宝石」なわけですね。さて、したがって「相手の［C］」はまだ読んでない方ですから「宝石」ですね。つぎに「私の［D］」はすでに読んだ方ゆえ「石ころ」です。それも相手に渡れば「宝石」になるはずですから［E］は「宝石」です。

模範解答

問１＝③

問２

B＝①

C＝②

D＝①

E＝②

第五講その２　建築論

《本文の対比構造》

主役　筆者の見解
＋
ロラン＝バルト

エッフェル塔＝内部の不在
という逆説的な建造物

主な対比

小さな対比

比較相手

従来の建築物・本来の建築
（例）ノートル＝ダム寺院・ルーヴル美術館
壁や屋根で囲まれた空間をもつ
訪れるべき内部をもつ

脇役＝一般論

エッフェル塔に関する筆者やバルト**以外の人の意見**
「三層にわたる展望台」「ある種母胎的な包摂感」

《解説》

問１《語句解説・記述》

気を付けるべきは、傍線部にすでに出ていることばを解答に使わないことです。説明とは言い換えのことですから、同じことばを使うと〝同語反復（トートロジーと言われます）〟になってしまいます。〝人間とは、人間のことだ〟〝ホットケーキとはホットなケーキだ〟とやってしまうようなものです。後者なら〝小麦粉とタマゴを主原料によく混ぜ、丸く焼き上げたスイーツで、バターとメイプルシロップをかけるとなお美味〟などとします（くー！お腹すいてきた）。同語反復では、説明になってないよ、無意味だよと言われてしまいます。さて、Ａの「耳目を集める」ですが、最初から意味を知っていれば、あっけなく解答できたでしょうが、そうでなくても、傍線部にかかる「世間の」ということばやそのあと出てくる「パリ市民のあいだで物議をかもさずにはいない刺激的なスキャンダル性」といった表現もヒントです。というわけで、「話題になる」「注意（注目）を引く」「関心を引く」「脚光をあびる」などと書けばＯＫです。いいですね、「話題を集める」などとしないことです。Ｃ「ひそみにならって」は「真似をすること」です。本文に則せば「モーパッサンのまねをする」ということです。その他「模倣する」「前例に従う」「お手本とする」などの表現もＯＫです。こちらも「前例にならう」などと傍線部と同じ文字を入れないでね。さて、漢字で書けば「顰みに倣う」です。

問２《傍線部説明・記述》

「内部の不在」とは、今回の主役であるエッフェル塔の特性です。文章の対比・比較を踏まえて言い換えれば、エッフェル塔ではない他のものにはある、存在する「内部」がエッフェル塔にはないということです。したがって、〝エッフェル塔ではない他のもの〟とは何か、それらにはある「内部」という特性を言い換えれば何か、本文から見つけます。まず、対比相手の〝エッフェル塔ではない他のもの〟とは、「従来の建築物」「石造のモニュメント」「本来の建築」です。いずれでもよいですが、これが得点になる第一ポイントです。「ノートル＝ダムの塔」や「ルーヴル美術館」だけだと○ではなく△です。少し減点されるとお考えください。なぜなら、具体例だからです。「はじめに」の《記述式問題解答へのガイドライン》にも記した通り、具体例ではなくよりまとまった表現が優先されます。「ノートル＝ダム寺院のような従来の建築物」といった表現なら減点はありません。

では、「内部」の説明に移ります。これは「石の壁や屋根で空間を囲いこみ（囲繞し）外部と異質化すること」です。細かく分けると「石の壁や屋根」が第二ポイント、「空間を囲む（囲繞する）」が第三ポイント、「外部と異質化する」が第四ポイントです。加えて、「訪れるべき内部」「見るべき対象」「探索（探検）する空間」を第五ポイントとします。そして「不在」の言い換えとして「欠如」「排除」「ない」「存在しない」などが第六ポイントです。最後に「逆説的」を第七ポイントとします。一般的な建築物と異なることを凝縮している表現です。全部で七箇所得点になるキーワードを言いましたが、順番は問いません。自分の答案にこれらに該当するものがあれば、一つずつ加点していきます。記述答案で満点は困難です。四つ得点できたら上出来です。

模範解答

問１　Ａ＝注意を引くこと　　Ｃ＝真似をすること

問２　従来の建築物のように石の壁や屋根で空間を囲い外部と異質化することがなく、訪れる空間もない逆説的側面。（句読点とも五〇字）

第六講　科学論・翻訳論・異文化理解論

《本文の対比構造》

主役

「義訳」＝ヨーロッパ語の原語の意味を取って新たに造語する

自己の属する文化圏と翻訳相手の文化圏との違いを意識させるもの

……筆者が言う本当の翻訳

対比

比較相手1

「翻訳」＝ヨーロッパ語の原語の概念に相当する日本語を当てはめる

杉田玄白の言うところの「翻訳」

対比

比較相手2

「直訳」＝ヨーロッパ語の原語をそのまま使う

対比

《解説》

問１《キーワード説明・記述》

「このような基準」とは、どのような場合にどんな「訳」をするのかということです。したがって答案の中身は、「翻訳」「義訳」「直訳」のそれぞれの説明ということです。もちろん、使えることばの素材は本文中にあります。傍線部直前の、玄白の現代語訳の中にも素材があります。さらに、後半「神経」の例を出しているあたりにも「翻訳」「義訳」の説明があります。さて、解答を作る際には、**〝具体例はカット〟〝対比を表現する〟〝繰り返されている表現は大事〟**という記述答案の三大原則がよくあてはまります。またそういうことができるようになるための練習課題です。つまり「ベンデレン」「骨」「カラカベン」「軟骨」「キリイル」「神経」「経絡」などという具体例ではなく、まとまった表現として繰り返し出てくる語が、重要キーワードとなるわけです。では「翻訳」の説明として得点になるポイント箇所を言います。「ヨーロッパ語」「原語」「外国語」などの表現が第一ポイント。次いでそれらに「相当する日本語」「当たる日本語」のうち「相当する」「当たる」が第二ポイント。「日本語」「語」が第三ポイントです。さらにそうした日本語に「置き換える」「当てはめる」「適用する」などの表現が第四ポイントです。四つのうち二つくらい押さえられたら受験生の答案としてはＯＫです。では、「義訳」のポイントを挙げます。「翻訳で済まさない」「翻訳せず」が第一ポイントです。対比を入れます。日本語に相当する単語があるのにそれを使わないということです。せっかく外の世界（ヨーロッパ）のものの考え方を導入しようとして訳をしているのに、もともとある言葉で済ますと誤解を生じる、違いがわからなくなることを、杉田玄白は警戒したわけです。こういう対比を入れられるようになると、得点力がありありと増強されます。次に、「原語の意味を取る」「原語の意味を取って解釈する」のうち「原語」（ヨーロッパ語・外国語）が第二ポイントで、「意味を取る」「意味を取って解釈する」が第三ポイントです。さらに「新たに」が第四ポイントで、「造語する」「つくる」が第五ポイントです。「新造語」なら第四と第五をまとめて得点します。以上、合計五つポイントがありました。三つ取れたら上出来です。最後は、「直訳」のポイント箇所です。「翻訳できない」「相当する日本語がない」などが第一ポイントです。次に「義訳できない」「造語できない」「意味を取ることができない」などが第二ポイントです。つまり、ここでも対比が入ります。次いで、「原語をそのまま使う」となりますが、細かく「原語を」「外国語を」「ヨーロッパ語を」が第三ポイントで、「そのまま」が第四ポイントです。こちらも二つは取りたい。

問２《全体の主旨》

間違い探しです。④にご注目ください。「翻訳される側（例えば西欧）」と「翻訳する側（日本）」、「両者の～共通な価値」とありますが、この「共通」が×です。「違いを認識」することこそが大切で、そのことを意識させるのが「翻訳の理想」「本質的な意味で」の翻訳です。〝杉田玄白版の「翻訳」〟なら日本語との「共通」点重視でしょうが、この全文の内容に関わる問い、つまり筆者の見解として重要視されている翻訳、〝筆者版翻訳〟の説明をしなくちゃなりません。というわけで対比混乱の誤りと呼んでも記述に反する誤りと呼んでもＯＫです。その他は本文の内容に合致しています。

模範解答

問１　翻訳＝原語の概念に相当する日本語に置き換えること。
　義訳＝翻訳で済まさず原語の意味を取り新たに造語すること。
　直訳＝翻訳も義訳もできないため原語をそのまま使うこと。

問２＝④

第七講　宗教論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

僧という身分であることほど
怖いことはない
自らをその道の完成者と見てはいけない
自己省察・自責の念
羞（はじ）を知る僧侶＝臨済和尚・
黄檗和尚・五祖法演

主な対比

敵役

迷いも悩みも知らぬ僧侶
世の中や人の心の貧しさを嘆く
＝他人事（ひとごと）・他責的言動

小さな対比

脇役＝一般論

高名な僧侶に対する普通のイメージ
＝他者への救済者として自立

《解説》

問１《傍線部解説》

筆者が重視している考え方です。この傍線部に続く部分で、「自らの在りかたに決着をつけようとする覚悟」「絶えず現在の自分の生き方を恥じることが必要」「現在の職業や地位に腰を据えてしまうことなしに、自分の新たな可能性を絶えず開拓しようとする気魄をもち続ける」「自らをその道の完成者として完結させてしまってはならぬはず」などと言い換えられています。そのため僧侶になることは「怖い」ことであり、「ディレンマ」「苦悩」を引き受けなければなりません。したがって、③が正解です。①の「仏法を悟り、『日々これ好日』」は今回の敵役です。同様に④の「悩みを断ち切って」も⑤の「僧という身分であることの怖さを恐れない」もことごとく敵役です。満ち足りちゃって、「迷いも悩みも知らぬ（と見える）平穏無事な、ふっくらとしたお顔」のヤツラです（失礼、方々（かたがた）です）。主役メッセージの解説を求めているのに、敵役を答えてしまう、これぞ典型的な対比混乱の誤りです。②は一般的な僧侶へのイメージです。敵役とは言えませんが、主役でもない。はっきり脇役として区別しなくてはなりません。こうした設問を見るにつけ、〝文章読解力〟と言われているものがグループ分け、対比で文章が読める力なのだとわかります。つまり〝入試現代文〟で求められている力、とりもなおさず大学の各学部での高等教育を受ける前提の力とは、比較の区別能力、書かれた文章において、筆者は〝何ではなく何を主張しているのか〟を判断する力なのです。

問２《空欄補充》

強調表現が入ります。自分を完成者だと思ってはいけない、まだまだ未熟だと考えることが「社会人たると宗教者たるとを問わず」（受験生もそう、教師もそう、予備校講師もそう）大事、「基本的な要件」です。ですが、宗教者なら「なおさらだ」というわけです。したがって①の「まして」が正解です。ちなみに③の「はしなくも」は意図せずして・図らずもという意味です。

問３《空欄補充》

筆者側の見解を問うています。言い換えれば、筆者がオススメしている黄檗和尚の言葉が入ります。「世道人心の退廃を歎い」ているような僧侶の反対です。さらに言い換えれば、他人の悪口を言う〝他責〟の反対で、「自責」の方です。この黄檗和尚と

同じように立派な、つまり自分はまだまだと恥を知っている僧侶として「宋代初めの名僧、五祖法演」のエピソードもこの後に出てきてヒントになります。それによれば「このおれはダメな僧だ！」です。こういうわけですから、「いかにも私は徳もないお粗末者」と自分を責めている①が正解です。他はすべて他人のことを悪く言ってます。確認しましょう。②は「おまえは道に達していない」が×です。③は「いかにも私は」はＯＫだったのですが、「しかしそんな役人」となってしまい、他人の悪口にすりかわっています。④は「道をもたない徳のない役人」が×。⑤は「人情の薄い人たちばかり」が×。こうした他責的他罰的言動は、自分は満ち足りた今回の敵役の言葉と言えます。したがって、②〜⑤すべて対比混乱の誤りです。

問４《傍線部説明》

おもしろい設問ですね。筆者の見解でもなく、敵役でもなく、一般的なイメージを問う問題です。設問にも〝色〟があるということです。言い換えれば、こうした問いの構成、問題の作り方からしても、文章を対比で読んでね、と大学側が語っているということです。①③は世間の悪口を言う今回の敵役ですから、対比混乱の誤りです。⑤の「驢馬そっくり」というセリフはエピソード中の「役人」のものです。「われわれ」の「普通のイメージ」とは違いますから、記述に反すると呼んでもよいですし、あるいは、ともかく他人の悪口を言う態度としてまとめれば敵役に属するとも言えます。その場合は、対比混乱の誤りです。④の「苦悩」は筆者が重視するものです。これはこれで設問の要求とは違うものですから、対比混乱の誤りです。こうして消去法のようになりますが、正解は②です。本文中の表現としては「他者への救済者として自立できる」にいちばん近いものということになります。

問５《空欄補充》

敵役が入ります。「人の心は貧しい」などと「他人事のように語る」のは、第一段落に登場した「満ち足りたお顔」の僧侶たちです。彼らはお顔も同じようなのが「そろう」方々です。「どのお顔もなべて」「ふっくらとしたお顔ばかり」とありますね。さてこの方たちは話す内容もそっくりで〝それ、百万回聞いたよ〟と言いたくなるようなことを繰り返しているということでしょう。こうした〝判で押したような〟画一ぶりを「紋切り型」というのです。江戸の伝統的なお菓子である〝金太郎あめ〟と同じ

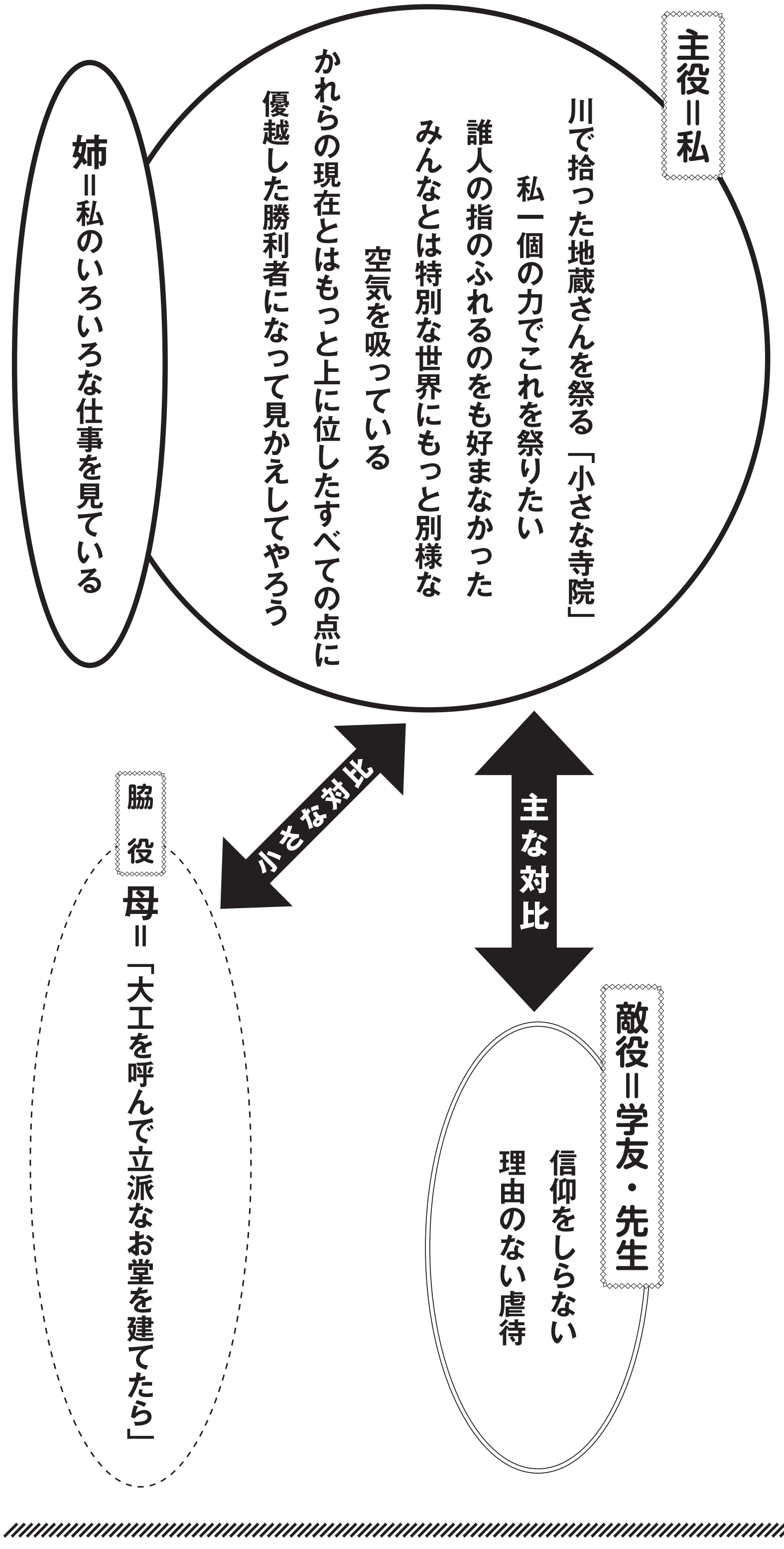
です。切っても切ってもどの顔も同じ（ちがったら怖い！）。〃ステレオタイプ〃〃ステロタイプ〃とも言います。この英語の言い換えもぜひ覚えておいて。以下、意味の難しそうな選択肢について、説明をしておきます。①「搦め手」は、お城の裏門や陣地の後ろ側のことです。そこから相手が注意を向けていない所、相手の弱点という意味もあります。⑤「人口に膾炙」は世間で評判、広く知られているという意味です。④「もってまわった」は遠回しな言い方のことです。まわりくどいということです。

模範解答

問１＝③　問２＝①　問３＝①　問４＝②　問５＝③

第八講　《小説２》　人物相互のグループ分け

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明》

ここで大事なのは「秋の雁」や「花」は比喩ですよ、たとえだよ、ということ。主語である「若鮎は」の説明として、「秋の雁のように〜行列をつくって」「花の散るように列を乱す」と表現しているのです。けっしてこの犀川の上空に渡り鳥が編隊を組んで飛翔しているわけではないし、犀川の土手に桜の木があって花びらを散らしているのではありません。それは比喩の誤解（比喩なのに文字通りに解釈してしまった誤り）で、②⑤がこれにあたります。例えば歩き疲れて、〝足が棒になる〟という表現がありますが、文字通りとったら〝ピノキオか！〟とツッコミたくなります。〝いやー膝が笑ってるよ〟を文字通りとったらオカルトです。膝になにか取り憑いてますよ、ってことになります。④は「瞬時にして次の局面への展開をはかる」が×です。記述に反する誤りです。傍線Ａの前も後も（しばらく後までずっと）川の話です。局面（場面）は展開（変化）していません。あくまでも若鮎の隊列が乱れた話ですね。①は「雅語」が×です。「比喩」です。けっして〝俗語・スラング〟に対して〝優雅で正しいことば使い〟をしているというわけではありません。〝チョー、ヤバイ〟みたいなくだけた表現に対し〝たいへんよろしゅうございます〟みたいな優雅さが対置されているわけではないということです。記述に反すると言っても正しい対比喪失の誤りと言ってもよいでしょう。したがって、③が正解です。

問２《傍線部説明》

この「石の橋にされても」の「も」はこんなことになって「さえも」というような【極端な例示】を表現するものです。あんなことやこんなこと（踏んだり蹴ったり）も含めていることを極端なケース（石橋にされる）で語っているということです。もうなにがあったって人間を救うぞという意味です。これを〝〇〇しないと人間を救ってあげないぞ〟という【条件・限定】でとったら正反対です。その正反対の間違いが①②です。①の「石橋にされ人間に踏みつけにされることを通じて初めて」なんていかにも【条件・限定】でしょ。ついでに言うと、これじゃ地蔵さんはマゾヒストだよ（踏んでくれないとイヤヨ）。②は「日々のお祈りなどの信心の深さへの応報としてのみ」となっています。これらは記述に反するとも言えますが、不当な限定と言うのが最適でしょうね。③はまず「自己犠牲」が×。正しくは「人間にひどい目にされても」ですからね。記述に反する誤りです。ま

た「人間〜の愚かさを自覚させ」などとえらく教育的な地蔵さんです。限定なしに人を救う本来の姿から大きくズレています。記述に反する誤りです。⑤は「も」を「ＡもＢも」というような追加で取ってしまうという誤解をしでかしています。記述に反する誤りです。しかもですよ、「精神的側面〜だけではなく〜実際的な形でも」って、笑えます。〝いやー、地蔵さんのこのカタチ、このシェイプ、この首から肩へかけてのくびれのラインが石橋にツカエル！イエイ！〟ってバチアタリだよ（もちろん「実際的な形」は、実践面で、という意味で〝シェイプ〟のカタチではないけどね）。したがって④が正解です。

問３《傍線部説明》

正解は①です。根拠、判断材料は以下の言葉です。「決して悪いことでないことを知っていた」「何かしら疑うことのできない宗教的感覚が存在しているように信じていた」「きっといいことがあるわ」「こんなにしてこれが何になるとか、いますぐ自分にむくいられるとかいうことを考えなかった」。つまり、なにか具体的な応報（ごほうび）の内容まではわからないが生涯のいつかいいことがあるはず、ということです。②は「生涯をかける」が記述に反するとも、「生涯を賭して」の文脈喪失の誤りとも言えます。お地蔵さんを大切にしていれば、ひょっとしたら明日にでもいいことがあるかもしれないのです。一生かけないとダメでは厳しすぎて、本文で言われるお地蔵さんの慈悲深さの限りなさに合致しません。その点では、不当な限定とも呼べます。③の「恵まれた生涯」や⑤の「周囲の人々から偉い人として認められる」は内容限定があって不適切です。記述に反する誤りです。④は「小さな寺院ができあがることによって」が誤った限定です。お参りするだけではだめなのでしょうか。寺院が完成しないと報われないのでしょうか。お地蔵さん、心が狭いよ。というわけで不当な限定です。さらに次の点でもおかしいです。本文では「小さな寺院が、だんだんに日を経るに従って、小屋がけが出来たり、小さな提灯がさげられたりするのは、何ともいえない、ただそれはいい心持ちであった」とあります。この「従って」は時間の経過を意味しています。それを④の選択肢は「原因」と取り違えたのです（間違いの選択肢になるようにわざと）。こういうわけで記述に反する誤りとも、「従って」の文脈喪失の誤りとも呼べます。

問４《傍線部説明》

①が正解です。「完全に」は言い過ぎではないか、不当な全称判断ではないかと一瞬考えます。しかし、本文中にも「全然」という全面否定がありますから、不当ではありません。②は「姉や母に対する私の親近感の深まり」が×です。「姉」は「私」に寄り添う存在で、同一グループですが、「母」はそうではありません。大工さんなど外部の力とセットです。したがって、この選択肢は典型的な対比混乱の誤りを構成します。文章を対比で読め、グループ分けで読めということです。見方を変えると、いいですか、この選択肢を×としてつくっています。これを×として排除できる力を〝読解力〟としてカウントしているのです。この講座を通じて、入試現代文で求められている力が何か、クリアに把握してくださいね。次に③は「学友らに対する寛容の精神」がしらじらしいほどの間違いです。未来での復讐を誓っています（怖い！）。現在は無視できるというだけで、決して許していません。記述に反する誤りです。④は「忍耐心」が文脈喪失の誤りです。「忍辱」は辞書的には「忍耐心」ですが、本文ではどうか。脚注にあったように「はずかしめに耐えることを強いられた、というほどの意味」です。⑤は「現実的な利益を一切求めない」が×です。「偉い人になるように」願っていましたよ。記述に反する誤りです。なお、「一切」は、不当な全称判断ですね。

模範解答

問１＝③　問２＝④　問３＝①　問４＝①

第九講その１　哲学論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

ほんとうは難しい「正常と異常」の区別

⇕ 対比

敵役＝一般論

「正常と異常」の区別を簡単に考える
自分を「正常」の側に置く
「異常」との区別において自らの
「正常」を証し立てようとする

《解説》

問１《空欄補充》

「正常」か「異常」かの二者択一問題にしぼりました。さて、筆者はこの区別について「ほんとうは多くの難しい問題を含んだ問題である」と考えています。それなのに、〝敵役＝一般論〟の側は「通常簡単に考え」ています。しかも、「自分の身」を「正常」の側に置いて。もう［A］の答えを書いてしまっていますが、「簡単」な方、いわば世間がそうしたがる安易な方、ですから「正常」だという類推は成り立ちます。もう少し慎重に考察するため、第二段落に注目します。一般論にあたる「人々」が「〈魔女狩り〉」に熱心であることが書かれています。「魔女」は異質なもの、「怪しい」もの、「異常」なものです。それとの区別・排除によって自分の「正常」を証明しようとします。こういうわけで、自分の側にあたる［A］と［D］が「正常」、一線を画され排除・区別される側の［B］・［C］・［E］は「異常」と決まります。

模範解答

問１　Ａ＝正常　Ｂ＝異常　Ｃ＝異常　Ｄ＝正常　Ｅ＝異常

第九講その2　文学論

《本文の対比構造》

鶏頭の十四五本もありぬべし　子規
辛崎の松は花より朧にて　芭蕉
山路来て何やらゆかしすみれ草　芭蕉

これらをめぐって左の対比

主役＝筆者の見解

伝統的な約束を無視・意表をつく・新鮮さ・逆説的な表現の大胆さ

対比

比較相手＝俳句の伝統や約束および一般的論評

写生句・素直・ありのまま・見たまま・永久不変の写実の原則・実景や実感を詠んだもの・即興

《解説》

問１《傍線部言い換え・抜き出し》

比較相手の言葉が入ります。つまり普通、花を詠むなら注目するでしょ、という対象を答えます。さらに「花本来の面目」という問題箇所自体に加えて、〝周辺の表現〟も大事です。すなわち「花本来の面目をないがしろにし」という筆者による否定表現とセットになっていることに注意を払いましょう。五字以内という条件もあります。こうして「その形や色には目もくれず」が浮かび上がります。もちろん「その」は花のことです。したがって「形や色」が正解です。このように〝周辺の表現の類似（一致）〟は重要な手掛かりになるということを覚えておいてください。

問２《傍線部言い換え・抜き出し》

筆者の主張が入ります。全体の対比構造として〝写実ではなく○○〟の○○に当たるものになります。「型破りの表現の意外さ、新鮮さ」の言い換えを答えることになりますが、ここでも〝周辺の表現の類似〟に気を配ろう。すなわち「この句の眼目は」という主語（主部）に導かれるという点です。第１段落でいうと「この句がリアルにひびくのは」がその主語（主部）です。これの中身・述語（述部）に当たるのは傍線Ａと「意表をつくこの表現の新鮮さ」です。傍線部が別の問の答えになることは通常ありませんし、「意外さ」の言い換えということで「意表をつくこの表現の新鮮さ」と決まります。第３段落ですと、「この句の場合、興味の焦点は」が主語（主部）です。これの中身は「逆説的な表現の大胆さ」です。では、同じ構造を第４段落で探します。そうすると主語（主部）は「俳句のリアリズムは」です。これを受けた意外性を表現する述語（述部）は「表現の斬新さ、『耳新しさ』」ですね。さて、このように第１から第４段落まで、少しずつ具体例を変えながらもほぼ同じことを主張しています。段落ごとに輪切りにすると同じ対比構造が繰り返される。まさに金太郎アメですね。もっと難しい文章のときもそうした繰り返しがあるはずだと思い出してください。そうすれば全文の一部始終について理解が及ばなくても、わかるところから拡張し、こういうことを言葉を変えながら繰り返し主張しているだけではないか、と捉えなおせます。実は、あるワンメッセージを言い換えているだけだと。これは難しそうに見える文章を読んでいくときのコツです。

模範解答

問１　形や色（「その形や色」でも可）

問２　第１段落＝意表をつくこの表現の新鮮さ
第３段落＝逆説的な表現の大胆さ
第４段落＝表現の斬新さ、「耳新しさ」

第十講　脳科学・コミュニケーション論

《本文の対比構造》

主役＝ミラーニューロン
発見以後の脳科学研究

人間の「社会的知性」
他者との関係性・利他性
「顔」の持つ大きな意味
＝人物の「認識」と「選択」
＝顔の「ラベル貼り」

主な対比

比較相手＝ミラーニューロン
発見以前の脳科学研究

個体として完結した脳の機能

小さな対比

脇役

名前や党名やマニフェスト
顔の生物学的な機能

問１《傍線部説明・記述》

設問条件が、ある種の〝ビフォア⟷アフター〟の対比があることを教えてくれます。〝脳科学の一大転機以前⟷以後〟です。より詳しく言えば、「ミラーニューロンの発見以前⟷以後」ですね。段落レベルでは第一段落が〝ビフォア〟で第二段落から〝アフター〟です。さて**記述式問題解答へのガイドライン**に記したように**対比の表現・繰り返されている表現は大事・具体例はカット**という三原則に従います。そこから第二段落の「脳は個体として、その機能が完結しているのではなく、他者との関係性もまた、脳の機能にとって非常に重要な意味を持つことがあきらかになった」という対比表現に注目します。「個体として、その機能が完結」の部分は（一）でも使えます。そしてこれを補足説明している第一段落の言葉を重ねます。「脳のメカニズムを生理学的なアプローチで解析する」という言葉です。では（一）について、試験本番で加点されるキーワードを言います。順番は問いません。自分の答案に該当する表現があれば、その単語ごとに足し算です。第一ポイント「脳の機能（メカニズム）」、第二ポイント「個体として完結」、第三ポイント「生理学的」「生理学的アプローチ」、第四ポイント「解析」「研究」です。以上四つのポイント箇所のうち、二つ取れるといいですね。

次に（二）について。先述の第二段落の言葉にさらに「社会的知性」というこの文章全体を貫く大キーワードを加えるとうまく行きます。では加点キーワードを言います。第一ポイント「個体の機能ではなく」「完結した機能ではなく」（こうして対比を入れる！）、第二ポイント「他者との関係（性）」、第三ポイント「社会的知性」、第四ポイント「（それらの）重要性があきらかになった」です。全四つのうち二つあげられればまずまず。三つ以上ならホントすばらしい。ともあれ記述問題は、模範解答通りの完全解答でなくても、キーワード単位で得点化されます。したがって、あまり思いつめず、可能性のありそうな語句をひろってやりましょう。

問２《空欄補充》

［Ｂ］は筆者が再三強調している「社会的知性」の具体的言い換えに当たります。さらに続いて「他の人のために奉仕するという性質」とまで噛み砕いて説明してくれてます。したがって「利他」の⑤が正解です。よく「エゴイズム」が人間の本質だと、わかったように言われるけれど脳科学のレベルでは人間の本質として「利他性」があると指摘されています。他人にいいことを

すると脳内の快楽物質が出て本人も気持ちいいわけです。これは人文科学的にも社会科学的にも重要なことですね。ちなみに③の「利敵」（敵に塩をおくる、みたいな）は、限定しすぎです。敵味方の区別なしです。さて［C］は「利他」の正反対です。「自分さえ良ければ」の言い換えですから「利己」の②です。①の「利益」も④の「利得」も、誰の「利」か不明ですから、［B］［C］いずれにもあてはまりません。

問３《傍線部説明・抜き出し》

授業内で、評論・論説文のときには〝設問条件先取り読み〟と〝最終段落先取り読み〟を推奨していますが、今回もバッチリ有効ですね。設問は「顔」が人間の「社会的知性」にきわめて重要な意味を持っているのは「なぜ」と問うていますが、この問いは、ほぼそのマンマ最終段落で繰り返され、そしてズバリ解答されております。それは、「顔の造形そのものというよりも、むしろ顔に表れる表情と心の問題が、コミュニケーションに欠かせないから」です。この「から」が泣ける程の大ヒントです。理由説明の「部分」を抜き出すわけですから、「むしろ」の後、「顔に表れる」から始めて、この「から」でシメます。

問４《傍線部説明》

問３と関連し合った問題です。傍線Ｄの直後にある「とくに、人間の『社会的知性』の中でも、人物の『認識』と『選択』について、『顔』は大きな意味を持っている。いわば、『見た目で判断』の最大の基準は顔なのだ。」、これが「ラベル貼り」の説明箇所で、最大の根拠・ヒントです。したがって、正解は③です。最終段落にも「他者の認識や選定」とありますよね。①の「無自覚な判断」や④の「日常的な意味の付与」は正反対で、対比混乱の誤りです。本文には「日常的に無自覚に行っているために、その（「顔」のことです！）意義に気がついていない」とあります。「顔」の大切さがわかっていない選択肢となります。②の「無機な記号」は「顔」の対比になっている「名前や党名」です。したがって対比混乱の誤りを形成します。⑤の「生物学的な機能」も対比混乱の誤りです。私たちは「顔」に「機能以上の『意味』を付与」している。これが「ラベル貼り」です。

模範解答

問１（一）完結した脳のメカニズムを生理学的なアプローチで解析する状況。
（二）脳の機能では個体よりも他者との関係性という社会的知性の重要性があきらかになった。

問２　B＝⑤　C＝②

問３　顔に表れる〜せないから

問４＝③

第十一講　宗教論・日本文化論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

明恵

自然への親近感の度合いが極めて深い

華厳の教え＝自然に接し、自然の心を知る

島も人も同等

「もの」と「こころ」の相互浸透

↕ **主な対比**

敵役・比較相手

一般の日本人＝自然への親近感

明恵の弟子＝華厳の教えを学ぶ途上

非分の世間＝物いわぬ桜に手紙を書くことを「狂気」あつかいする

↕ **小さな対比**

脇　役

手紙を出した桜の正確な位置

《解説》

問１《空欄補充》

文脈に関係のあるいわばキーワード補充の問題です。まず A は主役である明恵の態度を説明する言葉が入ります。しかも弟子との対比です。弟子は人間でもないしかも無生物の島に手紙を持っていってどうすればよいかわからず、明恵に「尋ね」ています。まだまだ修行が足りませぬな。一方、わかっている明恵は A の具合に「答えている」のです。③の「当惑したように」はいちばんマズイです。これは弟子の態度であり、対比混乱の誤りを形成します。その正反対の②「事もなげに」が正解です。このすました態度にユーモアがあります。ゆえにこの後の表現、「いたずらっぽい微笑」や「彼は遊びに真剣になることのできた人」にもつながります。①の「冷やかに」や④の「強い調子で」では弟子たちは氷つきます。「微笑」と矛盾します。次に E です。こちらは手紙の文面に明恵の気持ちがよく表されているということで、③の「綿々と」が正解です。④の「朗々と」だと〝朗読〟つまり声を挙げて読むときの描写です。読み上げるのは弟子です。ここはあくまで手紙の文面での言葉の尽くし具合です。もちろん①の「あっさりと」では明恵の熱意に反します。②の「暗然と」は悲しい気持ちで心が暗い様子です。まったく適合しませんね。手紙に「涙眼に浮かび」とありますが、島への思慕・懐かしさの感動ですからね。悲しみじゃありません。続いて F です。こちらも対比を踏まえています。桜の木の場所をめぐる議論は〝置いといて〟、ということです。地理的な位置確定の話より明恵が「強調したいところを理解することが大切」ということです。この対比をなりたたせる語句は、③の「それはともかく」だけです。

問２《傍線部説明・抜き出し》

「島に対して手紙を書くことの理論的根拠」は華厳の教えのことです。その内容は、傍線部のすぐ後に次のように書かれています。「国土というものは『華厳経』に説く仏の十身中の最も大切なものであり、毘盧舎那仏のからだの一部である、つまり、島は如来そのものだ」です。設問条件が十字以内ですので、「島は如来そのものだ」を抜き出します。島は仏様が姿を変えたものなのだよ、だから手紙を書くのだよというわけです。

問３《空欄補充・抜き出し》

Ｃには「このような」という指示語とカギカッコが付いていますから、空欄より前に一度登場している語句だとわかります。二文字ということで「手紙」と解答した人もいると思いますが、それは〝部分的指摘〟です。もっと大きく〝弟子を遣わして島に手紙をおくる〟という一連の行為の全体を示す言葉です。第二段落にあるように、明恵はそうした「遊びに真剣になることのできた人」です。したがって「遊び」が正解です。

問４《傍線部説明・抜き出し》

傍線部は「非情」つまり島には心などないと決めつけて、「衆生」つまり生命あるもの、とりわけ人間との間に隔て・区別を考えてはいけないという意味です。これと同じ意味内容を表現している十字～十五字以内の表現を探します。最終段落の「『もの』と『こころ』の境界は、限りない相互浸透性をもっている」も同じ意味ですが字数が適合しません。またここは傍線Ｇです。他の設問箇所が別の問いの答えになるということもふつうはしません。そこで「島も人も同等なのである」を採用します。十一字です。なにより、隔てなし区別なし境界なしをズバリ言い当てています。句点（。）を入れて十二字でもＯＫです。

問５《傍線部説明・選択肢》

今回の文章における主役・メインメッセージを問うものです。まず③は「区別や境界の意識を明確にしよう」が×です。これじゃ「非分の世間」レベルです。島や桜に手紙を出すような行為を頭のヘンなヤツとみなすレベルです。はっきりと対比混乱の誤りです。④は「不安定な」という否定的表現が×です。筆者は、明恵に見られる人間と自然の境界のなさ、「もの」と「こころ」の境界のなさをポジティブに肯定評価しているのです。記述に反すると言ってもよいし、対比混乱の誤りと呼んでもＯＫです。さて、そうかといって自然界のものすべてが平等かというと、そうではありません。「国土」「島」がとくに大事なわけです。したがって①の「自然界の存在物すべて」、⑤の「あらゆる自然」が典型的な不当な全称判断となります。本文の通りが大事で、大きく言い過ぎても縮めすぎてもダメです。正解は②です。

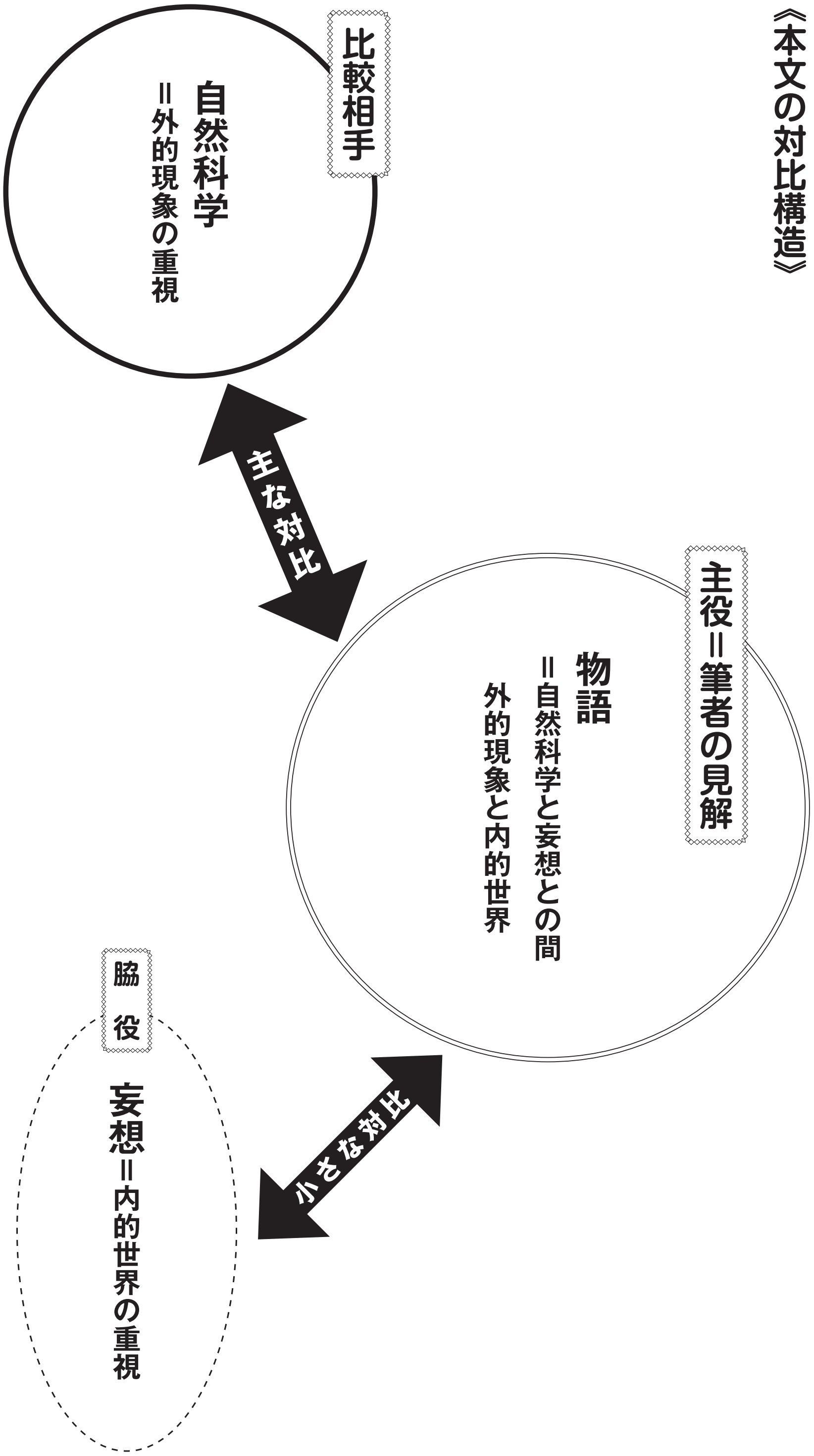
模範解答

問１　A＝②　E＝③　F＝③　問２　島は如来そのものだ　問３＝遊び

問４　島も人も同等なのである　問５＝②

第十二講　科学論・心理論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・記述》

傍線部の理由説明を書きます。まず「同じこと」は、直前の「『納得』はしなかったであろう」と同じだよということです。「『正しい』知識」というのは、大人から教えられるものや自然科学の説明です。たとえば、セミは求愛行動として一秒回に数百回刻みで羽と腹を振動させているというような説明です。さて、お母さんの乱暴な「せみはミンミンと鳴くものですよ」「せみは鳴くのが仕事なのよ」というヤッツケ回答にも納得せず、昆虫図鑑に載っているような説明にも納得しないのはなぜかを書きます。シンプルに言うと、自分の心が関わっていないからです。というわけで、得点になるポイント箇所を言います。第一ポイント「子どもは」という主語、第二ポイントは「自分の」「自分なりの」、第三ポイントは「気持ち・内面・内的世界・内的事実・心」が入った「物語」、第四ポイントは「納得」です。順番は問いません。自分の解答にこれらに該当する箇所があれば、足し算し、得点とします。四つのうち二つ以上取れると国公立大学合格水準です。

問２《傍線部説明・抜き出し》

「心」側が入る、筆者おススメの側の言葉です。本文中に何度も出てきます。「納得がいく」でも「納得のいく」でも「納得できる」でもいずれでもＯＫです。

問３《傍線部説明・記述》

今回の敵役・比較相手である「近代人」の視点からの「物語」の説明です。筆者の視点からなら「物語」はよいものとしてポジティブに説明することができますが、この設問は「物語」への悪口、批判です。「近代人」は「自然科学」の説明を優れたものと考えますから、それと比べたときの「物語」の欠点を挙げていくわけです。では、得点になるポイント箇所を挙げていきます。第一ポイント「自然科学と比べ」「自然科学と違い」「自然科学と異なり」などの表現です。第二ポイント「すべての」「普遍的」「広い」「広範な」、第三ポイント「現象の説明」「説明」、第四ポイント「正確ではない」「役立たない」「都合が悪い」などです。順番は問いません。四つのうち、二つ以上得点できるとよいですね。

問４《空欄補充・抜き出し》

相互に対比になるキーワード抜き出しです。Dは「内的事実」との対比、Eは「外的事実」との対比です。したがってDは「外的事実」もしくは「外的現象」と決まり、Eは「内的事実」もしくは「内的世界」と決まります。

模範解答

問１　子どもは、自分の気持ちと関わった物語でないと納得しないから。
（子どもは、自分の気持ちと関わった物語だと納得するから。）

問２　納得がいく（納得のいく、納得できるも可）

問３　自然科学と比べ外的事実の普遍的な説明には役立たないもの。

問４　D＝外的事実（外的現象も可）　E＝内的事実（内的世界も可）

第十三講その１　趣味論・工芸論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

蒐集

＝興味・性癖・夢中・熱中・情・意・勇敢・前進・不義理・愚かさ・人間らしさ・遊び・無用の用・非合理・冒険

対比

敵役＝常識

理性・打算・知・退却・予算・冷静・義理・利害・合理的

《解説》

問１《空欄補充》

筆者は、「常識」とは違い（だからこそ、こうして本を書いているのです。常識レベルと同じ考えなら本など書きません！）蒐集を人間らしい、しかも勇敢な行為としてほめたたえています。一方 A は、その反対で、蒐集を止める方です。「人間をいくじなくする」方です。①の「蒐集」、②の「情」、③の「性癖」、④の「前進」すべて筆者側のキーワードで、対比混乱の誤りということになります。⑤の「打算」が正解です。本文によれば、蒐集は「打算の外に出て行く」行為ですから。まさに見事なグループ分けの問題です。

問２《傍線部説明》

筆者がいう「人間らしさ」です。コレクションに夢中になり、財産や予算などスコンと忘れてしまうようなカワイイ（家族は迷惑だろうな）側面です。理性や冷静さや計算高さの正反対です。というわけで②の「愚行」です。本文によれば「常識的には愚の骨頂だが、この愚かさに達してこそ妙味がある」「平気で愚かなことをするのは、どこか自分を忘れ得るいい性質」です。まさに文脈しだいですね。「愚行」は一般的にはネガティブ表現なのに、筆者によれば、人間らしさの刻印なのです。①の「義理」は対比混乱の誤りになります。本文によれば「不義理しても買いたくさえなる」とあります。③の「退却」、④の「打算」も冷静さ常識グループの言葉ですからね。⑤の「貧乏」はレムブラントの例です。具体例は、選ばないのが原則です。また、「貧乏なんか結局どうでもよかった」とあります。この点では記述に反する誤りとも言えます。

問３《傍線部説明》

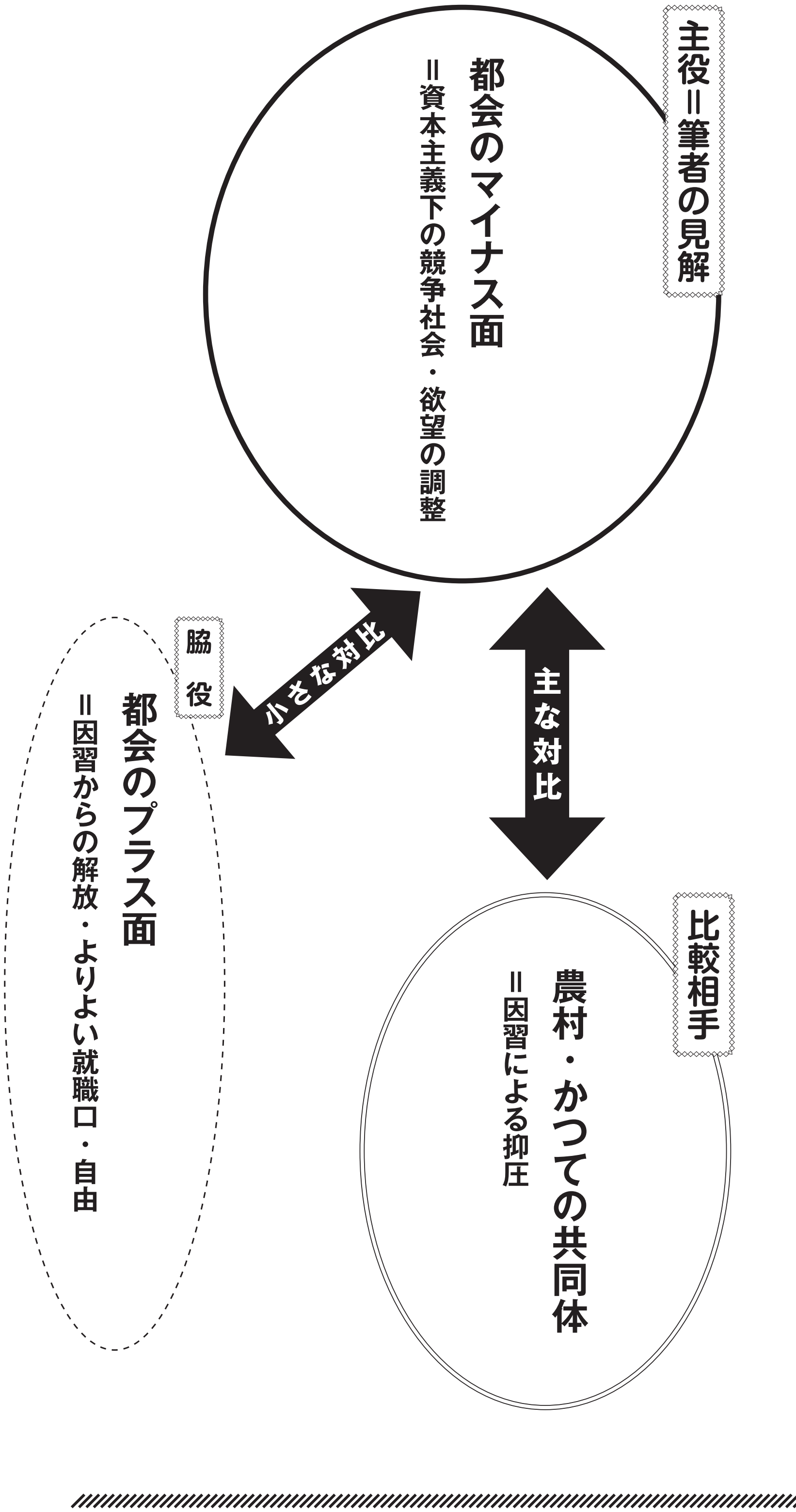
こちらも筆者の見解を聞いています。②は正しい対比喪失の誤りです。「ひとつのことにかける」のか〝ふたつではダメ〟なのか、本文では比べられていません。こうして吟味の際、この選択肢中の言葉は何と比較しているのかなと考えると、ヘンだぞとか、いいぞとか分かります。④「十分な時間」が×です。コレクションに夢中になるとせわしなく忙しくなるはずです。記述に反する誤りです。⑤の「経済的なゆとり」もはっきりと本文の記述に反するものです。本文によれば「金があれば品物を集め

ることができると思われるかも知れぬが、一面の見方に過ぎない」「金があり余って集めるなら、さぞ面白さは減るだろう」とあります。それに、お金に余裕があるからコレクションするのは、冷静な計算の上ですから、対比混乱の誤りとも言えます。③はどうでしょう。「貧乏などを忘れて」が×です。問２の⑤と同じで、これも具体例ですからＮＧ。さらに言えば、忘れるも何も「貧乏なんか結局どうでもよかった」のです。したがって、記述に反する誤りとも言えます。①が正解です。本文によれば「要りもしない蒐集がこの世には入り用なのである」です。

模範解答
問１＝⑤　問２＝②　問３＝①

第十三講その２　現代社会論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明》

間違い探し、しかも二つ。②は、まず「欲望をすべてかなえるのは不可能」という記述に反する誤りです。また、こうした記述に反して「あらゆる・すべての・いつでも・どこでも」とやってしまうものを不当な全称判断と言います。「欲望をすべて満たす」のであれば、調整のための競争など起こりませんからね。③は「抑圧」が×です。都会での説明で「抑圧」という語を出してしまいましたが、「抑圧」はひとえにかつての村落共同体の言葉です。敵役キーワードです。つまり典型的な対比混乱の誤りです。他は記述にかなっています。こうして一単語レベルでグループ分け（主役キーワードか敵役キーワードか）が問われるわけです。選択肢へのこういう注意の向け方ができるようになれば、入試現代文の得点力は如実にあがるわけです。これはセンスじゃなく、訓練です。

問２《空欄補充》

主役キーワードが入ります。都市の説明、しかも、逃げ出したくなるような、旅にでも行きたくなるような都会のマイナス面です。それは競争社会と同義語の「資本主義」です。①が正解です。②の「解放～自由」は都会の説明ではありますが、プラス面です。逃げ出す必要のない側面です。これはこれで対比混乱の誤りです。③も同じ対比混乱の誤りです。「活気あふれる都会」なんて、しらじらしー！　と声をあげたくなるほどプラスです。④の「よりよい就職口」も、これまた同種の対比混乱の誤り。⑤はどうでしょうか。「村を脱出して都会へ」では都会のマイナスの語りになりません。それに「歴史」もマズイ。歴史、過去からの逃亡ですか、未来へ？　あんな過去などなかったことに？　もちろん、こんなことは書いてありません。すなわち〝過去・歴史←→未来〟というヘンなものを比べていると考えて、正しい対比喪失の誤りとしてもよいでしょう。

模範解答

問１＝②・③（順不同）　　問２＝①

第十四講《随筆》道について

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

未知の道
＝見知らぬ場所・見知らぬひと
迷子への期待・異様に新鮮な不安

対比

比較相手

既知の道
＝複合的な散歩
見慣れたひと・見慣れた土地・日常・
あたたかい共同体・迷子への恐れ

《解説》

問１《傍線部説明》

筆者は「未知の道」（だじゃれじゃありません）重視で、そこで迷子になるトキメキを語っています（かなり変わったひとです）。さて傍線の「複合的な散歩」はその正反対で、すっかり見慣れたなじみきった町でしかできないものです。⑤が正解です。①は「知らない道に不安」が×、③は「慣れない町の知らない道」が×、④は「知らない道」が×です。ことごとく対比混乱の誤りですね。②は未知から既知への過渡期にある散歩です。まだなじみ切っていないからこそ「案外遠回り」ということになってしまうのです。これも対比混乱の誤りと呼んでいいでしょう。

問２《空欄補充》

外国での旅ですから、親しさやなじみの反対です。見知らぬ人、とくに異質性を強調する言葉である②の「異邦人」が正解です。⑤の「越境者」と迷うかもしれませんが、このなじみなさ、異質さを表現する言葉ではないため選びません。その他の選択肢はカスリもしません。ことごとく正しい対比喪失の誤りです。〝傍観者⟷参加者・当事者〟〝逃亡者⟷参入者・残留者〟〝自由人⟷奴隷〟など本文は比べてないよね。こうして反対語を考えるとおかしな選択肢のオカシサが分かります。

問３《傍線部説明》

既知・なじみ・あたたかい共同体重視の視点からすれば（比較相手の視点だよ）、「迷子になることを恐れ」るわけですが、同時に筆者は未知なるものへの「期待」、迷子になることへの「期待する心」も重視しているわけです。しかもメインは後者です。①はこの関係が逆転しています。対比混乱の誤りと言えます。②は「いつまでも子供のままであり続けたい」が笑えます。ピーターパンかよ！ネバーランドか（けっして大人にならない国だよ）！本文には「わたしは、自分が迷子になったあのときの、ひりひりとした、異様に新鮮な不安を、大人になった今、時々、味わいたいと思うことがある」とありますが、このことと「子供のままで」とは全く異なります。記述に反する誤りです。③は「日常生活を有意義なものに改善しようとする心」がえらく道徳的ではありますが、×です。なぜなら、迷子への「期待」とは「日常」から離れることだからです。「日常」を「不意に見失っ

て〜茫然としてみたい」という衝動です。したがって記述に反すると言ってもいいし、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。⑤はまず前半部の「不安」の内容が×です。正しくは「迷子になること」が不安なはずです。それなのに「他人に気づかれること」にすりかわっています。記述に反する誤りです。さらに後半部「自己主張」「率直」が×です。そのようなことができる・できないは比較になっていません。まさしく正しい対比喪失の誤りです。④が正解です。「日常」から離れるのが「迷子」ですから「非日常」と表現してOKです。

問４《全体の主旨説明》

②は「大人になってからも〜迷子になることを恐れることが多かった」が×です。むしろ迷子への期待でしたよね。記述に反する誤りとも対比混乱の誤りとも言えます。③の「知らない道を歩くことに恐怖感を覚えるようになった」も迷子への期待と真っ向から反します。記述に反するとも対比混乱とも言えます。⑤は「方向感覚が次第に鋭く研ぎ澄まされてきて」が×です。これじゃ〝方向音痴⟷方向音痴の改善〟という奇妙な対比になってしまいます。もちろん本文の正しい対比喪失の誤りです。シラジラシーと叫びそうです。①と④が本文の内容に合致しています。

模範解答

問１＝⑤　　問２＝②　　問３＝④　　問４＝①・④（順不同）

さて、これで高１高２現代文の全問題が終了しました。やりとげましたね。この早くからのスタートを生かし、次々と発展的学習を進めてください。スタディサプリでは「高３トップ＆ハイレベル現代文（全二十四講）」をご用意いたしております。高３になるまで待たずにどんどん手を出してくださいね。

復習問題解答

復習問題　解答　第一講

（ア）①　（イ）②　（ウ）④　（エ）⑤　（オ）①
（カ）⑤　（キ）④　（ク）②　（ケ）③　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）絶対　（イ）普遍　（ウ）退屈　（エ）標準　（オ）経過
（カ）創造　（キ）仮想　（ク）志向　（ケ）貴重　（コ）表象

復習問題　解答　第二講

(ア)③　(イ)①　(ウ)⑤　(エ)②　(オ)③
(カ)②　(キ)①　(ク)④　(ケ)⑤　(コ)③

解答漢字一覧

(ア)技巧　(イ)駆使　(ウ)漠然　(エ)威力　(オ)究極
(カ)高揚　(キ)覚悟　(ク)陶器　(ケ)肝要　(コ)堕落

復習問題　解答　第三講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）②
（カ）①　（キ）②　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）酸味　（イ）冒険　（ウ）征服　（エ）競争　（オ）不細工

復習問題　解答　第四講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）③　（オ）④
（カ）②　（キ）⑤　（ク）③　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）陶酔　（イ）遵守　（ウ）筆頭　（エ）優雅　（オ）獲得
（カ）渦中　（キ）余剰　（ク）体現　（ケ）遅延　（コ）奇跡

復習問題　解答　第五講

（ア）④　（イ）④　（ウ）①　（エ）②　（オ）⑤
（カ）②　（キ）③　（ク）③　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）開催　（イ）圧倒　（ウ）模様　（エ）斬新　（オ）包摂
（カ）排除　（キ）挑発　（ク）中継　（ケ）発散　（コ）彫刻

復習問題　解答　第六講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）③　（オ）③
（カ）⑤　（キ）⑤　（ク）④　（ケ）②　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）奇異　（イ）制御　（ウ）範囲　（エ）偶然　（オ）配慮
（カ）帰属　（キ）平衡　（ク）移入　（ケ）依拠　（コ）危険

復習問題　解答　第七講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）①　（オ）③
（カ）④　（キ）④　（ク）③　（ケ）①　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）苦悩　（イ）僧侶　（ウ）埋没　（エ）平穏　（オ）救済
（カ）資格　（キ）述懐　（ク）真率　（ケ）省察　（コ）告白

復習問題　解答　第八講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）①　（オ）③

（カ）①　（キ）③　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）一隅　（イ）鎮座　（ウ）繁茂　（エ）賛嘆　（オ）礼拝

復習問題　解答　第九講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）③　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）排除　（イ）異彩　（ウ）原則　（エ）刺激　（オ）筆頭
（カ）心境　（キ）形容　（ク）斬新　（ケ）依存　（コ）逆説

復習問題　解答　第十講

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）④　（オ）②
（カ）②　（キ）①　（ク）④　（ケ）②　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）本格的　（イ）契機　（ウ）細胞　（エ）示唆　（オ）先端
（カ）完結　（キ）奉仕　（ク）報酬　（ケ）貨幣　（コ）提唱

復習問題　解答　第十一講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）①　（エ）③　（オ）②
（カ）②　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）草庵　（イ）記録　（ウ）経典　（エ）習慣　（オ）情景
（カ）随分　（キ）案内　（ク）挨拶　（ケ）浸透　（コ）決意

復習問題　解答　第十二講

（ア）③　（イ）②　（ウ）④　（エ）①　（オ）④

（カ）②　（キ）③　（ク）④　（ケ）④　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）観察　（イ）解釈　（ウ）結晶　（エ）供給　（オ）普遍性

（カ）妄想　（キ）放棄　（ク）排除　（ケ）周知　（コ）現象

復習問題　解答　第十三講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）②
（カ）③　（キ）②　（ク）④　（ケ）③　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）打算　（イ）義理　（ウ）競争　（エ）性癖　（オ）勇敢
（カ）遊戯　（キ）因縁　（ク）冒険　（ケ）境地　（コ）感嘆

復習問題　解答　第十四講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）⑤　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）②　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）遠心力　（イ）理不尽　（ウ）緊張　（エ）明瞭　（オ）容易
（カ）危機　（キ）生涯　（ク）期待　（ケ）複合　（コ）想像